

60

634

精常活養篇

別所彰善著

上卷ノ三



始



別所彰善著

院長

精常活養篇

上卷三

療病治心前期講習錄

精常院藏版

60-634

精常院之長

別所彰善著



精常活養篇

上卷ノ二



精常院藏版

精常活養篇

第三講 疾病の原理

上卷ノ三目次

精常活養篇 上卷ノ三目次

第三講 疾病の原理 (疾病治癒機轉)

自然療能 || 療病能力之本態 三二七

【第四圖】細胞の繁殖圖 (三三〇)

【一】自衛作用 || 自家豫防機能 三三三

【第五圖】眼内異物排除の說明圖 (三三九)

細胞の食菌作用 (三四一) 【第六圖】食菌細胞游出の想像圖 (三四二)

【二】自治作用 || 自家療病機能 三四三

フルンケルの自治機轉 三四三

【第七圖】皮膚の圖 (三四四) 【第八圖】皮膚腺内へ浸入せる化膿菌の繁殖說明圖 (三四五)

【第九圖】結締織細胞の進行性變性圖解 (三四六) 【第十圖】フルンケル自治機轉の過程圖解 (三四七)

自然的治癒と人爲的治癒との優劣 三四三

肺結核の自治機轉 (三四三) 結核免疫 (三四五)

代償作用 (三六〇)……………心臟病の自治機轉……………二六〇

【第十一圖】 心臟諸瓣膜の圖 (三六一)……………【第十二圖】 左心房室内血行の圖解 (三六二)

【第十三圖】 僧帽瓣閉鎖不全症自治機轉の説明圖 (三六三)

肺の代償作用……………二六六

腎臓の代償作用 (三六六)……………【第十四圖】 右腎臓に於ける代償作用の圖解 (三七二)

生殖腺其の他の代償作用……………二七三

腦中樞部に於ける代償作用 (三七三)……………記憶力の代償 (三六〇)

【三】 ホルモンと内分泌作用……………二六二

外分泌と内分泌 (二六二)……………【第十五圖】 外分泌腺の圖 (二六三)

(1) 副腎のホルモン……………二六五

精神感動とアドレナリン……………二六六

検尿病者に終生糖分の消失せざる理由……………二九〇

ホルモンと調和作用……………二九二

(2) 甲状腺のホルモン (二九二)……………【第十六圖】 甲状腺の圖 (二九三)

(3) 脾臓のホルモン (二九三)……………糖分産造の制止 (二九四)

性慾の消長と男女性……………二九六

(4) 松葉腺のホルモン (二九七)……………【第十七圖】 大脳縦断面の圖 (二九七)……………早熟の一原因 (二九八)

(5) 大脳下垂體のホルモン (二九八)……………晩熟の一因 (二九八)

(6) 生殖腺のホルモン (三〇〇)……………雌性性を全然一變せしむる實驗 (三〇四)……………去勢による變性男女の特徴 (三〇三)……………性慾の抑制と振作 (三〇三)……………性慾の人為的増減に關するスタイナーツハ氏の實驗 (三〇三)……………神經性陰萎の原因 (三〇〇)

蛋白の靈能と血清の偉效……………三二二

人種の差異と蛋白の相違 (三二二)……………(1) 蛋白の特性 (三二三)……………(2) 血清反應

(血液の成分) (三二四)……………(3) 免疫性 (三二五)……………シフテリ―治療血清の由来 (三二六)

【四】 藥物過信手術濫用の弊風と醫術の眞諦……………三二六

慢性肥大到陥れる扁桃腺腫の自治 (三二〇)……………化膿性中耳炎の自治實例 (三二〇)

……………醫術の眞諦 (三二二)

天醫と人醫の調和 (三二三)……………再生現象

自然的療法……………三三六

【五】 療病能力促進に關する心的工夫……………三三一

文明の眞目的 (三三三)……文明的利器と幸不幸 (三三三)……去實就華の弊習 (三四六)……
……體裁はる勿れ (三三七)

生命と新陳代謝

……三三九

知識思想の新陳代謝 (三五〇)……感情の新陳代謝 (三五〇)……神經過敏家と有難
屋 (三五二)……癩癧の療法 (三五七)……安價な慈善 (三五七)

疾病の恩恵

……三三九

舌苔の意義 (三五九)……代價月經 (三五九)

活養篇第三講通讀感想録

〔附 録〕 活養生即活修養治驗實例

〔第八例〕 手術にあらずんば死！と宣言されし
腹膜炎の活養生治驗例……………三五七

〔第九例〕 重症腹膜炎兼肋膜炎及び肺病患者の奇蹟的活養生治驗例……………三五七
炒豆に花の歡喜……………三七〇

目 次 了

精常活養篇 上卷ノ三

別 所 彰 善 述

第三講 療病之原理—疾病治癒機轉

自然療能(治病能力之本態)

前講に於て余は「疾病の本態」と題し、從來世に行はれし有らゆる療病法の由來を釋ね、近世科學の進歩によりて、古來その猛威を振ひし彼の獨斷的神祕的療病觀や傳説的迷信的治病法の打破せられたる喜びと共に、世人が餘りに科學的人生觀の謬見に囚はれて精神の修養を怠り、人間の療病上最も大切な精神療法を開卻せし結果、卻つて原始的迷信の流行を促すやうになつた物質崇拜や醫藥萬能の現代的弊習を論じ、尋いで精神の肉體健全に及す影響の如何に偉大なるかの實證として、近時流行の保守退嬰的悲觀

自然療能

式養生々活より積極的樂觀的にこく式活養生活へ其の心機を轉換せし結果、多年難治の心身の痼疾を免れ得し種々の實例を擧げ、以て樂觀的活動生活の急務なる所以を説きました。

それで、諸君は今後如何なる難症に胃さるゝやうなことがあつても、最早彼の怪しげなる鬼神や狐狸の前に懼伏したり或はその實際的効價の疑はしい新薬を濫用さるゝが如きことは恐らく無からうと思ひます。併し多年唯一の力と信じた薬も或は加持祈禱呪咀禁厭等の所謂法力も、案外頼むに足らないものだといふことを知つたばかりではまだ「今後果して何を力に總ゆる病魔に抵抗し得べきか」……その由る所が判りませぬ。それでは養生の方針も修養の目標も定まらず、従つて心の愁眉ものびねば、**こく**のはらも擴がらぬ道理でありますから、**本夕は一體**

疾病といふものは如何して治るものか

抑「如何なる力で疾病が治癒するものか」といふ事、即ち「療病の原理」を明かにする爲、此に「治病能力の本題」をお話し致さうと思ひます。

尤も、これは目前何の病氣もない健康なお方には餘り必要もないこと、やうに見えますが、然し人間は「病の容器」と申して如何に壯健な方でも何時怎んな病に罹らぬともいへませぬ。殊に從來一般の醫家や衛生家が、多く疾病の樂觀すべき方面を説かずに、たゞ其の恐るべき所以のみを力説しましたため、少しでも衛生思想のある人は、その所謂衛生思想のため何等恐るゝに足らない現象をも非常に顧慮し、卻つて疾を招くやうなことも往々ありますから——無知蒙昧者は別として——苟も現代の知識を有せらるゝ方は、如何に健康であつても、是非とも左の疾病治癒機轉なるものを一通り御了解あらんことを希望致します。

さて、「疾病治癒機轉」即ち「病の治つて行く過程」といふものは非常に複雑なもので、種々六かしい専門學的理論を澤山並べ立てゝも容易に理解し難いことばかりであります。兎に角昔のやうに怎んな病でもたゞ神佛の力で治るものだと考へたり、又近代人のやうに如何なる疾病も醫藥や電氣ラヂウム等の理化學的物質の力のみで治るものだと思ふのは根本的に誤つ

細胞の繁殖法

第四圖



た考で、實際、病を治す方の本源はお互自身の肉體を構成せる細胞そのものの中に宿つて居るのであります。

元來總ての生物即ち生命のあるものは、前講「科學的病理觀」の處(第二講一〇三頁参照)で略述して置きましたやうに、お互人類を始め禽獸魚草木からアメーバAmoeba・細菌の末に至るまで、何れも皆細胞といふ物體、否生體から其の身體が形成せられて居るのであります。而して此の細胞なるものはチヨット顯微鏡で覗いた所では、たい薄い膜囊の中に原形質といふ蛋白質が満され、其の中央に核があるといふ極めて單簡なものに過ぎませぬが、猶ほ之を仔細に吟味して見ますと、その構造は實に複雑を極めたもので、到底今日の顯微鏡位ではその真相を窺知することができないほど精巧緻密で、従つて其の機能も容易に人智の臆測を許さぬほど實に靈妙不可思議なるものであります。

例へば彼のアメーバや細菌、滴蟲の如きは、いづれも箇々獨立した、たい一箇の細胞體でありますが、開れども彼等はよく新陳代謝、即ち自己の生



活に必要な養分を體外から攝取したり、不用な老廢物を體外に排泄する作用や、又任意に其の細胞體を伸縮して適宜の場所に移動する運動機能、其の他己が生命の敵に對抗すべき自衛—自治作用から己が種族保存の大事業までも、悉く此の么微な一箇の細胞で立派に營んで居るのであります……殊にかういふ單一な細胞で出来上つた生物の繁殖法といふものは極めて單簡なものであります。何れの細胞でも、それが一定の成熟期に達しますと、其の核(イ)が(ロ)のやうに分裂を始め、次いで(ニ)のやうに核が全く分離して了ひますと、體て細胞の外側の膜の中央に瓢箪形の絞窄部が出来、それが(ホ)のやうに段々深く溢れて、遂に(ト)の如く二箇の小さな細胞に別れ、各々獨立の生活を營むやうになります。

斯うして新らしく産れた二箇の幼い細胞は、其の後漸次發育して大きくなり、又各々同様の方法で二箇に分裂して四箇の獨立生物となり、其の四箇が大きくなると又八箇に分裂する……又中には初めからその核が三箇若しくは四箇宛に分裂して、一箇の生物が一度に三箇或は四箇の生物

になるものもあります。斯く倍加的又は倍々加的に殖えて行きますから、斯ういふ単細胞生活體の増殖率といふものは實に驚くべきもので、瞬時に幾千萬億といふ多數になります……如何に目にも見えないやうな微細な細胞でも、之が幾兆億といふ澤山な数になりますと其の勢力は侮り難いもので、遂には萬物の靈長と自稱する人間さへも瘡すやうな事もあるのであります。

所で、多數細胞の集合體たる高等の植物や動物の身體でも、其の胎生中には各細胞が卻々旺に分裂増殖しますが、殊に我々人間の身體では、成人するに従つて人體細胞の増殖は段々衰へ、消化の仕事は胃腸の腺細胞、呼吸作用は肺胞の上皮細胞、排尿の事は腎臓の上皮細胞、運動は四肢の筋肉細胞、繁殖の業は生殖腺細胞といふ工合に、それごとく分業的になつて了ひますから、アメーバや細菌のやうに一人の身體を割つて二人の身體にしたり一度に三人の人間を造ると云ふやうな譯には行きませぬ。併し開れでも猶仔細に人體各種臟器細胞の生活現象を調べて見ますと、

凡そ皮膚—粘膜及び結締織等の細胞は勿論、その他筋肉血管乃至神經等の細胞に至る迄、何れの細胞でも皆夫々その細胞自己の生活に必要な新陳代謝作用や、凡ての病毒を防止し或は之を征服する抵抗力から分體増殖の機能迄も立派に具へて居ります。

殊に血液中の白血球及び其一種なる淋巴球といふ細胞や結締織細胞—凡ての細胞を連結せしめて一箇の組織又は臟器を構成するに必要な纖維狀細胞—などは、平素はそれごとく己が専門的分業的作用を行つて居るのみであります。若し一朝病敵が體内に侵入して來るとか、或は身體の何處かに損傷でも出來たといふやうな場合には、此等の細胞は速に分裂を始め、其の増殖率を高め、巨多の同種細胞を産んで、其の損傷箇所を修繕したり或は病敵に對抗して之を征服したり、種々特異の治病的能力を發揮するものであります。畢竟我々人間の病を治す力、即ち療病能力なるものは、我々人間の身體を構成せる細胞そのもの、内に宿つて居るのであります。それで若し細胞自己の力が無くなれば、如何に全智全能の神力でも、靈力

自然療能

あるラヂウムでも到底病を治すといふ事は能きない譯になるのであります
 が、併し斯くお互の此の身體を形造る細胞そのもの、内に自ら病を治す療
 病能力が宿つてゐる——敢て神佛や藥物の力を頼まずとも、生れ乍らにして
 自然に病を治す作用即ち「自然療能作用」といふものが、我々の身體に賦與
 せられて居る——といふ事は、吾々が此の長い人生てふ驛旅を續けて行く上
 に非常な強味でありまして、此の自然療能の妙機を十分に會得し且之を完
 全に働かせる工夫さへ怠らなかつたならば、最早疾病位に戦々兢兢として
 不快な月日を徒消する必要は無いのであります。

されば苟も世を教へ人を導かんとする者、殊に醫事衛生の事に従ふもの
 は、先づ何よりも此「自然療能」の事に留意し且之を善用すべき最善の法
 を講せねばならないのであります。兎角多くの所謂衛生家は此の大切な
 能力を等閑視し、卻つて此の妙機の破壊に力めつゝあるやうな傾向さへあ
 るのは實に遺憾千萬である……彼の陰陽五行時代の漢法醫ならばいざ知ら
 ず、苟も今日の醫學を修め、病理學の一面でも讀んだ者が、決して此の自

然療能の事を知らない筈はないのに、然も多くの醫家が此の妙作用を殆ど
 病者に告げず、たゞ醫藥を與へたり滋養物を攝ることのみを勤めて居るの
 は、丁度電燈の光輝に驚喜して電燈萬能と妄信し、白晝にも猶且兩戸を鎖
 して只管電燈の功德のみを説いて居るのと同様な始末で、實に物力過信の
 餘弊だと言はねばなりません。

余も以前は猶且此の物力過信、科學萬能黨の一人でありまして、折角病
 理學の講義で、人生に大切な此の自然療能の妙機を聞き乍ら、何時の間に
 か其れを忘れて了つて、何んだか藥が病を治すもののやうに思ひ込み、神
 經衰弱でも胃病でも皆藥餌の力で治さうとして、此の結構な自然療能の存
 在を無視し、丁度年中兩戸を鎖め切り、電燈ばかりで日を送らうとするや
 うな愚を演じて居たのであります。所が幸に偶然の動機から科學萬能てふ
 暗室を出で偉大なる太陽の靈力にも等しい此の細胞の妙機に心付き且之を
 善用する工夫を講じましたお蔭で、有らゆる己が病苦を驅逐する事が能き
 たのであります。怎んな難病者でも幸に此の自然の妙機を十分に會得さ

れましたならば、必ず療病上一大光明を見出さるゝに相違なからうと信じます。

尤も此の自然療能の話は醫師諸君には既に夙く御熟知の事柄のみで、今更斯麼通俗的な話を聞くのは御迷惑でもありませんが、併し「負うた子に淺瀬を教はる」と云ふ譬もあるやうに、從來堂々たる大家が素人の精常會員から自然療能の事を聞かされ、往々始めて眞醫術の妙諦を自覺されたといふやうな事實もあつたのでありますから、醫師諸君も暫く御清聴のうへ若し卑見に間違つて居る點があれば遠慮なく御是正を蒙り、又余の言ひ足らぬ點は吳々も御追加に預りたいものだと思ひます。

猶此に一言断つて置かねばならぬのは、一般の醫書には大抵「自然良能」と書いてあるのに、余が殊更「療能」といふ文字を用ひた理由であります……先刻も申しましたやうに、吾々は一字を習はず一物を學ばずとも、お互の身體細胞には自然に疾病を治療すべき能力があるのでありますから、「良能」即ち學ばずして能くするもの或は思慮せずして知る所の良能といふ

字を藉り用ひて置いて差支はないやうであります。併し孟子の所謂「良能」の良能は單に療病や身體自衛の事に關する能力だけを意味するものではなく、又自然療病能力といふ意を表すには寧ろ自然療能とした方が適切で、怎んなお素人にも通じ易いやうでありますから、余は特に「自然療能」といふ語を用ひた次第であります。

さて自然療能機の總べてのことをお素人にもよく了解さるゝやうに説明するといふ事は極めて至難な業で、現在の醫學上已に闡明し盡された疾病治癒機轉のホンの一部を述べることすらも卻々容易ではありません。ゆから本夕はたゞ怎んな御素人でもよく理解し得られるやうな而して諸君が諸君自身の病を癒し健康を増進して行く上に、直接役立つべく之を具體的に説明し得られるやうな二三の實例をお話して其の責を果さうと思ひます。

【一】自衛作用 || 自家防衛機能

元來お互の身邊は常に塵埃や細菌その他種々なる有害物に圍繞せられて
自衛作用 || 自家療病機能

居るのでありますから、若しそれ等の有害物が溢りに人體内へ這入つて来るやうなことがあつては、勢ひ健康を傷けられねばなりません。併し幸にも我々の身體には自ら是等有害物の侵入を防禦し得るやうな防衛機關が全身に到る所に設備せられてありますから敢て驚くには及びませぬ……

例へば若し埃や昆虫其他小さい異物——生れ乍ら人體内に存在する成分以外の物質は醫學上悉く之を異物と稱し、假令如何に無害無毒のものであつても、絶対に之を體内に留め置かないのが、生理上自然の原則である——が鼻孔に飛び込んで来ると忽ち嚏が出る。又目に何か異物が飛び込みさうだと感ずれば電光石火的に瞬目して其の侵入を防禦する。若し又咽喉に何か異物が侵入すると忽ち咳嗽の出るのは誰でも日常目撃する所で、畢竟此の瞬目や噴嚏や咳嗽などは皆體外から闖入し來つた害物を排除せんとする一種の自家防衛手段即ち自衛作用なのであります。

又、若し何か異物が目の中へ這入りますと忽ち涙が滾々と流れて参ります。之は涙腺(イ)から分泌した涙液を以て眼中の異物を洗い流して漸次目頭



(ロ)の方へ運び行き、目頭と鼻孔との通路即ち鼻涙管(ハ)といふ立樋の内へ流し出さうとする。猶且一種の自衛作用に外ならないのであります……それで何か眼の中へ這入つた場合には餘り騒がずに目を塞いでジツト休めて居れば、涙腺から

涙がドシ〜痛いて来て、何處にも傷のつかないやう旨く之を除き去つて呉れるのであります。所が斯んな自然療能といふ結構な作用のある事を知らないお素人方は、兎角周章狼狽して無暗と手で摩りますからツイ除れ易い異物でも其れが結膜や角膜面に擦り込まれて了つて、専門家の手でもチヨット除去し難いやうになる事が少くありません。それから又眼でも耳でも鼻でも、總べて入口のある所には、必ず硬毛と稱する硬い毛が劍の如く外方に向つてゐて先づ大賊の來寇に備へられ、若し之を侵す小賊があると即坐に之を涙や嚏といふ利器利法で追拂つて了ふといふ風に、如何なる微細な異物でも容易に這入り込めないやう、チャン

自衛作用 自家防衛機能

ト十分な警備が出来て居るのであります……尤も口腔内には毛がありませ
 んから什麼大きな異物でも飛込み次第のやうに思はれますが、どうしてど
 うして此處には又舌といふ機敏な門衛が備へて居つて、其れが一々來客を
 誰何し、決して胡散者の通行を許しません。萬一么微な細菌や微生物が此
 の敏感な舌神経や味乳頭の監視を掠めて咽頭深く侵入して來ますと、此處
 には濾胞といふ嚴重な關所があつて、すぐ件の曲者を引捕へて了ひます……
 ……よくお素人方は風邪氣味の際、それがたゞ熱だけであれば餘り心配もな
 さらぬが、若し扁桃腺が腫れ上つて咽頭にグリグリでも出來ますと、之は
 大變だと非常に騒がれる事があります。所が焉ぞ知らん、是は微菌を體內
 の重要部へ一步も侵入せしめじと極力此處で喰止めんとする一種の自然療
 能の現はれで、いはゞ扁桃腺なるものは空中の細菌を濾し取る所の濾過器
 に外ならぬのであります。

併し斯ういふ風に立派な歩哨や警備で要所を固めてゐても猶何うか
 すると異物が此等の關門を潜つて奥深く喉頭氣管邊まで侵入して來る事も

あります。が、此處にも亦一定の防禦装置がありまして、新鮮なる空氣以
 外のものが來ればコンク、咳嗽をして之を抛り出して了ひます。實に人體
 内の防禦装置は至れり盡せりといふべきであります。

貪食細胞游出の想像圖



第六圖

細胞の貪食作用

總じて微菌といふものは吾々の肉眼では見えないほど小さなものであります。殊に空氣中に生存して居る微菌は、時としてあらゆる防禦装置を潜つて遠慮會釋もなく氣管支から肺の深部迄もやつて來ることがあります。すると、此邊は一體神経のない所でありまして、殆ど防禦の道もないやうに思はれま

目衛作用 | 自家防衛機構

すが、そこは自然の有難さで、豫て全身血管内を巡羅しつゝある貪食細胞 Phagocytin といふ憲兵がこれを見付け次第に(第六圖)イ(ロ)ハ(ニ)圖解の如く血管から飛出して来て遂に其の病菌を(ホ)の様引つ捕へて了ひます。斯の如く我々の身體内には我々の知らぬ間にも、間断なく斯ういふ自衛作用が行はれて居るのでありますから、我々は自然に對して大に感謝せなければなりません。

【三】自治作用—自家療病機能

そこで、此の食菌作用(Phagocytose)即ち貪食細胞の働は、嘔や咳嗽のやうにたい異物を體外に驅逐するといふだけの消極的手段ではなくして、積極的に進んで微菌を喰ひ殺して了ふのでありますから、此の作用は自衛作用といふよりも、寧ろ自治作用といふべきであります。而して此の作用が殊に結核患者などの體内で、著しく旺盛になつて居るのは、要するに病氣が恢復に向ひつゝある證左なのでありますから、幸に此の作用が完全に働

さへすれば、少數の結核菌が飛び込んで来たくらの事は敢て恐るゝに足らぬ……彼の肺炎カタルなんかもこれで立派に退治さるべき筈なのであります。

所が、若し多數の微菌が一時に體内へ闖入したり、又體内で俄に微菌が繁殖したやうな場合には到底貪食細胞と微菌との一騎打ち位では追付きませぬ。そこで其んな場合には、我々の細胞は更に又一步進んだ戰略を用ひて美事に敵軍を征服致します。今その理解し易い一例を擧げて具體的に之を説明して見ませう。

癰腫の自治機轉

此に「フルンケル」(癰)俗に「ネプト」といふ腫瘍があります。之は誰にでもよく皮膚に出来る普通の腫瘍で……若しそれが顔面に出来た場合には之を面疔といつて古から生命取りの病の如く恐れられたものであります。併し他の場所に出来た場合には素人療治でも譯なく治癒する普通の腫物のことでもあります。

元來お互の皮膚なるものは極めて薄い物でありますが、其の表層は角質層——第七圖参照——といつて角のやうな性質でありますから、此の皮膚さへ完全であれば、什麼毒力の劇しい微菌でも決して此の皮膚表面から侵入して來るといふことは能きませぬ。所が若し少しでも皮膚に龜裂が出来たり或は餘り爪で引つ掻いたり致しますと、



第七圖

はドシ／＼殖えて遂に第八圖のやうにフルンケルとなるのであります。

前刻も申しました如く、總べて微菌といふものは極めて微弱なものであります。併し適宜の境遇を得ますと、僅か一疋の細菌でもそれが忽ち二箇又は三箇に分體して發育し、其の二箇或は三箇の細菌が各々又分體し

は餘り爪で引つ掻いたり致しますと、其處から化膿菌が皮膚の下へ送り込まれることがあります。而して若し化膿菌が無事に皮脂腺や毛囊の中へ送り込まれますと、此處は斯んな微菌の發育に都合のよい所でありますから化膿菌

て四箇或は九箇となり、更にそれが八箇又は二十七箇に殖えるといふふう

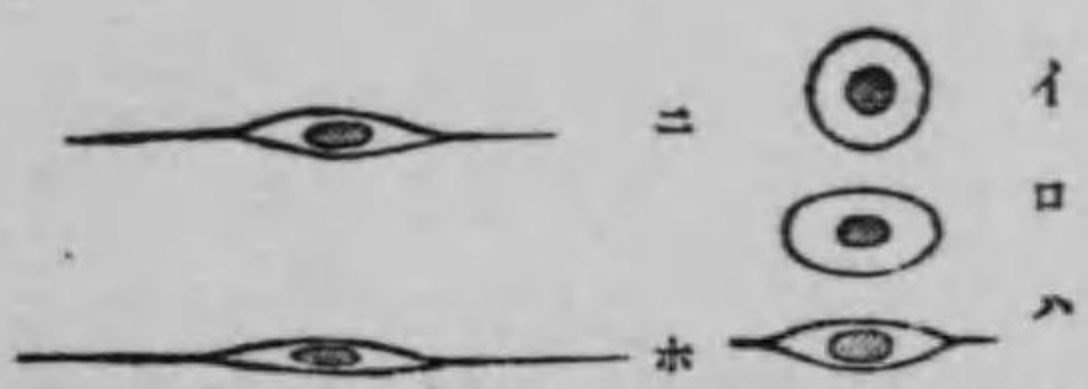
第八圖



ります。それで今若し化膿菌の發育に都合のよい、例へば皮脂腺のやうな所に這入り込みますと、その化膿菌は僅かの間に第八圖(イ)の如く數億萬といふ多數の菌群となりますから、斯處場合には逆も少數の貪食細胞位では之を

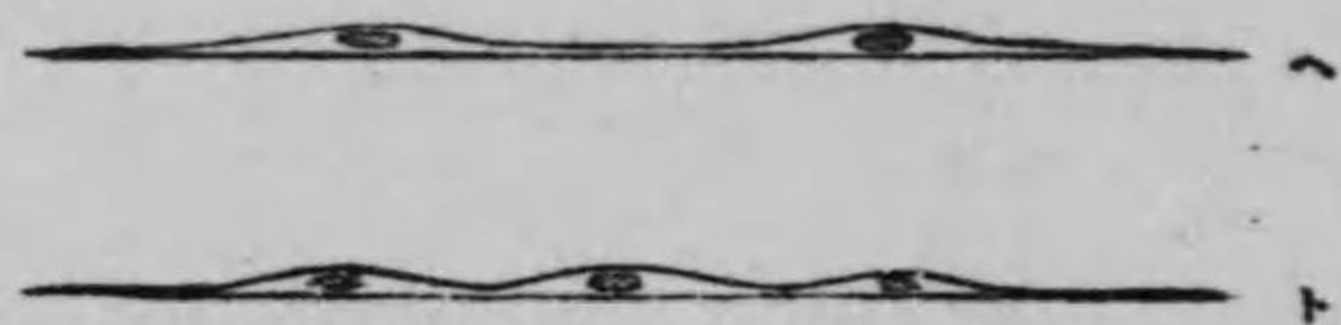
捕虜にすることが能きませぬ。そこで斯様な際には其の化膿菌軍の占領した部分——第八圖(イ)の周圍にある結締細胞といふ組織細胞が俄に活動を始めて……丁度彼の細菌が核分裂法で増殖するのと同様に、結締細胞もドシ／＼分裂して一箇が二箇、二箇が四箇、四箇が八箇といふ具合に盛に効い結締細胞を産出し、それで第十圖(ロ)の如く病敵菌團(イ)の周圍を取り圍み、先づ病菌の他に逸出せないやう包圍攻撃を試みます……その有様は豫て陸軍の少かつた米國が對獨宣戰布告以來急遽兵士を募り、俄訓練で作り

第九圖



上げた巨多の新兵軍で強い獨塊軍を包圍して凱歌を奏したのと、略似て居るやうであります。が、併し我が肉體王國の結締織軍なるものは、それが身體の何處であつても、其の敵軍の侵入した場所、自由に必要な新兵が産出せられるのでありまして、然も其の新に産出せられた幼弱結締織細胞なる新兵は生れながらにして軍略に富んだ、精銳無比の強兵なのでありますから、實に頼もしい次第であります。

尤も結締織の母細胞が此の新結締織細胞を生む爲にも、又新兵が包圍攻撃を爲すべく種々の活動をする爲にも澤山の兵糧が入る譯で……若しこれが人間の集つた國と國との戦争の場合であれば、假令軍用金は急に募る事が能きるとしても糧食には凡そ一定の限りがありまして、其の輸送にも亦多大の困難を嘗めねばならぬのであります。所が、人體内に於ける細菌軍と結締織軍との戦争の場合には實に便利至極なもので、何處でも細菌の侵入して来た部分の周圍に俄に新しい毛細血管第十圖(ハ)が續々發生して其處へドシ／＼多量の血液が集つて參りますから、細胞軍はその新生血管が



ら自由に所要の兵糧を得てズン／＼菌軍に攻め寄り、十重二十重に之を包圍して意のままに豫定の行動を進めることが能きるのであります。

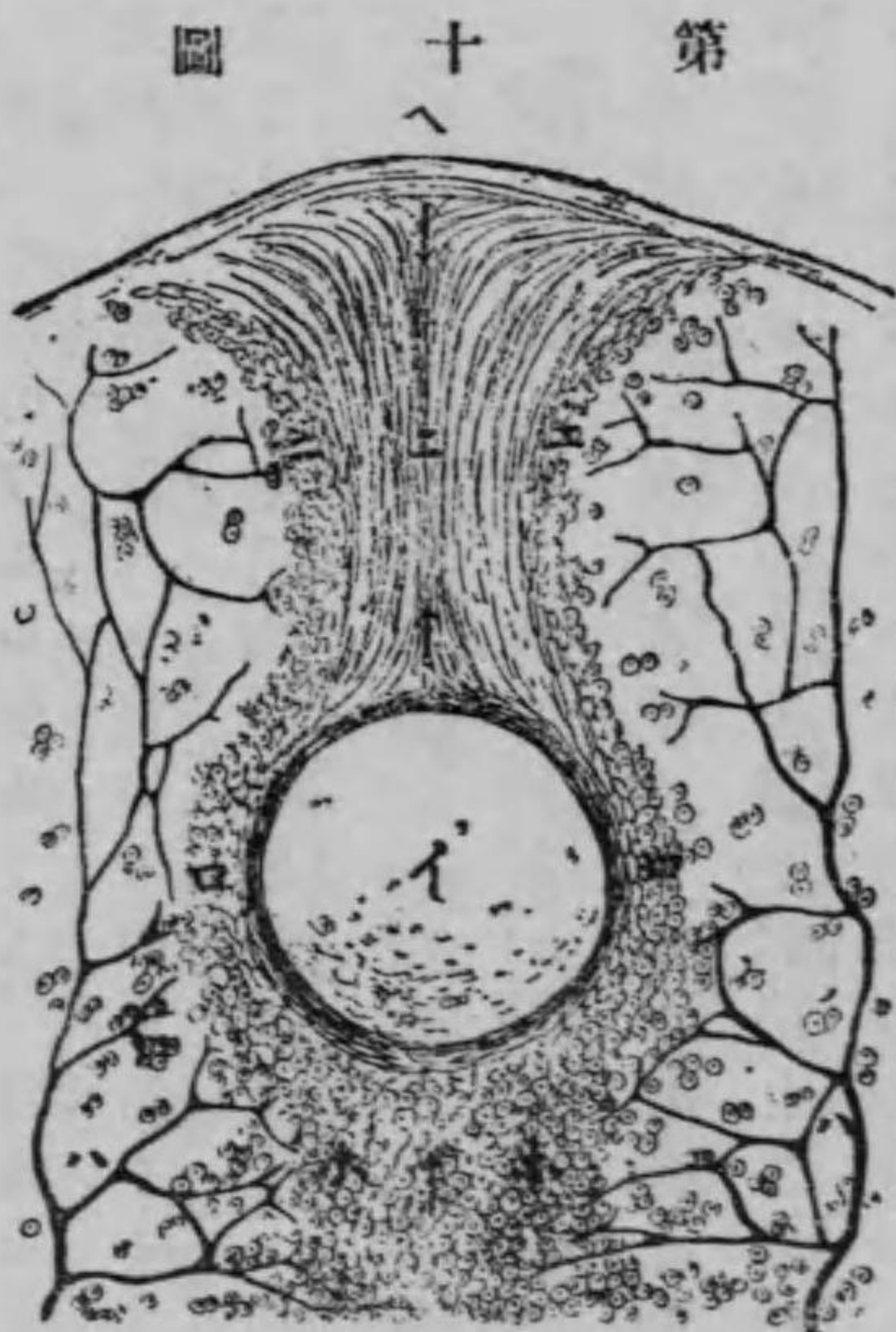
即ち幼弱な新生結締織細胞は、其の初は第九圖(イ)の如く類圓形のものであるが、漸次(ロ)の如く橢圓形或は紡錘形となり、病戰の酣なるに従つて漸次(ニ)の如く纖維狀に姿を變へ、遂に(ハ)の如く相互に手と手を繋ぎ合せて結締織網を作り、それが幾重にも重なり合つて立派な袋を造り、以て菌軍を完全に封鎖し全く敵の糧食を断つて了ふのであります……これには道が強力な菌軍も閉口で悉く戰役の運命を見ねばならなくなり所謂化膿に陥り軟い液狀の膿となつて了ひます。

猶戰爭が此處迄進まぬ以前に、直接菌團封鎖作業に關係のない結締織細胞軍から二箇の江兵隊が編成せられて、其の一隊は菌團の上方第十圖(ニ)に進出して皮膚と結締織囊との間に無数の索條を架し、菌軍を漸次皮膚の表面へ牽引すべくその江事を急ぎます。又他の一隊は殿軍となつて菌團の下部第十圖(ホ)に密集し、次第にこれを上方へ押上げ、斯く上下二隊の江兵が

協同的作業によりて、最初皮膚の深層にあつた腫物をも漸次皮膚の表面同
 圖(へ)の方へ押し上げます。斯うして恰度内部の菌團の軟化して了つた頃
 は、腫瘍と表皮との間が段々接近し、遂に腫瘍上の皮膚(へ)の部分は紙の様
 に薄くなり、ちよつと觸ると直に破れて膿が出るやうになつて了ひます。
 そこで、人為的か或は自然的かで腫瘍の口が開きますと直に敵の死骸即ち
 膿汁を全部体外へ抛り出して、間もなく下から肉芽細胞なる別種の江兵隊
 がズンズン進出して来てその口を塞ぎ、再び敵の逆襲して来ない様に城門
 を閉ぢて了ひます。斯ういふ工合にフルンケルをも立派に自然に退治して
 了ふ自然療能があるのでありますから、此の自治作用の事を心得て居りさ
 へすれば、何もフルンケル位に大騒をする必要はないのであります。
 併し以上の作戦行為即ち自治機轉の進行中には何分平素無かつた結締織
 細胞や血管が澤山新生して、其處に多量の血液が輸送せられて来ますから
 勢ひ局部が第十圖(へ)のやうに膨れ上つて固くなり、痛みもすれば又カツカ
 ツと灼熱をも訴へて参ります。それで、之が一種の自然療能的機轉である

といふことを知らないお素人は、往々癰疽の親方同然の小さな腫物にも吃
 驚して、今にも生命を取られるものゝやうにヤレ切開だ入院だと大騒をせ
 られることも少くありません。

フルンケル自治機轉の過程圖解



勿論、如何に小さな善性の腫物
 であつても、場所によつては早く
 切開手術を要すべき場合もありま
 すが、曾て流行した彼の獨逸式外
 科醫の如く、それが如何に豫後の
 善良なフルンケルであつても、悉
 くこれに早期十字切開術や搔爬手
 術を施さねば治癒しないものゝ如
 く妄断し、濫りに人體に刀を加へるのを、さも仁術であるかのやうに誇稱
 したのは、抑々自然の妙機を無視し、醫術の眞髓を解しないものだといはね
 ばなりません。又彼の迷信療法家や神祕療法家のやうに、絶対に手術を無

用視したり極端に醫藥を排斥するのも非常に間違つた考でありまして、是非とも此に天醫と人醫との調和、即ち自然療能と人為的醫術との調和を計らねばならぬのであります。

例へば右のフルンケルでも、右述べましたやうに、本来自然療能の力で立派に自治し得べき筈のものであります。併したゞ之を自然に放任して置きますと所謂出物腫物處嫌はずで、何處へでも口の開き易い場所に遠慮なく自潰して了つて少からずその形貌を損ふ事もありますから、同じ事なら醜痕の残らぬ、後害のない都合の良ささうな部位へ口を開けてやる必要が有ります。又一步進んでは略化膿した頭を見定め、早く切開口を作つて外方からポンプの力で膿を吸出して自然の力を輔けるといふ事も必要であります。すると中から押出す力と外から吸出す力と相俟つて、十日で治るべき腫瘍も七日で全治し、七日かゝるものも五日で済むといふ利益があります。

斯ういふ風に自然の作用を補佐して行くのが醫者の役目でありまして、

決して自然療能を妨げてはならないのであります。然し醫術が進んだため動もすると醫藥や手術の爲、卻つて此の自然療能機を破壊して居るやうな場合も少くありません。

余も以前外科醫として門戸を張つて居た時代には、チョットしたフルンケル位にも中々大袈裟な手術をやりました。例へば漢法醫や素人なれば、赤まんか無二齋位で済ましたほどの小さなフルンケルでも、獨逸流の外科では之を十字形に廣く健康部まで切り開き、さうして銳匙で其の結締組織を全部爬き出したり或は缺で切り取つて其の腫瘍全部を健康部と共にヌツカリ除去するといふのがその理想でありますから、それが爲に患者の受くる苦痛は一通りでありませぬ。勿論斯うした所謂根治的手術を施せばそれで病の進行は止り痛もなくなつて立派に治癒を保證することが出来ますから、手術萬能時代の吾曹は、何でも早く徹底的の大切開手術を施すことを手柄のやうに心得て居りましたが、今から思ふと随分亂暴な話で、殊に此の自然療能の妙作用を自覺してからは最早其麼暴暴は能きないやうになり

ました……

自然的治癒と人為的治癒との優劣

治癒の確保を主眼とせる外科醫の立場としては、勢ひ早期切開を主張するものも強ち無理とはいはれませぬが、然し自然療能といふ天醫が治したのと、機械を振り舞はして人工で治したのとは、同じフルンケルでも其の治癒期の遅速と治癒後の不幸とに大變な相違があるといふ事に氣付きますと開う外科醫のやうに手術の效力ばかりを謳歌する譯には參りませぬ。

蓋し外科醫の力で病竈を除去する事は能きましても、其の手術の爲に大きく切り開かれた創面を治すといふ事は、猶且自然に内から肉芽の上るを待つより途はないのであります。それで若し其れが自然に自潰した場合であれば病毒の除去さるゝと間もなく其の自潰口も塞いで了ふものであります。反之外科的手術を施した場合には其の人為的に作られた創面治癒のため更に十數日を要する事もあり、加之跡に必ず大きな癢痕が残ります。

それも所によつては餘り差支もないでせうが、顔や頸筋に大きな赤十字或は白十字徽章の出來たのは男でも餘り感心が能きませぬ。別けて婦人方ではそれが永遠の精神的致命傷となる事もありますから、濫りに刀を弄ぶといふことは餘程の考へもので、是非とも自然と人力との調和を圖るため、醫者も病者も大いに熟慮せねばならぬ幾多の問題がありますから後刻——人醫と天醫との調和の處で——更に詳述する考であります。此の際特に諸君の注意を促して置きたいのは、病原除去と疾病治癒とは全く別箇の作用であつて、たゞ病毒を驅除したのみでは決して疾病は治癒しないものだといふ一事であります。

今此の兩者の關係を一國の軍事と政治とに譬へて見ますと、恰度彼の兵馬や砲彈には亂賊を鎮壓する力があつても、それで國家永遠の平和を保つことは不可能で、所詮治國平天下の道は國民上下の一致和合に俟たなければならぬといふのと同様で、元來機械や電氣ラヂウム藥物等の物力は、縱令それに病毒を征服すべき絶對的威力のあるものであつても、決して斯か

る物質に病を治すといふ能力はないものであります……
 例へば外科的機械や理化學的物力で病菌や腐敗した組織を根本的に切り去つたり焼き取つて了ふといふ事は可能であつても、その無くなつた組織の缺陷を補め合せて舊のやうに治すといふ力はありませぬ。又彼の微毒の如きも例の六〇六號を注射すれば微毒の病原たるスピロヘータそのものを撲滅することは立派にできますが、然も已にそのスピロヘータの爲に胃された機質的病變の復舊——例へば微毒のために脱けた頭髮を舊の通りに再生せしめたり、微毒性炎症で肥厚した骨膜を舊の通りに治して了ふといふ様な能力は六〇六號にもなければネオサルヴァルサンにもありませぬ。結局療病といふことはお互の肉體細胞に賦與せられた自然療能の威力によるのであります。Nicht Kunst, sondern Natur. 「技術にあらずして自然なり」といふことは、實に療病上養生上の原則である。若し此の原則を忘れては可憐神仙の妙薬も其の效驗なく、折角の靈術も全然無價値のものとなるのであります。

猶「醫藥の力」と「自然療能の力」との優劣長短如何は彼の單純なる「切創の経過」を見ても容易に了解されるのであります。それは拙著「自然の薬石」に「創傷治療機轉」として述べてありますから本夕は之を省略し、此には目下有らゆる世界文明人士が戰慄しつゝある彼の肺結核に對する自治機轉の一端を述べ、以て人為的醫術と自然療能との差等を窺ふの資料と致しませう。
 (天正七年十月九日前期講習第三講速記)

肺結核の自治機轉

さて、お素人方は多く肺結核といふものを、何だか絶対不治疾患で、あるかのやうに妄信して無暗に之を恐れ、中には肺病と聞いたやうでも發熱する人さへ少くない様であります。これは多く該病者の悪い結果ばかりを見聞き、その善治したよい結果を見聞きすることが乏しいからであります。畢竟まだ此の自然療能の有難さを知らない爲だと云はねばなりません。前刻も申しましたやうに假令少々の結核菌がお互の氣管内に飛び込んで

参りまして、例の貪食細胞なる憲兵が直に之を引つ捕へて了ひますから一寸肺病者が側へ寄つた位にさうビク／＼する必要はない筈であります。所で若し結核菌が一時に多量に侵入して來たり、又貪食細胞の目を盗んで肺組織を侵蝕し、急に繁殖して大きな結核菌聚落を形作つたやうな場合には、到底貪食細胞位の手にはをへないのであります。併し此のやうな場合には先刻フルンケルの例で申しましたやうな結締細胞軍が編成せられて忽ち結核菌を包圍して了ひますから左のみ驚くには及びませぬ。

尤も肺臓の場合では彼のフルンケルの場合のやうに、工兵細胞の共同作業で此の結核菌を皮膚の表面に押し上げ、胸部に孔を開けて抛り出して了ふといふやうな旨い譯には行きませぬが、併し其處には又吾々の想像も及ばぬ自然の妙技がありまして、此の場合には血管内から石灰分が盛に病竈に輸送せられ、工兵隊は之を結締細胞の周圍に塗り立て、其の上にも又結締細胞を造つては又石灰を塗りつけ、宛然、外科醫が骨折患者にギプス繃帯を施すやうに厚いセメント壁で結核菌を全部塗り固めて了ひます。すると如何

に頑強な結核菌でも、最早其の猛威を逞しうする力がなく、全く糧道を断たれて死滅するより他に途がありません。即ち世人の恐怖してゐる肺結核でも斯うして立派に治るべき結構な自然療能作用がお互の身體に賦與されてあるのであります。

また此のうへに我々の身體には「免疫」といふ玄妙不思議な一種の靈能があります。假令結核でも、チフテリでも、チフスでも、乃至コレラでも、ペストでも、總べて體外から吾人の體内に侵入し來る有らゆる微生物を征服し、又はその微生物の毒素を中和すべき妙機が與へられてあるのであります……

昔は痘瘡のため、よく顔を笑歴だらけにして了つた人も澤山ありました。がゼンナー以來彼の「種痘」のお庇で、御同様に最早顔中を穴だらけにするやうな憂がなくなりました。又昔は馬脾風に罹つた子供は必ず死ぬるに決つて居りましたが、今日ではチフテリ血清のお蔭で容易にその不幸を免れ得るやうになりました。

是等は何れも免疫の妙作用を善用したものでありまして、お互の血中には總べて外界から侵入し来る有らゆる生物を征服すべき抗毒素や凝集素、沈澱素、溶菌素等、(三一三頁)蛋白質の特性(参照)の薬物を生ずる妙機があり開れがために疫病を免れることが能るのであります。これを醫學の方では免疫作用と名づけ又其の体内で出来た薬物を免疫素と稱へて居るのであります。彼の如何程ペースト患者に接觸してもこれに胃されない人々や、又チフスやコレラ菌が澤山体内で繁殖して居つても平氣な人のありますのは畢竟先天的即ち生れ乍らに免疫性を持つて居る人なのであります。併し多くは後天的に免疫性を得るのであります。即ち生れたまゝの身體には抗毒素、溶菌素がなくても、若し外から一二の微菌が侵入して来ると、之を撲滅するために、從來嘗て存在しなかつた免疫素が体内に出来て参ります。すると其の後同じ種類の微菌が新に侵入して来ても、其の免疫素のため新來の病菌が斃されて了ふのであります。此の自然の妙機を應用して人工的に吾人に免疫性を與へ

ることに成功したのが、即ち彼の種痘法やチフテリ、血清療法なのであります。

所で結核やコレラやチフスベスト等に對しては未だ種痘やチフテリーの如き完全な免疫性を人為的で與へることが不成功でありますから、若し此等の悪疫が流行しますと醫者も病者も多く周章狼狽するのであります。が併し假令人為的醫學的にはまだ此等の豫防或は治療の法に成功しなくてもお互自身の身體には生れながら既に如何なる微菌に對しても一定の免疫素を作り得るやうな自然の妙機を授けられて居るのでありますから誠に安心なもので……如何に醫學者が結核やベストの根治策發見に失望しようとも此の自然の妙機を善用し得るものには決して失望も悲觀もあるべきではなく、たいこれに旺盛ならしむべき工夫さへ講ずればよいのであります……此に就いては色々お話しねばならぬことも澤山ありますが、餘り肺病に關したことはかりで時間の移るのは、他の病者や殊に健康者のために御迷惑でありませうから、詳細はホルモン作用の處に譲り、次の代價作用とい

ふ自然療能機のことに移りませう。

代償作用

以上僅にフルンケルや、肺結核の自然的治癒機轉の一部を観察したわけでも、如何に自然が我々に巧妙なる自治能力を與へたかといふことが明かでありまして、殊に理學的に化學的に、將た生物學的に完全なる自衛—自治能力が全身到る處の機關に備はつて居るのでありますから、假令お互は如何なる病魔に襲はれても漫に恐怖すべき必要はないのであります。併し心臟や腎臟、辜丸卵巢等の病苦を有せらるゝ方は、縦令フルンケルや肺病は立派に自然療能で治つても、己に掛替のない心臟の瓣膜が破損して了つたものには如何に自然療能でも仕方があるまいと、輕々しい速断をせらるゝ方もありませうから、猶此等に關する自治作用の一二を補足して置きませう。

(大正八年二月前期講習第三講速記)

心臟病の自治機轉

元來我々の心臟なるものは、その内腔が第十一圖の如く右心房(丙)右心室(甲)左心房(丁)左心室(乙)の四室に分れ、右心房には上下大靜脈(戊)左心房には肺靜脈(己)が開口し、右心室(甲)は肺動脈(庚)に、左心室(乙)は大動脈(壬)に通じて居ります。而して右房室(丙)の間には三尖瓣(イ)左房室(丁)の間には僧帽瓣といふ二枚の蓋(ロ)があり、又左右室と肺動脈(庚)大動脈(壬)との境界部即ち(甲)庚と(乙)壬との間には半月狀の瓣膜(ハ)がありまして、此等の瓣膜が心臟の開大したり收缩したりする毎に、丁度ポンプの活栓同様の作用をして全身血液の循環を宰つて居るのであります。

心臟諸瓣膜の圖解



第十圖 所で、今若し此等心臟瓣膜の何處かの一部が缺けたり縮んだり或は肥厚するとかいふやうな故障が出来ますと—今後如何に外科醫術が進んでも心臟に刀を觸るゝといふことは絶対に不可能で、無論醫藥の力で之を復舊する法も絶無で—如何なる名醫大家でも殆ど手のつけやうがないから肝

自治作用 II 自家療病機能

腎の病者よりも先づ醫者自身が失望して匙を投ずるより途がありませぬ。但し本院には、實際心臓には何等の機質的變常もないのに、何故か立派な醫師から心臓病といふ診断を下されたとか、或は醫師からは心臓に何等異常もないと保證され乍ら猶且心悸亢進が止まないとか、今にも心臓が麻痺しさうだなどと訴へ、絶えず死的恐怖に襲はれつゝ来院する、方も澤山ありますが、これ等は多くは精神的、神経的のもので、少し誘念術を施すか、或は一二期間精常修養を實行して戴けば譯もなく根治して了ふのでありますから少しも心配は入りませぬ……

所が、今此に述べましたやうな機質的に變常のある心臓を元々通りに復舊するといふことは、流石の自然療能といふ天醫でも全然不可能の問題でありますから、自分も精常創製當時には斯廢病者を精常の道で取扱ひ得ようとは夢にも考へ及びませんでした。然し其の後段々考へて見ますと、自然は他迄も吾人に親切なものでありまして、斯かる難症でも、若し病者が忠實に自然の命令を遵奉しさへすれば左に述べんとする代償作用といふ一

心臓の代償作用

種變つた自治作用を發揮して立派に健康者同然の生活を營み得るやうにして呉れるのであります。

前刻申しましたやうに、吾人の心臓は左右兩房室の四腔から成立して居るのであります。代償作用のことを説明する便宜のため此所に心臓を一

左心房室内の血行圖解

第二十圖



房室とした假設圖を描いて御話申ませう。今此の假設圖の(甲)を心室、(乙)を心房、(丙)を大動脈とし、甲乙房室の間に(イ)なる二瓣膜があり、又心室と大動脈(甲)の間に(ロ)の二瓣膜があるものと致します。而して(甲)室の擴大した時には(戊)肺静脈管から流れ込んだ心房(乙)内の血液が(イ)の瓣膜を押し開いて(甲)なる心室内に流れ込み、又(甲)室の縮小した場合には(イ)の瓣膜が塞がつて(甲)内の血液は(乙)の方へ行くことが出来ないから已むを得ず(ロ)の瓣膜を押し開いて(丙)なる全身大動脈の方へ流れ行き、斯くして(甲)の開縮毎に(戊)なる肺静脈の血液を(乙)から吸ひ取つては漸次(丙)な

自治作用II自家療病機能

る大動脈に送つて居るものと致します。
 所で、今若し此の(イ)の瓣膜が病のために縮んで(イ)瓣膜の尖端が十分に合はないやうなことが出来ると、(甲)心室の収縮する際(甲)心室内の血液が一部逆流して(乙)房に逆戻を致しますから、勢ひ大動脈管(丙)内に行く血の分量が減少して全身の血行が不調になり、爲に一方では鬱血が起り、他方は貧血が起つて終には總身に浮腫が來たり、又肺循環系の鬱血のため喘息様の發作などが起つて病者は横に寝ることすらも能きないやうになつて参ります。

勿論斯麼場合に醫藥の力で其の目前の苦痛を去る方法は種々ありますが遺憾乍ら孰れも一時逃れの救急的手段たる對症療法のみであつて其の効力が永續しない。それで、醫者は已むを得ず例によりて姑息的に絶對安静を命するより他に手のつけ方がなく、従つて病者はたゞ座して死を待つのみといふ悲惨な境遇に置かれるのであります。
 所が病者が幸に此の自然療能の理を解し、よく天醫の教を遵奉して處置

しますと、(丁)なる心臓壁は次第々々に肥厚胖張して、遂には(己)の如く(甲)室内の内腔が擴大し、心室内に流れ込む血液の分量が多くなり……例へば今迄一合より這入らなかつたものが一合二勺も這入るやうになつて参ります。
 斯うなりますと假令(イ)の瓣膜が合はないため、心臓の収縮時に二勺だけ

僧帽瓣閉鎖不全症の代償作用圖解



血が(乙)の方へ後戻をすると致しまして(丙)管の方へは矢張一合の血が流れて行きますから、結局全身を循環する血液の分量は元々通りになつて健康が恢復致します。之を心臓の代償作用といふのであります。此の妙機によりうまく全身の血行が調節されまると一度全身の浮腫し切つて居た病者でも又元々通りになり、食事にも便通にも何等の差支なく、少々位走つても左程故障も起らないやうになるのでありますから、此の理さへ分れば機質的心臓病者でも左程悲観する必要はありませぬ。

自治作用 自家療能機能

而してこれはたゞ學者が机上で捏つち上げた空論でもなければ又自分が強ひて病者を慰安する爲に作つた方便でもなく、其の實例は幾らも本會員中にも見らるゝのであります……例へば某心臓病者の如きは某博士から「お前は命が惜しくば一日も早く商賣を廢めて死後の用意を爲し、唯家賃でも取つて靜に餘命を送れ。若し利慾に迷ひ強ひて商賣でもすれば、开れは丁度一日々々壽命を縮めるのと同然だ」と宣言されたので、已むを得ず折角盛になりかゝつた商賣をも全廢し、穀糠としてたゞ死期の迫るを待つやうな儂い旦暮を送つて居られました。所が、余の此の代償作用の話を聞かれてからはスツカリ元氣を恢復し、そして熱心に此の自治作用を盛ならしむべき修養に力められました結果、最初は二階へ上るのすら息も切れ切れであつた病者が見違へるやうに達者になつて、歌も唱へば酒も飲み、健康者に交つてドシ／＼登山をしても何の苦痛なく、終には無病者でも閉口するやうな重い金物を取扱ふ商賣を始めて、今猶健康に暮して居られるのであります。

猶、此の病者について實に面白い挿話があります……それは或時、精常會員懇親會の席上、會員諸君が交々立つて此の活動養生或は後期「自覺養性」に關する實地修養上の感想などを述べ合つて居ました際、某氏も立つて……「自分は何分辨の入つた心臓の持主であるから、何時心臓が破れるかも知れぬ。もう一生廢物だと諦めて居つたが、精常會で代償作用の話を聞いたお蔭で、遂に今御覽の如き健體になることが能きた……」とて右の心臓自治機轉のことを略述し……「斯く醫學上絶對に不治と斷せられた機質的心臓病すら、見らるゝ如く立派に全癒し得たのであるから爾餘の疾患などは最早論ずるの價値なし……」とて、新入會員のため大に氣焔を擧げられました。所が會々來賓席に來て居られた某醫學博士は此の話を聞いて熱々感心し……「成程さうだつた！『代償作用』……實に好いことを聞いた。自分には心臓病の治療を専門にして居ながら實際瓣膜のガタ／＼になつた病者が來ると、病者よりも先づ夫子自ら悲觀して殆ど慰める道が知らなかつたが、全く代償作用のことを忘れて居つた。もうこれから心臓病者を預つて

自治作用 自家療病機能

も心配しない……と余に耳語せられたのであります……

苟も醫學博士ともあるものが、斯磨平凡な調節作用の話を、然も素人の病者から聞かされて感服するといふことは、嘘のやうな話であります。之が先刻も申した電燈の威光に眩惑して白晝居室を密閉し、電燈を點じて居る所でありまして、斯うした矛盾が寧ろ大家ほど卻つて甚だしいやうな傾向があるのでありますから實に面白いではありませんか。蓋し物質萬能式機械的病理觀の餘弊として勢ひ已むを得ぬ次第であります。が、一度自然の妙機に目を移せば、斯かる自治作用の全身到る處に營まれつゝあるといふことは如何なる醫藥萬能式醫家でも、之を否認する譯には参りませぬから勢ひ醫者も病者も共に希望に充ちたる光明を發見し得るのであります

肺の代償作用

更に他の例を挙げますと、例へば已に片肺を胃された結核患者の如きは假令肺病は治るとしても、一旦破壊せられた其の肺の組織は所詮元々通り

になるべき筈はないから、當然長壽も出来ねば人間並の活動も出来ないだらうと悲觀するものが十中八九であります。

所が、肺臓にも亦立派な代償作用が行はれると云ふことに気が付きますと、右の如き悲觀は畢竟一種の杞憂に過ぎないことになつて参ります……

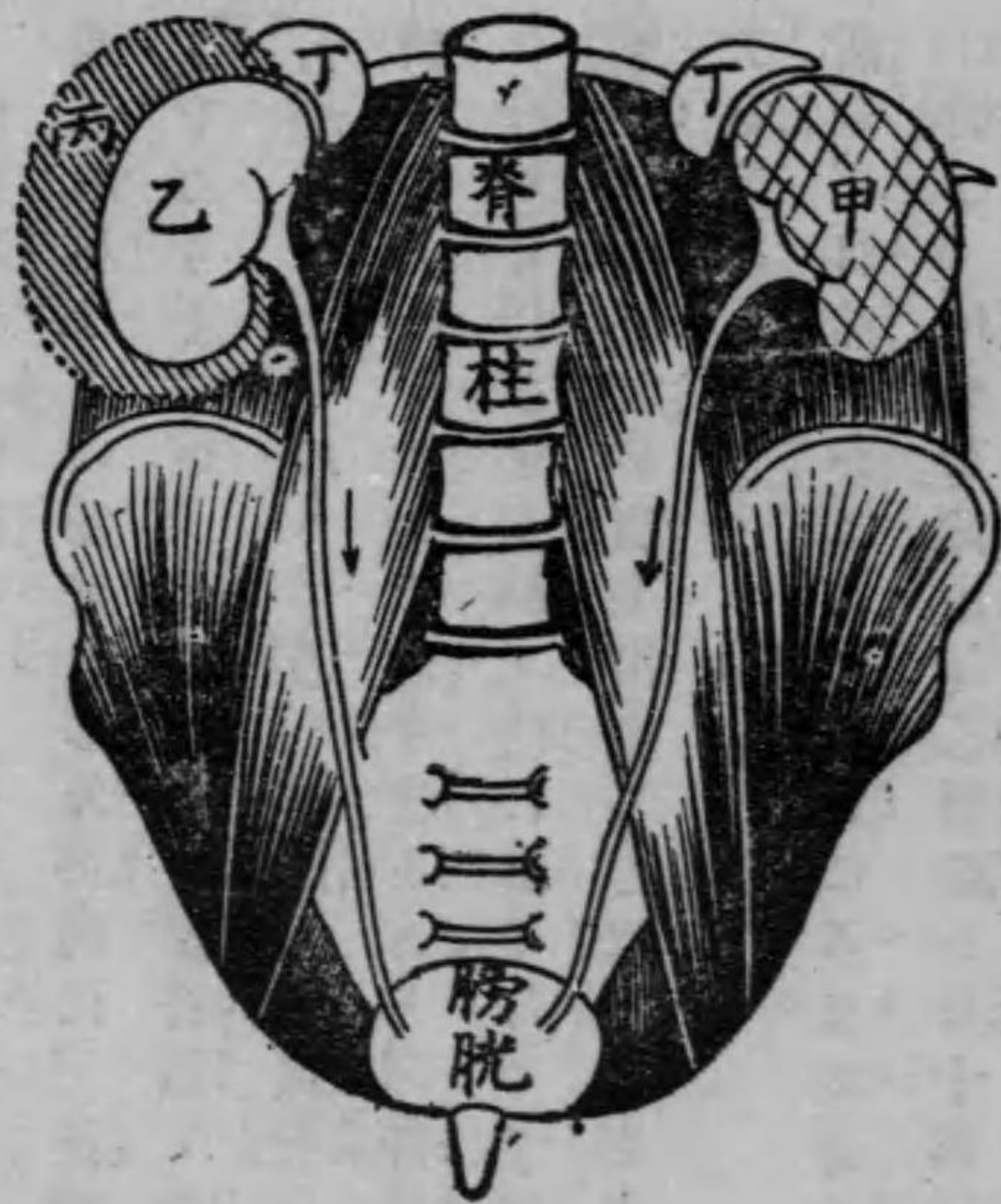
現に某醫學者は此の試験のため、健康状態の殆ど同様な二匹の犬を飼ひ、其の一匹の犬の片肺を全部剔出して置いて海外に旅行致しました。而して三年後に歸朝して見ますと、その片肺の無い犬が丈夫に生活して居て子まで産んで居ました。そこで該博士は其の犬の瓦斯交換量や、飲食物の新陳代謝量などを日々調査しますと、對照動物として飼つて置た兩肺揃つた一方の犬と少しも相違が無かつたといふことでもあります……是は自分が直接その實驗を見たのではありませぬから何所迄信用してよいか明言は出来兼ねますが、併し人間に於ては、實際片肺でも立派に兩肺揃つた健康者以上の心身的活動をして居る人を澤山見受けます。殊に本會員中にも其の實例に乏しくないのでありますから僅に片肺を冒された位で悲觀絶望するのは

聊か早計だといはねばなりません。兎に角、一定の代償作用は身體中到處で行はれて居るのでありまして、殊に一對づゝになつて居る臓器、例へば腎臓とか睾丸とか卵巣とかいふものに就いて觀察しますと、明瞭に此の作用のあることが判ります。

腎臓に於ける代償作用

腎臓といふものは第十四圖の如く脊柱に沿うて、腹腔の深部に左右一箇づゝある臓器で、此處で日々尿が製造せられるのであります。即ち身體中で出来た種々の頽廢物——不用流動物が、此の腎臓で血液の中から取り取られて、體外へ排泄せられるのであります。此の尿が日々片方の腎臓で一千二百瓦づゝ、左右合して二千四百瓦づゝ製造され、それが滞りなく體外へ排除されましたならお互の健康に支障はないのであります。所が、刀劍や鐵砲の外傷で、若し其の一方の腎臓が傷けられるとか或は何かの病で腎臓別出手術を施すとかして、一方(甲)の腎臓が無くなつて了ひますと、尿はたゞ残つた一方(乙)の腎臓で製造せらるゝ事になりますから半分に減つて

第四十圖



右腎臓に於ける代償作用の圖解

了ひます、すると其の無くなつた(甲)の腎臓で今迄排除されて居た尿が勢ひ體内に停滞する譯になります……これは丁度お互の炊事元から日々排除されて居た汚水が、急に其の下水口が塞がった爲、はげ道がなくなつて、先裁から庭先から玄關口までも溢れ出して来たのと同然の有様で……甚だ汚い話でありますが、實際此の場合には日々お互の體外に排泄せねばならぬ尿の半分が排除されない爲、それが體中に廻つて手の先から足の先まで腫れ揚つて参るのであります。

肋膜炎や腹水のやうに、たゞ身體の一箇所に水の溜つた丈の病であれば
自治作用——自家療病機能

之を外科的に穿刺して取り去る事もできますが、體中に廻つた尿を排除するには是非共腎臓をモウ一つ新規に造るより仕方がありません……そこで亞米利加などの物好きな外科醫は、猿や兎の腎臓を代に取り付けて見たさうであります。勿論其處お雇腎臓で我々人類の腎臓のお代が務りさうな筈がありません……若し普通の腎臓炎のやうに假令病に罹つた腎臓でも腎臓さへあれば又藥で治す法もあり、殊に自然といふ名醫にかけたら譯もなく治りもせまうが、已に無くなつて了つた腎臓は、如何に自然の妙手でも最早再び之を造り出すことはできませんから斯ういふ病人は實に心細い次第であります……

所が、自然といふものは實に不思議な作用をするもので、日數の經つに従ひ、残つた健康な(乙)腎臓が第十四圖點線の如く段々肥大して來て遂には(丙)の如く舊の腎臓の二倍の大きさとになり、段々尿の製造量が増加して一つの腎臓で立派に二千四百瓦の尿を製出し得る様になり、此に全身の浮腫も去れば呼吸も平狀に復して全く健康體と同様の身に復するのであります。

斯うして右の腎臓が無くなつた場合には、それが爲日々滯つて行くべき千二百瓦づゝの借金も、左の腎臓が代つて辨償し、若し左腎が無くなれば右腎が左腎の義務を代辨して行くのでありますから之を代償作用と名づけたのであります。

生殖腺其の他の代償作用

卵巣や辜丸に於ても亦同様の現象が行はれます。即ち手術や外傷のため一方の卵巣が無くなることありますと、當時は多少月經に變調なども生じますが、月日の經つに連れ残つた健康な卵巣の代償作用で立派に舊のやうに復して參ります。又一方の辜丸を失ひましたも猶且同様の理法で立派に生殖機能を完うすることができるのであります。殊に面白いのは已に一方の辜丸を失ひ折角健存した辜丸が、其の後副辜丸炎か何かの病に罹り全くその排泄道の斷たれたやうな場合でも、數年後には又よく生殖作用を營み得るやうになることあります。尤もこれは餘り詳しく申しますと、

自治作用 II 自家療病機能

風紀を紊す虞がありますから省略致しますが、兎に角一方だけでも卵巢なり、率丸なりが健存して居れば種族保存上敢て悲観する必要はないものであります。

要するに、凡て一對づゝある機關は、其の左が無くなれば右の機關が左の機能を代辨し、右が無くなれば左が右の償をするといふ機能のあることは一點の疑なき事實であります。……手でも左右両手の揃つて居る間は左手は極めて不器用なものであります。若し右手を失ひますと、左手が段々器用に發達して来て、左手で立派に文字も書ければ箸も使へるやうになつて参ります。指でも五本揃つて居る間は、小指や無名指は兎角昔時の大名のやうに、年中何もしないでたゞ贅澤に遊んでばかり居るものであります。若し拇指も示指も無くなると、残つた中指や小指が段々利くやうになつて来て、無名指や小指で飯を食ふにも差支が無いやうになるものであります。

猶極端な例を申しますと、若し両手が無くなると足や口が手の代理をす

るやうになり、口で立派に書畫を書いたり裁縫をしたり、足で物を持つたりすることも出来るやうになつて参ります。

斯ういふ風に觀察して行きますと、お互の身體組織といふものは、たゞ一對揃つた機關が左右で互に代償作用をするといふ計りでなくして、或は耳が眼の代をしたり、眼が耳の代理をしたり、或は頭が胃腸の仕事をしたり、胃腸が頭のお代をするといふ風に、全然其の機能の異なつた組織同志の間にも亦一定の代償作用が營まれるやうであります……

頭が胃腸の代をするを申せば如何にも變なやうに聞えませうが、これは「特異消化力の自覺」の所——緒論(五三頁)参照あれ——で述べました自分の胃の例でも判りますやうに、已に余の胃が全く無能力となり、殆ど消化液が涌かなかつた當時でも、余の好きな牡丹餅を見ると、盛に唾液も胃液も涌いて来て、立派にこれを消化することが出来ましたのは、確に心で胃腸の作用を助けたと申しても差支ありません……又同じ御馳走でも之を盛つた食器が非常に美しくて獻立が立派でありますと、ツイ食欲が進んで

消化の加減がよくなるのは誰人でも屢々御経験なさる所で、これは目や心が胃の作用を助けたものだとも申されます。

又何か心に不快なことがあつて、頭が茫乎として思ふやうに働かない時でも、若し何かの方法で一晩二晩熟睡が出来、従つて胃腸が十分に活動して體力が恢復して参りますと、それがため頭の中にあつた不快な考もスツカリ消滅して脳が快活に働き出すやうなことがあります……これには色々解釋の仕方もあります。兎に角お互の身體には、脳と胃腸、胃腸と皮膚といふやうのであります。兎に角お互の身體には、脳と胃腸、胃腸と皮膚といふやうに非常に隔絶した全く縁の無いやうな所にも離れ難い干繋があり、其の間に一定の代償作用や調節作用が行はれるものであります。胃腸が害せられたから絶対に食物が消化しないとか、少しでも脳が胃されたから全然精神が働かないとかいふやうな其麼不自由なものではありません。

脳中樞部に於ける代償作用

斯く申しましても、近世主知主義の機械的的人生觀や理學的病理觀に囚はれたる現代人は、身體中特に其の頭腦を餘りに尊重し過ぎた結果として、若し自己の腦裡に多少の弱點ありと推定せる場合には、縦令肺や腎臟率丸卵巢等には、如何に完全なる代償作用が行はるゝとしても、掛替のない頭腦といふ中樞機關の一部が損傷せられては、まさか頭で考へることを手で考へるといふ譯にも行くまいから、最早人生は全滅であらうと悲觀さるゝのが十中八九であります。

自分なども精常以前は猶且さういふ風に思ひ詰めて居りました。けれども其の後段々研究して見ますと、頭の中でも猶且一定の代償作用が行はれるといふ事が解りました。め萬事が樂觀的となり、斯麼粗末な頭腦でも多少諸君のお役に立つやうになりました。

元來お互の言語を構成するのは左の顛葉即ち耳の上の邊にあるブローカーの中樞といふ所でありまして、若し此の中樞が破壊されますと、假令言ふべきことは立派に頭の中で判つて居て、又舌にも何の故障がなく、立

派に動きましても、肝腎の物をいふことができません……之を一國に譬へて見ますと、恰度舌は外交官、大脳は總理大臣で、ブローカーの中樞は外務大臣といふ役目に當るのでありまして、今假令總理大臣は健在し、外交官も達者でありまして、外交談判最中に若し外務大臣が頓死をするやうな事がありますと、總べての談判が一時中絶になるのと同然であります。殊に腦内の外務大臣たるブローカーの中樞は、たゞ一つしか無いのでありますから、若し戦争などで其れが鐵砲か何かでやられて了ひますとモウ生涯で暮すより仕方が無いといふのが一般學者間の定説でありました。所が曾て戰場で此の大切な中樞を失ひ、全く啞になつて了つた一兵士が二三年経つてから、又ボツ／＼物を言ふやうになつて来たことがあります……勿論當初は短い單語位しか言へなかつたのでありますが段々年限の経つに従ひ、後には當り前に物が言へるやうになつたのであります。此の事實により全然從來の學説が裏切られましたので、諸學者は大騒ぎをして種々研究しました結果、素より腦内には言語の中樞は他にお代のあるべき筈は

無いが、然も斯く立派に發言し得らるゝやうになつたのは、畢竟、是迄他の仕事をして居つた右側の同名部の腦髓がブローカー中樞の代理をするやうになつたのであらうといふことに諸學者の説が一致しました。

元來人間の能力といふものは妙なもので、若し甲吉は應接係、乙助は會計係と、各々其の長所を應用して、全く専門の業のみをやらせて置きますと、甲吉は應接が段々甘くなる代に會計が益々下手になり、乙助は會計の上達と共に愈々應接が下手になるものであります。所が若し突然甲吉が居なくなつて他に甲吉の代理をする人が無いやうになりますと、乙助は報面ばかりいぢつて居て、怎うも私には物を言ふことが出来ませぬと云つて居る譯にもいかず、ツイ下手ながらも客の前へ出て相手をするゝすると其の内自然應接が上手になり、案外立派に應接係の任務を遂行し得られるやうになるものであります。

又主人が非常に人交合の好い人でありますと、奥さんはいつも奥にばかり引込んで居て殆ど啞同様になつて了ひますが、反對に主人が打切棒で餘

りに無愛想でありますと、ツイ奥さんが見兼ねてチヨイ〜お客の機嫌を取るやうになり、何時しか大の交際家になるものであります。かういふ風に總べて必要に迫られますと、餘儀なく今迄用ひなかつた機能も發達して來るものでありますから、況して統一主體たる人體内、殊に靈妙なる機能を營む脳内で右側の顯葉が左側の顯葉の代理をする位の融通はつきさうな筈であります。

自分は生來記憶力が非常に鈍くて、文字や數字を直覺的に暗記することが不得手で、殊に人の名前などに對しては殆ど健忘症同然であります。が、それでも斯うして此の廣汎な複雑な話をしたり、又此の繁雜な而も責任の重い院務を、兎も角も大した過失なしに遣つて行けるやうになり得ましたのは、畢竟理解力を以て記憶力の不足を代償し、手指を以て腦の缺陷を補うた結果に外ならぬのであります。更に言ひ換ふれば自分の直覺的記憶力は先天的に貧弱であります。幸に理解力は人並に働きましたから、此の理解力を以て如何なる無意義の事象をも悉く之を有意義化して置きました

記憶力の代償

ため、幾分腦裡に残るやうになつたのであります……然しそれでも必要の事柄を悉く腦裡に留めて置くといふことは不可能でありますから、自分は忠實に手指を働かしてノート中に記入し、而して其の一方に索引を付けて置くやうに致しましたので、時としては先天的強記家と言はるゝ人を驚かしたやうなことです。それで自分のやうな無記憶者も斯うした代償作用で、マア怎うにか人間並の仕事ができたのであります。此の邊の消息さへ御會得が出来れば、彼の記性の減退や理解力の薄弱を嘆せらる方も、必ずや何等かの御工夫が付かうかと思ふのであります。

何れ此の記憶のことに關しては後日改めて詳述する積であります。兎に角精神的機能にも肉體的機能にも、其の間に相互の缺陷を補償し得る作用のあることは施ふべからざる事實であります。而して是等の關係が現今世人の注意をひける彼のホルモン作用或は内分泌説により段々明瞭になつて參りましたから、此にホルモン作用の概要をお話申ませう。

【三】ホルモンと内分泌

ホルモン Hormon とは元希臘のオルマオ——刺戟す、興奮すの義——といふ語から轉化した言葉で、或は之を鼓舞素と譯して居る學者もありますが……お互の體內に在る特殊の組織、例へば腦の下底部に位する大脳下垂體、松葉腺とか、喉頭の兩側に在る甲状腺や、心臟の前方に在る胸腺、腎臓の上部に載つてゐる副腎——第十三圖の(丁)——乃至睾丸卵巢の如き内生殖器などから一種特異の薬液を分泌しますと、それが血管内へ流れ込んで全身を循環し、其の際、一定の分泌液は一定の器官に化學的作用を及して、其の器官の働を鼓舞するのであります。斯様な現象を内分泌と呼び、其の種々なる内分泌物を近時一般にホルモンと總稱してゐるのであります。畢竟ホルモンには互に矛盾著せんとする我々人間の生理的——心理的生活現象を巧に調和鹽梅し、以て我等が生命を安全に保護する妙機があるのであります。

外分泌と内分泌

而して彼の神祕的迷信的病理説——第二講一〇〇頁参照——では勿論の事、最近醫學の進歩に多大の寄與貢獻をなした細胞病理説——第二講一〇五頁参照——でも細菌病理説でも、其の他宗教でも殆ど解釋の途がなかつた幾多の難題が、何れも刃をむかふる如く此のホルモン現象によりて明々地に解決せられるのでありますから、我等は此の作用を無視しては、所詮心身健康の問題を論ずる資格がないといはねばならぬほど、それほど養生修養上大切な問題なのであります。

所で右のやうな現象を何故特に内分泌と呼ぶかと申しますと、それには先づ外分泌の事からザットお話し申して置かねばなりません。

【外分泌】元來お互の皮膚には汗腺、皮脂腺、眼には涙腺、口腔には唾液腺、胃には胃腺等と名づくる腺組織があります。所で此等の腺は多く第十五圖の如き囊状を呈し、何れも一定の排泄管(イ)即ち細い導管を具へて居りました。其の腺細胞(ロ)から分泌せられた汗や皮脂や涙液唾液——胃液等が、皮膚や角膜結膜等の表面を滑澤にするとか、又は消化の作用を輔けるとか、

ホルモンと内分泌

それらの役目を果たすため、此の導管を傳うて皮膚の表面や眼の結膜又は



第五十圖 (イ) 排液管 (ロ) 腺細胞

口腔—胃腸の粘膜表面等、常に體外の空氣と交通しつゝある所に送り出されるものでありますから、總べて此等を外分泌腺と名付けるのであります。

【内分泌】所が、今此に述べんとする此の大脳下垂體や松葉腺、胸腺—甲状腺—副腎などには、何れも此の導管がなく、其の腺内で出来た分泌液を直接血管内へ分泌して夫々の役目を果たすのでありますから、従つて内分泌なる名が付けられた譯であります。

併し此のことの明瞭になつたのは比較的最近のことでありまして、ツイ二十年程前までは、此等の諸腺は何れも彼の外分泌腺と同様に立派な腺の構造を有つて居りますから、何か一定の薬液を分泌するものだらうといふ想像はついて居りましたが、さて其の分泌液を送り出すべき肝腎な導管が見付からないため、假令此等の腺内で怎んな善い薬液が造られるとしてもそれが怎んな道を傳うて身體の怎んな部分に送られるのであるか、更に其の

副腎のホルモン

見當がつかないので、久しい間此等の諸腺は身體内に於ける七不思議——醫學者間の謎として取扱はれ、就中胸腺の如きは生體の幼時にのみ存在し成長するに従つて次第に退行し、遂には唯その痕跡を止むるに過ぎないやうになるといふ事實に照らして、是等の諸腺は畢竟胎生時中の遺物であらうぐらゐの推斷を下し、殊に彼の副腎の如きは、他の手術に際して若しそれが少しでも手術の妨げになれば遠慮會釋もなく之を切り除いて了つたといふやうに全く無用の長物視されて居りました。

(1) 【副腎ホルモン】所が高峰博士が彼の有名なアドレナリン Adrenalin——其

の一二滴を眼の球結膜や鼻腔粘膜などに塗布すると忽ち其の部の血管が収縮して、其處を切つても血が出なくなるといふほど著效のあるため、現下眼科や耳鼻咽喉科専門醫等は手術上一日も之を手放すことができないといふやうな靈能のある藥品——を此の副腎から發見製出せられましたから俄に副腎の聲價が高まり、是迄多くの醫學者心理學者乃至倫理學者等が種々額を鳩めても、それが精神の作用か肉體の作用か、又肉の病か心の病かと

いふことさへも判定のつかなかつた巨多の醫學上—心理學上將者學上の難問が、此のアドレナリン一つでも立派に解決されるやうになりました。そして又一面彼の辜丸や卵巢内の間質細胞その他の特殊臓器のホルモン作用が段々闡明して來ました結果として、古來彼の唯物學者や唯心論者の間に論争の絶えなかつた肉體と精神との關係が益々明瞭になり、心身不二の原理が具體的に説明されるやうになつたお蔭で、久しく犬猿管ならなかつた哲學と科學とが漸く握手を始めるやうな機運を呈して參りました。元來此の内分泌素といふものゝ作用は、已に今日の知識で判明せられた所だけでも實に神變玄妙摩訶不思議で、到底一朝夕に述べ盡せませぬが、兎に角何れの内分泌素でも、それが血中に分泌せられて全身を循環すると之に觸れたる組織は忽ち其の生氣を復活したり又其の作用が變化して、人間の氣分性行までも一變せられるやうになるのであります。

精神感動とアドレナリン

吾人が恐怖或は苦痛等一定の精神感動に打たれた場合には、皮膚その他末梢血管が收縮して顔面が蒼白となり、瞳孔が散大して毛髪が逆立ち、腸胃の筋肉が弛緩して其の運動が停止し、又心臟の動悸が高まつたり、血液の凝固性が強くなるといふやうな事實は、夙に諸學者の實驗證明せる所でありましたが、さて何故恐怖や苦痛のために其麼動悸が躍つたり腸胃の運動が止るやうな肉體的變化が起るのか、といふ理由を科學的に説明することは全然不可能事でありました。

所が今試に動物の血管内に高峰博士の發見された副腎の主成分たる右のアドレナリンの少量を注射して見ますと、忽ち瞳孔は散大して血管が收縮し、皮膚の立毛筋の收縮によつて全身の毛は逆立ち、皮膚及び内臓の血管壁が收縮する爲に血圧が高まり、又消化管壁の平滑筋は弛緩して其の活動を減じ、氣管の平滑筋も弛緩して氣道は廣くなり、膀胱壁の利尿筋迄も弛緩し、殊に肝臓内の糖原質を葡萄糖に變化して多量の糖分を血中に送るために一種の糖尿症を來す等、殆ど精神感動時に起る肉體的變状と同様の變

ホルモンと内分泌

弛緩とは收縮の反
對で、筋肉の伸び
ゆるむ事

化を呈します——而して實際吾々に不快な精神感動の起る場合、例へば試験に悩む學生や將に競技場裡に入らんとする運動選手、その他相場株式等の大變動で非常に不安な感情に動かされた投機師等には、其の尿中に大量の糖分が證明せられるのは臨牀醫家の屢々經驗せる事實でありますから、此に精神感動に基づく肉體上の變化は全くアドレナリンの作用によるものだといふことが判明致しました。

元來お互の血中には平時アドレナリンなどは餘り存在しない筈でありますが、若し人と争つたり心配したり煩悶恐怖したり、その他何か心身的の苦痛を感じますと、副腎からアドレナリンといふ一種の化學的成分が分泌せられ、それが血中に流れ込んで全身に循環します。すると此のアドレナリンには血管壁を收縮せしめる作用があるから血管が縮小して血壓が高くなつて来る。そして又此のアドレナリンが肝臓細胞の作用に變化を與へるので、平素無い筈の糖分が血中に殖えて来るのであります。心悸を躍ら所で精神感動の際、何故そんなアドレナリンが澤山出来て、心悸を躍ら

せたり顔面を蒼白にしたり、血中に糖分が出来たりするのかといふ理由を釋ねて見ますと、元來糖分なるものは筋肉活動を促進する原動力であります。而して恐怖や煩悶等の不快な感情の原因たるお互の敵と争闘して之に打勝つ爲には、勢ひ多量の血液と多量の空氣と強大なる筋力とを要する譯であります。其處で其の敵を掃ひ除け身の安全を計らしむべく、自然は吾人に副腎を興へて、瞬間呼吸の間にアドレナリンを分泌し、皮膚表面の血管容積を縮めて血壓を高め、以て多量の血液を四肢筋肉と肺及び脳心臓とに送り、一方では氣管の内腔を開いて呼吸に便ならしめ、殊に又肝臓細胞の作用に變化を與へて多量の糖分を血中に送り、以て外敵との競争に耐へ得るやうにしたのであるといふ説でありまして、畢竟かゝる精神感動時に起る肉體的變化は何れも己が心身的外敵を仆し、生命の保全を計らんとする最も巧妙なる自衛作用に外ならぬのであります。

所が、愁ひ彼の機械的病理學説に囚はれたる養生家は、それが斯かる靈妙なる自衛機であるとも知らないで、徒らに心悸亢進を恐れたり糖尿を苦

ホルモンと内分泌

糖尿患者に於て、
由の消失せざる事

にして、日夕検脈や検尿を仕事とし、僅の心悸や糖分にも色を青くし可憐活動盛りの身を以て人間らしい仕事もせねば遊戯もせず、半死半生の状態で無意義な旦暮を送る人士が非常に殖えて参りました。そこで前講「衛生病」(第二講一四四頁)の處で述べましたやうに此等の人は、畢竟其の糖尿病恐怖の爲、我自ら好んで日々糖尿を製出し、そして其の自ら作つた糖分を日々検出しては驚いて居る、所謂「苦を招くの因を以て妄に苦果を捨てんと冀ふ」やうなものでありますから、自分は之に「恐心悸病」或は「恐糖症」といふ名を付けて居るのであります。併し之はたゞ糖分に關しての事はかりでなく、同じ關係で或は日々検尿を仕事として蛋白を製造して居る「恐蛋白病」者や、或は検温を日課として常習發熱に苦んで居る「恐熱病」者も亦御々澤山であります。

尤も持続性に多量の糖分や蛋白の出るのは病的であつて、それには相當の注意を加ふべき必要もありませんが、それも程度問題でありますから妄に糖尿や蛋白の出現を恐れてたゞ姑息な對症療法を日課とし、彼の極端な安

静休養のみを反復して居りますと、已に糖尿病や腎臟病そのものは立派に治癒して居ながら、幾年経つても尿中の糖や蛋白が消失せないので一生病牀を離るゝことも出来ず、卻つて壽命を短縮するやうな不幸を來します。

現に自分は、多年糖尿病或は慢性腎臟炎に罹り、有らゆる専門大家の命を墨守し乍ら荏苒糖尿や蛋白尿の治らないため殆ど絶望の淵に陥つた多くの病者を診ましたが、次講から述べんとする「自他力抵抗方養成法」——中巻及び下巻に詳述す——の理法に従ひ適度の活動養生を遵奉された方は何れも尿中の糖分も蛋白も立派に消滅して居るのでありますから、僅な糖分や蛋白を恐怖して戦々兢兢不安の月日を送るのは決して自然療能を旺ならしむべき所以の道ではなく、寧ろ之を減殺せしむるに過ぎないのであります。

之を要するにホルモン作用の研究は全く從來の固體病理や機械的病理觀の誤謬を是正して唯物主義の迷妄を打破し、而して唯物療法から精神修養へ、動物醫學から人間醫學へ進むべき幾多の便宜を吾等に與へました。

勿論内分泌の研究は、今や漸く其の進歩の第一階梯に足を移したばかり

ホルモンと内分泌

であります、然もこれが爲に從來多くの醫家が、たゞ機械本位の病理觀に囚はれたる餘弊として、愁ひ小知小才を弄し不自然極まる人爲的手段を用ひて、多くの不幸を同胞に與へつゝあつたといふ幾多の謬見を正すことが出来るのであります。

(大正八年二月十三日前期講習第三講速記)

ホルモンと調和作用

大脳下垂體や松葉腺、甲状腺、胸腺其の他の内分泌腺から分泌さる、ホルモンに就いては、以上副腎に於けるアドレナリンのやうな、具體的の分泌液を化學的に製出し得る迄には未だ其の研究が進んで居りませぬが、併し吾人の胎内生活や生後の生育機轉から新陳代謝の調節作用に至る迄、凡そ吾人の生活に必要缺くべからざる有らゆる生理作用の調和が、此等の諸腺より分泌さるゝ特殊のホルモンに依つて營爲されつゝあるといふことには寸毫疑を挟むべき餘地がありません。今單簡なる其の一二例を挙げますと

(2)〔甲状腺のホルモン〕 お互の喉頭の前方下部に馬蹄鐵狀をした甲状腺

侏儒の原因

といふ内分泌腺があります。此の甲状腺から分泌さるゝホルモンには

内分泌腺の圖



- (一) 骨の形成を促進し
 - (二) 生殖器の發育を助長し
 - (三) 種々の新陳代謝を活潑ならしめ
 - (四) 交感神経及び迷走神経を刺激する
- 等の作用があり、それが爲子供が發育して大人となり、心身共に完全の人間として生活し行かれるやうになるのであります。若し子供の時分に風く

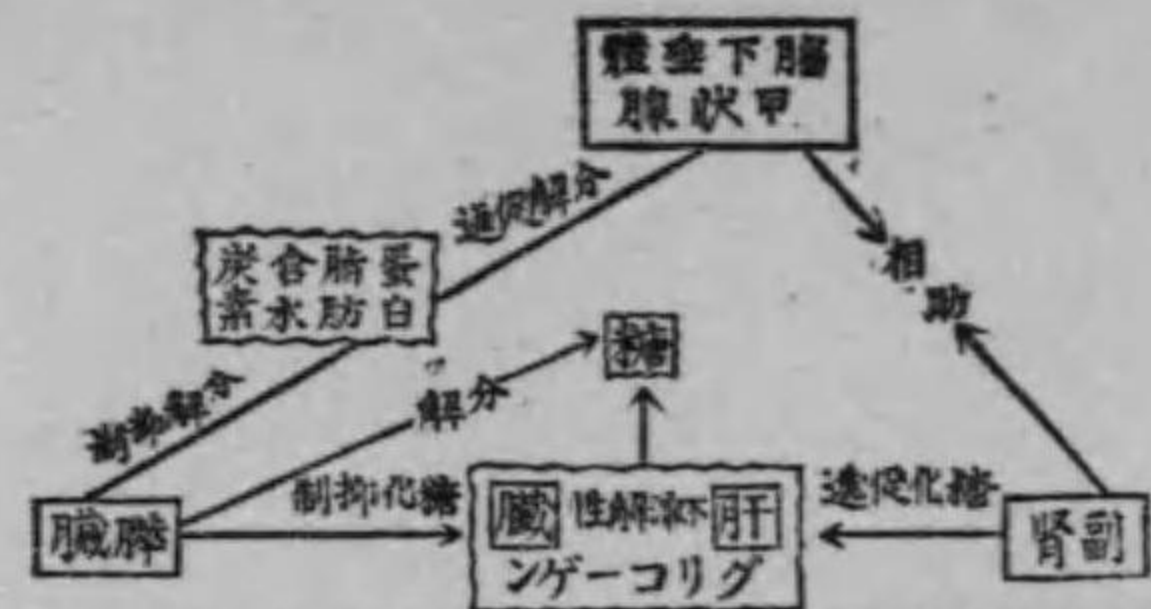
此の甲状腺が病にかゝつたり、或は生れながらに其の發育が不完全であつたりしますと、子供の骨が旨く延びないから侏儒のやうになり、凡ての精神機能が遅鈍で生殖器も發育せず全く白痴同様の者になつて了ひます。併し既に一定の年齢に達し、骨も生殖器も一人前に發達した成人では、假令手術や病の爲に甲状腺がなくなりましても侏儒や白痴にはなりません。毛髪が脱落して運動が、それでも皮膚の榮養が著しく障害されて乾燥し、

ホルモンと内分泌

が不活潑になり又神経作用が鈍る等、所謂「脱落症候」を呈し、殊に皮下組織が粘液状變性に陥つて著しき浮腫状を呈します。而して此の浮腫が大層目に立ちます所から醫學上之を「粘性浮腫」と稱へて居りますが、斯ういふ脱落症候に陥つた人や動物の身體に、他の甲状腺を磨り潰した壓搾液を注射しますと、立派に其の脱落症候や粘性浮腫等の肉體的病状も精神的變状も消失して健康に復します。猶特に興味のあるのは、

糖分産道の制止

(3)「**膵臓のホルモン作用**」であります。先刻も一寸述べましたやうに、副腎の**ホルモン**なる**アドレナリン**には、平素我々の肝臓内に在る不溶性性の**グリコゲン**(一名動物性澱粉)を可溶性葡萄糖なる一種の糖分に變化し、之を血中に送つて血中の糖分を増させる作用がありますが、此の膵臓の**ホルモン**には之と正反對に**グリコゲン**の葡萄糖に變化する作用を妨げ、又血中にある葡萄糖を分解して其の糖分を減少せしむる働がありますから、此の兩作用の調和によりて吾々の血中にある糖分が適當に調節されられて行くのであります。



又**甲状腺のホルモン**には蛋白質や脂肪含水炭素等の新陳代謝を促進せしむる働があります。幸に膵臓の**ホルモン**には丁度之に反對の作用があります。すから、此に新陳代謝の調和が旨くとれて行くのであります。それで若し膵臓の機能が衰へますと、一方糖分が多産になり、糖尿の出るのと同時に、**尿素**や**尿酸**等の蛋白質分解産物が澤山尿に出て来るやうになり、此に新陳代謝の失調が起つて来るのであります……が

併し、幾ら膵臓が健全であつても若し**甲状腺**が肥大して餘り其の機能が旺盛になると、其の結果**バセドウ氏病**といふ病となり、又恐怖や煩悶のため、餘り**アドレナリン**の分泌が澤山になると猶且血中に異常の糖分が殖えて来ますから、世人の恐るゝ糖尿病となるのは當然なことであります。要するに精神感動なるものは斯の如く**アドレナリン**や其の他の**ホルモン**現象によりの確に我等の病源となるのでありますから、眞に健康を希ふものは、平素から恐怖を除き煩悶を去るべき工夫——修養に全力を注がなければなりません。

ホルモンと内分泌

性慾の消長と男女性

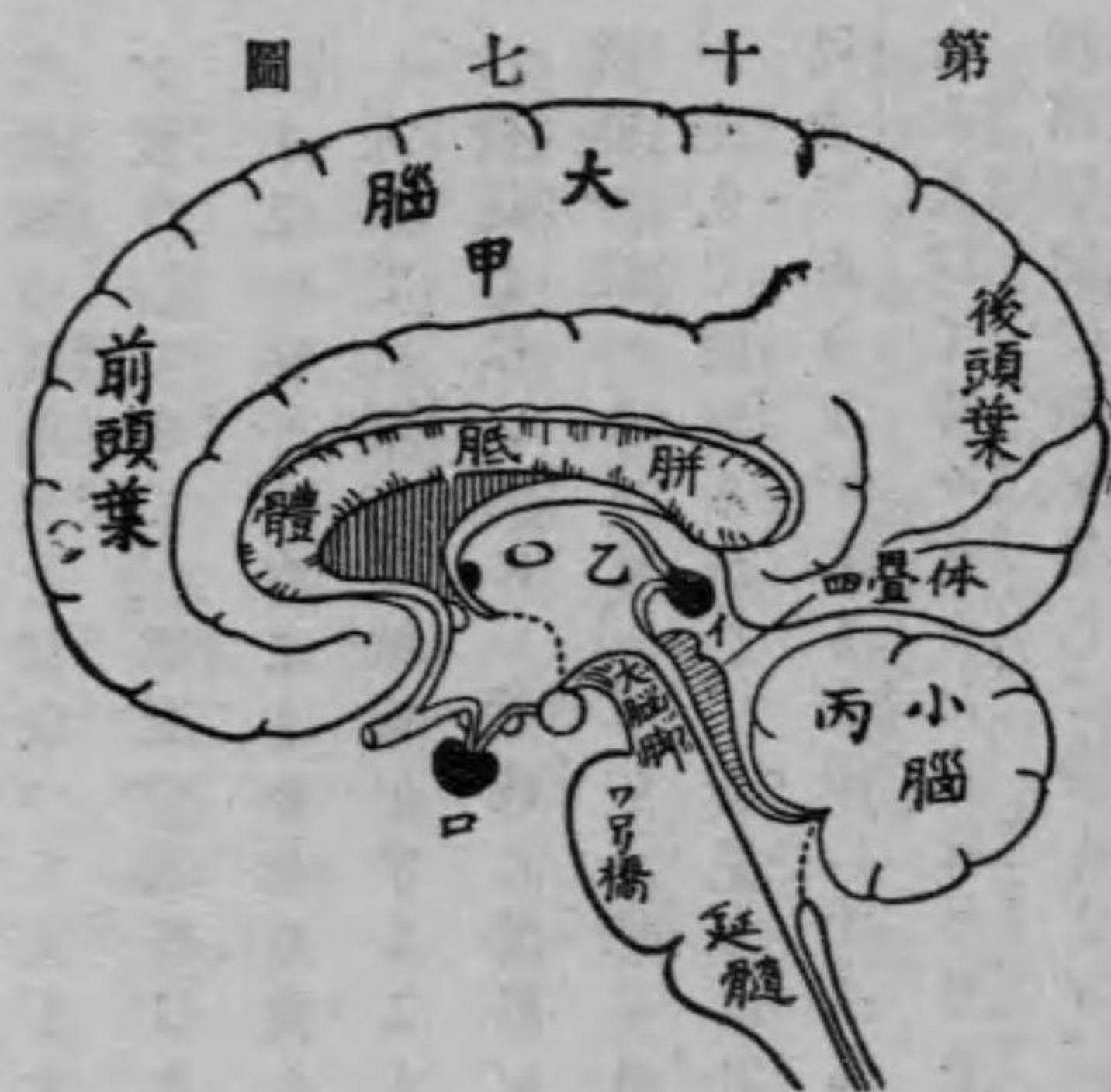
お互が瓜々の産聲を擧げてから其の一生を終る迄には、年々歳々その心身の上に随分色々の變化が起つて来るものであります。其の中にも彼の青春期に來る心身の變化ほど世にも不思議な現象はありません……昨日迄無邪氣であつた少女が、何故俄に物思ひに沈んだり、月を見ても花を見てもたい譯なしに涙含むやうになるのであらう……？又手にも丁へなかつた腕白小僧が何故急に打つて變つて大人らしくなり聲迄も太く大人びて來るのであらう……？

不具者か白痴ならざる限り、百人が百人ながら皆一度は斯かる變化の起るものであるから、世人は餘り之を不思議とも考へぬやうであります。若し如何なる作用で斯んな急激な變化が起るのかと問はれたならば、如何なる大哲學者でも大聖人でも、たゞ不思議とか神の攝理とか答ふるより他に説明の途もありません。所が幸に吾々はホルモン學理の進んだお蔭で

此の難解な謎を科學的に説明し得るやうになりました。

今我々の腦を仔細に調べて見ますと、大脳第十七圖(甲)の後で、第三腦室(同圖乙)の背の方、丁度大脳(甲)と小脳(丙)との間に小指頭大の「松葉腺」(イ)と名づくる橢圓形の腺がある。

大脳の縦断面 (松葉腺及び大脳下垂體)



又第三腦室(乙)の前下方(圖中(ロ)に漏斗状を早した小指頭大の大脳下垂體と名づくるものがあります。

是は久しき以前から諸解剖學者の知悉して居たことでありますが、併し此の二つのものは抑々如何なる作用をするものかといふことが全然不明で殆どその存在の意義を説明することさへ能きなかつたのであります。

(4)「松葉腺のホルモン」所が、今試に幼稚

な雄雞の松葉腺を切取つて見ますと、間もなく其の幼雞の生殖器がズンズン發育して来て、雞冠や蹴爪なども大くなり、時を告げたり雌雞に交尾を挑むといふやうなことを始め出します。

人間では斯んな試験をすることはできませんが、此の松葉腺がまだ十分に發達しない間に、腦内に腫瘍が出来たり或はその他の病で此の松葉腺の機能が衰へますと、其の子供は身長がメキメキ延びて男兒では鬚鬚や陰毛が生えて聲變りがし、女兒では乳房が大くなるといふ風に、未だ六七歳の兒童でありながらも立派に十八九歳の青年男女同様になり、殊に其の思想も大人びて時々堂々たる壯年男子を驚かすやうな議論を吐くといふやうな所謂早熟の徴を呈して參ります。之は恰度幼雞の松葉腺を切除した場合と同様の結果でありますから、畢竟松葉腺のホルモンには性慾の發達を促進する作用があるといふことが判ります。が之に反して

早熟の一原因

(5)「大脳下垂體のホルモン」には全く松葉腺とは正反對に、性慾を促進せしむる作用があるのであります。

晩熟の一因

今試に動物の大脳下垂體を切除して見ますと、一般に其の身體の發育が著しく阻害されて骨も十分發育せず、殊に生殖器の發達が頗る不完全となり、卵子も精液も出來ず、全く生殖不能に陥つて了ひます。人間でも若し此の大脳下垂體が何かの病にかゝつて其の機能が衰へますと、年齢が長けても幾歳迄も乳齒が残つて乳臭い容貌を呈し、身體も精神も生殖器も殆ど小兒の様な状態に止り、殊に新陳代謝が緩慢で皮下脂肪が鬱積するから身體は非常に肥胖して參ります。

如何程自惚れて見ても所謂文明人のする仕事は甚だ杜撰粗漏なもので、或は米騒動が勃發してから施米を奨励したり、又折角學理的に完成を期した堤防が大出水の爲破潰せられてから漸く植林の必要に氣付くとか、或はコレラやインフルエンザが猖獗を極めてからポツポツその豫防法を講ずるといふ風に、何事でも衝き當つた上でなければ氣の付かないやうな憾があります。

所が自然のする仕事といふものは飽く迄も行き届いたもので、永遠にその種の存続し得らるゝやう、豫て吾人に大脳下垂體を與へて生殖器や性慾の發達に備ふると同時に、一方では精神も肉體も未だ完全に發達しない幼弱者には即ち松葉腺を與へて其の性慾の發達を抑制し、總て心身の發達する頃を見計ひ松葉腺の作用を衰へしめ、以て種族永續の大業を大成せしめるといふ風に、常に永遠の大計を失はぬと共に然も目前の危害豫防の道をも講じてあるのであります。而して此の目的を遂げしむる爲には必ず相反對せる二力を與へ、その二力の均衡によりて當面の調和を保持し、更に全身各部に散在せる諸臓器のホルモンを以て彼此互に相助成し或は相抑制し、以て精神と肉體、理性と情念、自然と人生との調和を保持し得らるゝやう、至美至妙なる本能を賦與してゐるのであります。我々は殊に卵巣や辜丸で製出さるゝホルモンの妙機を知るに至つては一層這般の感深くするのであります。

(6)「生殖腺のホルモン」

辜丸や卵巣が吾々の種族保存上最も大切な機關で

(大正九年十月補記)

あるといふことは、原始時代の人民でも已に知悉して居つた所でありませうが併しそれはたゞ精糸や卵子の製造所として辜丸や卵巣を尊重したのみで、精卵以外に其處から如何に妙機あるホルモンが分泌されるかといふことは極く最近まで夢にも想像されなかつたのであります。それで古代では種々なる宗教的迷信や、或は妃嬪等の番人や或は貴婦人の寵弄者を造る目的で、遠慮會釋もなく去勢術 *Kastration* を施し、大切な辜丸を除き去つて了ふといふやうな蠻風が行はれて居りました。

幸に文化の進んだ今日では斯んな蠻風は廢され、たゞ家畜の性質や筋肉を柔げるため、牛馬などに去勢術を行ふのみであります。併し慈ひ人智が進み卵巣剔出術などが何の危険もなく遂行さるゝやうになつた餘弊として、歐米の貴婦人間にはたゞ子供の出来るのが面倒だといふ位な單簡な要求や、又彼のマルサスの人口制減論などに過られて往々自ら好んで去勢術を受けるといふやうな惡風が行はれて居るさうであります……これは畢竟辜丸や卵巣なるものが、たゞ生殖作用を營むだけの機關であつて、已に相

ホルモンと内分泌

三〇一

當な後繼者のある男女に取つては餘り用事もない、寧ろ或意味に於て有害無益なものだと速断せる結果でありませうが、一度此のホルモンの妙機を知りますと、此の間、實に恐るべき人生の悲劇が演ぜられつゝあることに悚然たらざるを得ませぬ。

蓋し漸次ホルモン作用に關する研究の進むに伴れ、卵巣や辜丸なる生殖腺は、たい精糸や卵子を造るだけの場所ではなくして、實は辜丸には男性卵巣には女性といふ吾人の精神生活、就中感情生活の上に最も大切なる男女特有の性情を賦與すべきホルモンが、此等生殖腺内のライヂツヒ氏間質細胞から分泌されつゝあるものだといふことが開明になり、従つて所謂文明貴婦人等が折角避苦享樂の目的を遂げんとした去勢術のため、卻つて妊娠以上の苦痛を招き、延いて家庭—社會に恐るべき不幸を醸しつゝあるといふことを首肯せざるを得ぬやうになつたのであります。

今試に雄雞の辜丸を剔出して置きますと、其の雄雞は漸々雞冠が小さくなり、時も告げねば蹴合もしないといふ風に、雄雞特有の性格が消失しま

雄雞の性情を全然一變せしむる實驗

すが、若し雄雞の卵巣を剔出して之に辜丸を移植して置きますと、雖て其の雄雞に雄性化が起り雞冠が大きくなり蹴合を始めるといふ風に、此に雄雞の性格が變じて參ります。

此の現象は人間に於ても略同様でありまして、病や外傷のため、若し人間の辜丸を剔出しますと、曾て剛體であつた男子も、漸次因循姑息となり髯鬚も薄らぎ喉頭突起も後退して聲も細り、起居動作總べてが女々しくなり、容貌までも柔和になります。反之女子が其の卵巣を失ひますと、次第に優しい女の美性が無くなつて、坐臥進退も荒々しく、聲も男のやうに太くなつて鼻下に薄髭さへ生じ、胸を突き出して外輪で歩き出すといふ調子で、其の體性格まで全然一變して了ひます……雞や鼠や牛馬であれば假令中性にならうと變質にならうと我々人間の爲には餘り痛痒も感じない寧ろ硬い雄雞の筋肉が、雄雞同様に軟化すれば食用に便利な點もあるのであります。高等複雑なる知識感情を有する人間の中性や變質といふものは甚だ工合の悪いもので、さう雞や牛馬のやうに去勢されては大變であり

ホルモンと内分泌

三〇三

變性男女の特徴

元來男は剛氣闊達で細事に拘泥せず、飽く迄も男らしいのが其の長所であり、女は之に反して何處までも優しく従順で、萬事につまじやかな女らしいのがその生命で、斯く男女互に其の長所を以て各々他の短所を補ひ合つて行く所に一家の團樂も生ずれば社會の幸福も實現されるのであります。所が、中性男子や變性女子といふものは眞に厄介なもので、若し男子が去勢されると、漸次剛毅果斷闊達等、男性特有の長所を失つて、たゞ柔弱陰鬱な猜疑嫉妬の強い女の缺點ばかりが現はれ、又女子が去勢されると、女子特有の優美細心などの美點が無くなり、粗暴殺伐傲慢等、男性に免れ難い缺點のみが長じて來るといふ風に、變性中性の男女は、何れも男性の缺點と女性の短所とばかりを集めた、木とも竹ともつかぬ人間になつて了ひます。……これでは到底家庭の平和が成立しないばかりか、間接に社會の蒙る損害は測り知らぬものがなければなりません。

併し病氣のため、實際別出手術を施さねば忽ち一命に關するといふやう

な場合であれば其れも亦已むを得ませぬ。又彼の善種學の立場から白痴癲癩、或は道德缺損症や殺人狂者などに去勢して其の種族の滅亡を期するのは、その個人の不幸は別として大に社會の不幸を減ずる所以でもありませうが、併し宗教的迷信の爲に妄りに去勢をしたり又彼の悪い意味の佛蘭西式自由思想で、或は月經困難が五月蟬いと云ふ子や産むのが面倒だから別出して了ふといふ様な、开んな悪風は流行させたくないものだと思ひます。……勿論諸君の内には恐らくそんな間違つたお考の方は無いことゝ信じてますが、怎うかすると産婆や藥局生位の口車に乗り、深い後先の考もなくツイ僅かな眼前の苦痛を避けたさに、そんな手術を受けて——假令それで目前の苦痛は免れ得ても——更に意外な心的苦悶を招き、懊惱煩悶の極、遂に鬼籍に登られた方を、余は度々見受けた事がありますから、婆心の餘り此に餘計なことまで申し上げた次第であります。

「犯罪の陰には必ず女あり」といはるゝやうに性慾問題は實に人生の難關で、折角健全に發育し來つた前途有爲の青年男女も、之がため可惜一生を

ホルモンと内分泌

性慾の抑制難と
振作難

反故にしたり、或は自他の生命を傷ふやうな悲惨なことも起るのでありますが、然し又此の本能あればこそ人生に興味もあれば希望も起り向上も能きるのでありますから、彼の一派の宗教家や哲學者のやうに、妄に之を禁壓すべきものでもなければ、又禁制し得べきものでもありません。

處が世には色々の人もあるもので、一方には性慾抑制難の苦に堪へ兼ね所謂煩惱の犬に責められて遂に男根を切斷したやうな僧侶があるかと思へば、又一方には誤れる修養的形式や或は一知半解的の衛生觀に囚れて、その肉體にも精神にも何の異常なく、殊に完全な生殖器を具有し乍ら陰萎や性交不能に陥り、それがため天下の生殖器病専門家を歴訪したり或は參禪や催眠氣合等に浮身を墮して、卻つて其の病勢を増しつゝある人々も随分少くありません。

本院にも度々斯んな方が見えましたが、其の都度時に余の遺憾に感じましたのは、一般に模範學生や模範青年として目されつゝある青年に、斯ういふ人知れぬ苦痛に悩まされて居る者の少くないといふ一事でありまして

性慾の人為的増減
に關するスタイナー
ツハ氏の實驗

余は痛切に彼の皮相なる形式的修養や、物質萬能式療法の缺陷を感じました。それで、此の序に生殖と性慾とは以て大に非なる全然別個の問題であつて唯男根切除や去勢術位では到底煩惱の犬を掃ふ事は出来ないものだといふことに關し、左にスタイナーツハ氏の興味ある實驗の一二を述べ、以て性慾衛生上の參考に供しようと思ひます。

今交尾期中の雄蛙を取り、之に去勢術を施して置きますと、短時日中にその性慾が減退して抱擁反射現象が消滅しますが、若し之に他の性慾旺盛な雄蛙の辜丸を磨り潰した液汁を注射しますと、二日後には又抱擁反射現象が起つて參ります。又先天的の性交無力な雄蛙に交尾期中の蛙の辜丸搾汁を注射しても立派に性慾が喚起されて參ります……

此の現象は人間に於ても亦同様でありまして、例へば輸精管を結紮して精糸の排泄道無くするか、或は辜丸の壓潰されたやうな場合には生殖無力に陥りますが、それでも辜丸内のホルモンは依然血中に分泌するゝため、常に男性の性格が減弱しないばかりか、性慾も十分に起り性交能力も無く

ホルモンと内分泌

なりませぬ。

猶特に面白いのはスタイナーハ氏が性慾旺盛な雄蛙の神経中樞を磨り潰して得たる液汁を、故意に去勢した雄蛙や又は先天的の性交無力な雄蛙に注射した試験であります。即ち此の試験で何れも立派に性慾の喚起さるゝことが確かめられました。さて雌蛙又は性交無力な雄蛙の神経中樞から造つた液汁では勿論のこと、既に交尾期の終つた雄蛙の睾丸から製出した液汁では幾ら之を注射して見ても抱擁反射現象が起らなかつたといふことではありません。

そこで此等の事實を綜合して見ますと、生殖と性慾とは其の原動力が全然異つて居るといふことが明瞭でありますから、従つて如何に生殖腺の機能ばかりを減して見ても、ライディツヒ間質細胞そのものゝホルモンが滅しない限りは猶且性慾の消失するものでないといふことが判ります。

されば一時世上に噂の高かつた彼の断根和尙の如きも、若し當時新聞紙上で傳へられた如に、その僧侶が所謂道心を全うする目的で、其様英断(?)

を取へてせられたものであるとせば、それは頗る間違つた考へであるといはねばなりません。抑も男根を断たねば性慾を制することができないやうな形式的修養では、假令断根しても到底道念を全うし得るものには無いといふやうな形而上の問題は姑く措くことゝ致しました。兎に角以上生殖腺のホルモン作用を知れば、外生殖器を破潰した位で性慾の抑制されないのは自明の道理で、又假令完全に生殖腺全部を剔出して見ても、若しそのホルモンが神経中樞に貯蓄され大脳下垂體の機能が旺盛になつて居れば御々煩惱の犬は去らぬ道理であります。

(附記)最近世上に噂の高いスタイナーハ氏の所謂「若返り法」の要諦は睾丸に接近して精系を結紮するのである……ス氏は此の手術によりてライディツヒ氏間質細胞——ス氏の所謂「精情腺」の増殖を促して一旦老退した、性慾を回復し、凡ての心身の生活機能を復活せしむることが能きるといふ意見で、之を實地家鼠に就いて試験し、よく其の目的を遂げ、又リヒテンスタイン氏はス氏法を三人の患者に應用して皆同様の成功を収

ホルモンと内分泌

めたといふことである……勿論ス氏若返り法の實際的價值如何は今後多くの實驗の結果に待たねばならぬが、ス氏の此の試驗は少くも彼の斷根や卵巢照射位で制慾の目的を達し得られるものでないといふことを立證するには十分であらう。(大正一〇、一二八)

それで、外生殖器に何等か機質的疾患のあるものに對して適當な理化學的療法を施すのは固より必要の手段であります。何等局部に異常もない性交不能者や、性慾異常亢進者に、たゞ單簡なる藥物や電氣のみで其の能力を増減せしめやうとするのは抑々ホルモンの妙機を解せない無智者の所業でありまして、異常の性慾亢進や或は減退を治するには是非とも今少し徹底したる修養即養生の道を講せねばなりません。

併し此の話を餘り具體的に進めて行きますと、或は一般の風儀を害し世を荼毒するやうな惧もありますから、遺憾ながら陰萎や性慾亢進者に對する具體的の解決法は、實際其れ等の苦痛に惱める人だけに、仔細に診察の上で御話することゝ致します。が、概して所謂「神經性の陰萎」は多く差

神經性陰萎の原因

恥心恐怖心の所産でありますから、斯かる病者は先づ異性に對する羞恥心や陰萎恐怖の感情を一掃すべく、大にその意志を鍛練するのが何よりの急務であると思ひます……殊に下巻説く所の「鍊體常息」の實修により各自の本務とする問題に其の全精力を集中し得べきやう其の心身を統一せば、如何に強烈なる性慾亢進でも、又強度の陰萎でも容易に之を左右し得た事實があるのですから、已に有らゆる療法や修法に失望せられた方でも決して絶望さるゝには及びませぬ。

之を要するに吾人の健康、將社會の幸福に最も緊要なる調和の現象なるものは、正に相反對せる力の釣合によりて實現せらるゝものでありまして彼のヘルバルトが「到る處に“ungesachtet”ニモ拘ハラズ」と“Dennoch”「併し作ラ」とがある」といひましたやうに、自然は我々に相矛盾著すべき種々の反對作用を賦與しました。即ちその性慾を促進すべき大脳下垂體と之を抑制すべき松葉腺と各正反對の作用あるホルモンを與へ、又交感神經と副交

ホルモンと内分泌

交感神経副交感神経及び迷走神経等の作用に關する詳細は本講下巻参照

感神経と全然反對作用を有する二自宰中樞を與へて外生殖作用の消長に便し、加之二面生殖腺のホルモンを以て春情の發動を促すと共に他面副腎のホルモンを以て之が鎮制に備へる等、彼是相俟つて或は野獸の如き猛者の情性を柔げ、或は小羊の如き處女に脱兎の勇を與へ、以て殺伐なる社會の調和を得せしむべく畫策したやうでありますから、幸に幾分でも此の情深き大自然の妙機を窺知し得たる吾々は、最早淺薄皮相な小智小才を以て妄に不自然な技巧を弄するが如き愚學を廢め、此等神經作用とホルモン作用とを適宜に調和統一せしむるやうな徹底した第一義の修養に、大に其の力を致さねばならぬと思ひます。

大正七年十月九日前期講習第三講速記

蛋白の靈能と血清の偉效

以上は自然が吾等に賦與した靈妙なるホルモン作用のホンの一端を敘したのに過ぎませぬが、此の他我々人間の身體内には、猶種々靈妙なる自治療能がありまして、吾等の身邊を圍繞せる凡百の事物中、其の吾人の健康

人種の相違は蛋白質の相違に基づく

ホルモンと内分泌

三二三

保全に有利なるものがあれば、悉く攝つて己が生命の資料とすべき準備を怠らぬと同時に、苟も來つて吾等が健康を破卻せんとするものあらば、それが如何に么微細小なものであつても、必ず之を撲滅掃蕩せねば已まないといふやうな能力が自然に賦與せられてあるのであります……

例へばお互の血液の如きも、平素は瓦斯交換や組織の榮養等、主として新陳代謝の業に従事して居りますが、若し一朝細菌其の他——人體細胞固有の蛋白と其の性状を異にした——異種の蛋白質が吾等の身體組織内に闖入し來るやうなことがありますと、直ちに此の外來の異性蛋白を破壊すべき威力ある特異の化學的新成分が血中に涌出て盛に活動をはじめます。

(1)「蛋白の特性」元來生物の身體を構成せる諸成分中、蛋白質がその主要な成分であることは、已に世人の熟知せる所であります。同じ蛋白質でも植物の蛋白と動物の蛋白とは全然その性質が相違して居るといふばかりでなく、同じ動物でも、犬屬と羊屬と猫屬とは、各々其の蛋白質が大に相違して居る。同じ人間でも白人と黒人とは其の蛋白質に多少の相違がある。

更に厳密にいへば同じ日本人でも族姓の異なるに従ひ——各々其の面の異なる如く——各自の蛋白質そのものを異にし、百人百種千人千様の特性を持つて居るのであります。

(2)「血清反應」それで、今試に或種の動物、例へば羊の体内に犬の血液を注射して見ますと、羊の血の蛋白と犬の血の蛋白とは性質が違ひますから、羊の白血球は其の犬の白血球を破壊すべき血球溶解素と、犬の白血球を一塊に凝固せしめる血球凝集素と、又豫て犬の血清中に溶け込んで居る蛋白質を不溶性の蛋白質に變じて之を沈澱せしめる沈澱素と、三様の「化學的新成分」を造り、之を己が血液中に分泌して外來の異成分たる犬の血液を破壊して丁ひます……そこで此の羊の血清を取出して、之に人や馬や兎や猫や犬等の血液を混ぜ合せて見ますと、犬以外の動物の血液に對しては何等變つた反應も起りませぬ。所が唯獨り犬の血液だけは、その白血球が破壊されて一所に塊り、又その血清にモロ／＼が出来て沈澱するといふやうな著しい反應が起つて參ります……

血液の成分は
●赤血球
●白血球
●血小板
●纖維素
●血清
●血漿
●血液
●固形體
●液體
●に右固形體を除き
●し血清より更に
●維素を除きし透
●の液なり

之は犬の体内に羊の血を注射した時でも、又人體に牛の血を注射した際でも、或は牛に人間の血を注射した場合でも尙且同様の現象が起るのでありますから、彼の常に貧血を苦む男女等が、只管己が血を殖したさに、スツポンの血でも牛の血でも、たゞ血液さへ取込んだらよいものゝやうに心得て、無暗矢鱈に動物の血を吸りたがるのは大に考へ物で、殊に輕卒な亞米利加邊の醫家などは貧血患者の靜脈へ他動物の生血を輸入したやうな時代もありましたが、今から思へば實に滑稽千萬の話だといはねばなりません。

(3)「免疫性」遮莫何れの生物でも之に異種族の蛋白を注射すれば、必ずその異種蛋白を破壊すべき血球溶解素——血球凝集素——沈澱素なる三様の新成分が出来るといふことは、お互の療病上——養生上非常に心強い大切な威力であります。即ち今鳥なり牛なりの体内にチプスとかチフテリーとか、何かの病菌を注射して見ますと、猶且同理によつて、ただ其のチプス菌或はチフテリー菌のみを溶解して、之を凝集せしめ、且その細菌培養液の沈澱を

ホルモンと内分泌

起さしめるといふ三様の新成分が出来ます。言ひ換ふれば或動物に或一定の病菌を注射すると、其の動物の血中に其の病菌を破壊するか又は其の菌毒を無効にすべき靈能ある成分が出来、其の後は其の動物に同じ種類の菌が侵入して来ても直ちに之を撲滅して了つて、決してその病菌に胃され

チフテリ—治療血の由来

此の理を巧に應用して成功したのが、現代醫界の誇とせる彼のチフテリ—治療血清でありまして、畢竟生物の生命原たる蛋白そのものが、各種類等により各々特有の性質を具へ、嘗て異種類の蛋白の混入を許さない。若し偶々異種類の蛋白が侵入すれば、假令それが自體の蛋白よりもヨリ優良なる蛋白であつても、荷も己が稟賦の蛋白と其の性質を異にせるものであらば、必ず之を破壊し驅除し去らねば已まないとはいふ特性あらばこそ、斯かる起死回生の靈劑も製出せられた譯なのであります。所で、現代醫界には、彼のチフテリ—血清の如き卓效ある免疫血清の完成された数は未だ僅々五指を屈するに過ぎないから、聊か心細いやうな感

もありませんが、然し縦令人爲的には未だ完全な免疫血清が出来て居なくても、吾人の人體には最も完全な自家製造の免疫血清が自然に出来るのでありますから敢て悲觀する必要はありません。現に彼のコレラやチフス等の流行時に際し、實際其の身體内には多數の病毒菌を保有し乍ら、然も本人は少しも其の健康を害されずに平氣で活動を続けつゝ所々方々へ盛に病菌を散布し廻り、それがため何時も防疫當事者を手古摺らせる所謂保菌者なる人は何時の流行時にも發見さるゝ所であります。之は全く其の人の身體内で完全なる免疫血清が製造されつゝある證左なのでありますから、我々は此の自然が賦與した靈能を旺ならしむべき修養さへ怠らねば漫に傳染病位に戰慄する必要はないのであります。

(大正九年十月補遺)

【四】藥物過信手術濫用の弊風と
醫術の眞諦

要するに、お互の身體には決して無用の機關や組織は有りません。即ち頭髪の尖端から足趾の爪先に至る迄、悉く自衛—自治機能を具備し、殊に全身限なく循環せる血管を媒介とし、靈妙不可思議なるホルモンを以て各種機能相互の補助調和統一をはかつてゐます。而して若し偶々病菌の來つて我を侵すやうなことがあれば、忽ち免疫素を作つて之に對抗し得べき靈能を發揮し、寢た間も吾等が生命の安固を圖りつゝあるといふことには最早一點の疑を挟む餘地がありません。

尤も貧弱なる現代人の智識では未だ其の機能が不明で、何だか無用の長物の様に見ゆる組織もあります。曾て無用物視せられた副腎や松葉腺に前述の如き偉大な靈機の宿れることが發見せられた事實より推しますれば、將來科學の進歩するに連れ、現今猶無用物視せらるゝ組織から又何時如何なる意外の靈藥を發見せぬとも斷せられないのでありますから、怒ひ一知半

解な殊に機械本位の既知の智識で凡ての事象を妄斷し、妄に不治の宣告を與へたり徒らに人江を弄して自然を傷ふ様なことをしてはならぬ筈であります。所が、御承知の如く、現代の醫術は有らゆる世界の學者が病原探求學理の爲その全力を傾注し、種々なる動物試験の成績や多くの統計的觀察から歸納した根據ある論理を基とし之を實地に應用した結果として、前記の血清療法や、殊に最近サルヴァルサンの發明によつて俄に其の聲價を高めた化學的療法の如き、實に前人未發の大成功を遂げました。又外科手術の如きもリスター氏以來豫防消毒法の發達したお庇で、古人の戦慄した開腹術の如き大手術でさへ、宛らチヨッキを脱ぐよりもヨリ容易な業となりました。これは正に世界人類のため大に祝福すべきことであります。併し一利一害は數の免れない所で、第一講でも述べましたやうに怒ひ専門的學理や技術の進んだ餘弊として、兎角事實よりも論理、常識よりも専門智識が偏重せられて、細菌専門家は血清或はワクチン萬能、外科醫は手術萬能を唱へるといふやうな傾向を生じ、それがため動もすれば注射やラヂウム

藥物過信手術濫用の弊風と醫術の眞諦

慢性肥大に陥れる
扁桃腺腫の自治

化膿性中耳炎の自
治實例

電氣メス等を濫用するやうな弊風がないとも限りませぬ。

現に余が多年慢性肥厚に陥つた「扁桃腺腫」の如きも、當時専門醫家諸氏の診断では断然之を切除しなければ到底根治の途なしといふ事で、屢々その切除手術を促されたものであります。元來臆病な余は手術の危険を恐れて再三來襲する局處の腫起疼痛や嚥下困難等の苦痛を忍びながら優柔不斷で住再幾多の星霜を重ねました。それにも拘らず不思議にも何時の間にか根治して了つて精常以來此に滿十年餘、日々斯く大聲を發しつゝ酒も飲めば眞も喫ひながら今に何の異常も起つて参りませぬ。是は抑々何物を我等に語るのではありませんか……?

又二三年前自分方の下女が「化膿性中耳炎」にかゝり、外聴道の内腔から外耳の周圍一體が腫起發赤して、疼痛激しく、それがために連日連夜一睡もせず、苦しみ跪いたことがあります……其の節折悪しく余は少し遠方へ出張せねばならぬ急用が出来ましたので、不在中その手當方を耳鼻咽喉科専門の某醫に託するやうに命じて出發しました。所が件の専門醫は二三日

間下女に治療を試みた結果、是非とも入院して切開手術を受け、一个月餘り絶對に安静休養を嚴守せねば或は一命を保し難いといふやうな宣言を與へられたさうで、下女は吃驚仰天して只管余の歸阪を待ち焦れて居ました。

余は歸宅早々右の話を聞き早速診察して見ますと、如何にも某醫の診断されし通り下女の病は餘程重症になつて居りましたが、然し余は是位の病は自然療能の力で治らぬ筈はないと信じましたから、歸宅以來余自身で下女の治療に當り、何とかして見血的手術をせず癒して遣りたいものだと努力しました。そこで局所の手當はホンの姑息な對症療法丈に留め、主として病者の精神を鎮むるやう刻々強固な暗示を與へ、且、日夜迎苦鍊磨——下巻参照あれ——の實修に全力を傾倒させましたら日ならずして耳輪の後方に自潰口が出来ました。そこで早速其の自潰口を利用し、排膿に便ならしむるやうな手當を施してやりました。すると果せるかな結局半日も就座せず、一刀のメスをも加へずして、日々多少の家事なども手傳ひながら蟲の蟄したほどの痕跡すらも留めずに一个月足らずで立派に根治し、爾來二個年餘

の今日に至る迄、それがため些少の變更をも來しませぬ。
 而してこれと同様の筆法で、堂々たる耳鼻咽喉や婦人科その他一般的外科専門大家から再三手術を施さねば絶対に治癒の見込なしと宣言せられた病者を、専ら自然療能の力のみで自治せしめた實例は殆ど枚擧に遑がありません。

處で、斯んな治療法は、之を夫々専門家の見地から評せば、何れも頗る姑息な所謂膏藥療法として排斥すべき邪法でありまして、余の「扁桃腺腫」でも、下女の「中耳炎」の場合でも、何れも當時専門諸家の示された處置法が、醫學上最も合理で正當な手段であるといふ定説になつて居るのであります。余も元々外科専門醫を以て身を立てようと思つたほどでありますから是位のことは萬々心得ても居りますが、併し如何に専門醫學上それが正當な合法的な手段でありましたも、元來全身麻酔を要するやうな見血的大手術を受けるといふことは、有らゆる病者の最も嫌忌する所であるばかりか、開んな大手術を受ける爲には少くとも二三週間の入院てふ苦痛を忍ばねば

なりませぬから、それが爲に病者の蒙る財的・心的・體的苦痛の甚大なることは申す迄もありません。

それで、若し他に絶対に治療の策なき場合であれば、如何に不經濟でも心身的苦痛が甚大でも、それも亦已むを得ぬことであります。斯く自然療能の妙機を善用すべく些かの工夫を講じたばかりで立派に根治せしめ得べき途があるのに、殊更心身財共に多大の苦痛の伴ふべき大手術を施さねばならぬといふことは、縦令それが學理上合理の手段であるとしても決して仁術の本義に副うたものだと断せられませぬ。

勿論余は飽く迄も眞の適應症に對する外科的手術や血清の靈能、サルヴアルサンの權威等を信するもので、決して彼の一派の自然療法家や宗教的民間治療家のやうに、妄に醫藥や手術を排斥するものではありません。否、眞に藥物或は手術の必要を認められた場合には直ちに適當なる専門醫家を選定して之が治療を託するばかりか、若し適當の醫家を見出し得ざる場合には自ら投藥或は執刀の勞をも辭しないのであります。然も彼の一般内科醫

等が滔々藥物過信の弊に陥れるが如く、外科専門醫家も亦手術萬能の謬想に囚はれて、見血的手術の避け得べき病者にまで、好んでメスを加へつゝある事實を見聞することの、餘りに頻繁なるを慨嘆せずには居られませぬ。今一々具體的に其の實例を擧ぐることは到底時間もなく、又先輩諸大家の名譽にも關することでありますから之を省略致しますが、諸君は若し餘歴第三十九號に掲げられた彼の「まゝい」君——本講附録第九例参照——の一事だけでも仔細に玩味せられたならば、蓋し思ひ半ばに過ぐるものがあるであらうと思ひます。

されば余は今後自然科學の愈々發達し、物質醫學の益々向上進歩せんことを祈る點に於て、決して人後に落ちない積であります。然も將來如何に科學者が驚天動地の大發見を遂げ、チフテリ—血清以上の卓效ある治療血清やワクチン或はサルヴァルサン以上の化學的特效藥が續々發明せられ、又心臟や肺臟乃至腦髓の外科的手術が、今日の開腹術の如く、無難作に遂行し得らるゝやうな醫學的黃金時代が實現せられましても、猶且「療病の

醫術の眞諦

第一義は自然療能であつて、人為的醫藥の如きは療病上抑々第二義以下の末技に過ぎない」ともの斷言するに躊躇致しませぬ。

是は已に二千數百年前の醫聖ヒポクラテスが「自然は醫なり、醫は自然の僕なり」(Natur ist Arzt. Der Arzt ist Diener der Natur.)と喝破した、實に醫術の眞諦でありまして、如何なる醫藥萬能論者でも、此の療病上の大理想には寸毫の異議をも申し立つべき資格がないのであります。されば人の病を治めんとするものは、飽く迄も自然に對する從順なる忠僕となり、聊かも此の自然療能を傷けないやう注意に注意を加へ己が専門の立場や、自我感情などは全然之を没卻して、虚心坦懷以て徐ろに病者の経過を観察し、若し多少たりとも其の自然療能を輔佐し得べき道を發見したならば、假令それが理化學的療法であらうと精神的療法であらうと、又現代醫學の學理に合つても合はなくても、或は漢法藥でも民間藥でも、苟も病者の自治療能を輔佐し得べき客觀的價値の認めらるゝものがあらば、悉く之を採用し、その最善の時機を擇んで最善の法を施すべく、全力を傾注せねばならぬ義務が

藥物過信手術濫用の弊風と醫術の眞諦

あるのであります……

之が眞に醫師たるの天職を完うする所以でありまして、此の目的を達する爲には、醫者も病者も此大に自覺修省する所がなければならぬと思ひます。所が、怒ひ物質科學が進歩して電氣やX光線——ラチウムのやうな前代未聞の發見が出来、殊に醫學がチフテリー血清治療やサルヴァルサンの如き化學的療法に成功し得た結果として、病者も醫者も、此等の化學的醫學的新發見新發明物よりも、更にヨリ以上の靈妙なる威力が我等人體細胞内に宿れることをも打忘れ、如何なる疾患でも必ず理化學的醫藥の力のみを以て驅除せねばならぬもの、又除去し得らるべきものだと思ひ込んで、精神の修養などには寸毫の注意をも拂はず、若し物力の如何ともし難き病者を見れば——物的療法以外には更に何等の方法をも試みないで——一も二もなく之に不治の宣告を下して了ふやうになりました爲、前講——第二講一〇六頁神祕的醫術と唯物的醫術との優劣——でも述べました如に、堂々たる名醫大家が色々な迷信療法家に鼻をあかされるやうな事も出来るのであります。

現に「心身の革命」の巻末に掲げられた眞野氏や本書附録第九例の如きも最初余が此等の病者を診察した際には——如何に自然療能の威力を信する余自身でも——眞逆斯んな難病者が助らうとは夢にも考へ及びませんでした。否、一ヶ月の餘命さへも保證し得なかつたのであります。が、併し豫て絶對に信頼して居つた病院から無慈悲に追ひ出されて、最早一刻も身を託する處なく、今にも息の絶えさうな此の痛々しい病者に對して、不治の宣告を與へるのは怎うも忍び得ませんでしたから、余はたゞ病者を慰撫するだけの考へで、兎も角も如上自然療能の妙機の一部を語り且それを旺盛ならしむべき活養法の一端を簡單に示指して歸らせたのであります。

所が、已に醫藥に絶對失望せられた病者の身に取つては、此の僅かな余が慰安的言句でも、それが非常な歡喜の種となつて、爾來熱心に此の活養講話を傾聴し、且懸命にこれを實踐せられた結果として、不思議にも九死に一生を取り留め、肝腎救はれた本人自身よりも、病者に其の自治策を教へた余自身がまづ吃驚したほどの好結果を奏して今猶健康に活動されつゝ

あるのであります。

尤も、之は余が精常以來の経験から觀ても實に極端な破格の實例でありまして、今此に其の治癒機轉を科學的に説明することは、到底現在のホルモン學說でも猶且不可能の問題で、たゞ不思議といふより他に適當な言葉も見出されません。併し余が精常發表以來此の活養法の具體的實行法を實修したばかりで、根治の幸福を見られた慢性胃腸病や慢性腎臟炎或は糖尿病—心臟病—喘息—肺結核その他の多くの病者等は、之を醫藥本位の一般醫學的見地から評せば、何れも破格の奇蹟的實例のみだといはねばなりません……

妄に破格や不思議を口にするのは、畢竟己が經驗の不足と知識の淺薄とを自白するのも同然でありますから、余は成るべく不思議といふ語を使用しなくてもよいやうに今後愈々物心的科學の研究を怠らない積であります。然も残念ながら今日の所では猶且不思議といふ語を用ひなければならぬほど、それ程靈妙不思議な自然療能の妙機が我々の身體細胞に宿つて居

るのであるといふことを此に言明するのは、決して自分の不名譽でもなければ又科學の神聖を汚す所以でもないと思ひます。否、科學が進歩したればこそ斯くまで不思議な靈能を吾々が父母から與へられたといふことを知り得たのでありまして、今後科學が進めば進む程、猶ヨリ以上不可思議な靈能の發見さるべき趨勢を呈して居るのでありますから、假令有らゆる天下の名醫大家に匙を投げられた難治病者でも、又如何に必死の逆境に沈淪せる薄倖者でも、決して絶望や落膽で己が「生の力」を侮蔑すべきものではありません……

苟も生命のあらん限り、息の通へる限り、お互は飽くまでも己が細胞内に潜在せる此の妙機に信賴し、善く自然の理法を遵守して生の復活且擴充を計り、以て九死中猶一生を贏ち得べく自己の全力を傾注するのが實に生物本然の要求であり又自己自身に對する自己の責任であつて、此に生命の權威あり、衛生の根源あり、醫術の眞髓あり、修養の根柢があるのであります。

されば近世醫界の天才にして一大思想家たる彼のピール氏が「疾病の治癒に於ける自然の秘密を窺知し、若し個體の力が治癒の目的に及ばざるものあらば之を助け、缺くる物あらば之を補ひ、過ぎたるあれは之を抑ふるの道を誤らざる者こそ「眞の醫人」と賞讃せらるゝなれ」と言ひました通り、古來良醫國手として一世の尊信を幸めし人々は、何れも此の天則——自然の大理法を遵奉し、苟も之を誤らざるやう専ら自己の修養に力を籠め、病者に絶大の安心を與へて徐ろに病疾の経過を看視し、以て善良なる自然の経過を執らしめたものであります。

それで近世でも、猶且多年實地の經驗に富んだ相當の信望ある人格高き眞面目な醫師では、決して輕々しく手術を弄したり新藥を濫用するといふやうなことは致されませぬ……實をいへば醫學者間では最早今日誰も醫藥萬能を信するが如き人は一人もないのであります。併し一方には何等之に代るべき他の妙法を發見し得ないのと、又一方には肝腎の病者が、多く藥物そのものに療病的能力のあるものだと妄信し、殊に珍しい舶來の新藥で

なければ利かないものゝやうに只管新藥を囑仰される弊習がありました。到底凡庸な醫師には此の病者の藥物過信熱を打ち消す力がないのと、此の二つの關係で、心ならずも前世紀の遺物たる姑息な藥物療法に甘んじ、多少でも病者の心理に投合するやうドシ／＼新藥を使つて居るやうな始末なのであります。

畢竟之は過渡期の現象として已むを得ぬ次第であります。併し醫界の先覺者等は何れも既に藥物療法には全然其の望を失ひ、今や自然療法や精神療法の方面に目を注ぎつゝあるものであります。醫學博士原榮氏も其の著「自然療法」中に「將來治療の進歩は療病上に成るべく投藥を避くるを醫師の義務として教ふるの目あらん」と明記されましたやうに、今一步醫學が進めば、必ず、一般醫家も段々藥を使はぬやうになることゝ信じます。

(大正七年十月九日前期講習第三講述記)

尤も斯く餘りに自然療能の妙作用のみを力説しますと、讀者の中には、それでは世には醫者も藥も絶對に必要のないもの？、什麼病でもたゞ抛つ

藥物過信手術濫用の弊風と醫術の眞諦

て置けばよいものだ！といふやうな飛んでもない誤解をなさる方がないと
もいへませぬから、此に『自然的自治療能と人為的理化學的療法との調和』
即ち『天醫と人醫との調和』といふことに就き一言蛇足を添へて置かねばな
りませぬ。

天醫と人醫との調和

已述の如く、植物でも動物でも凡そ生命のあるものは、皆以上自然療能
の妙機を具備して居るもので、殊に植物の如きは根も葉も悉く切り拂つた
小枝を地中に挿し込んで置いて、それで自然に根を下し新芽を吹いて立
派な大木となるものもあります。動物でも蚯蚓の如き下等なものでは其の
胴體を半分に切断せられても容易に死なないばかりか、癒て無くなつた胴
體を再生し、蝶蛹や蜥蜴の如きは肢や尾を切り奪られても、平氣で元の通
りの肢や尾が生えて來るといふ程それほど完全な再生力 Regenerations Kraft を
備へて居ります……高等動物、殊に人間では植物や下等動物のやうな調子に

再生現象

も行きませぬが、それでも、犬猫などは肢位を少々車で轢かれても別に外
科醫も頼まねば膏藥の御厄介にもならず、たゞ己が舌端で舐つて置くのみ
で立派に平癒して了ひます。

人間でも野蠻人や原始人、乞丐や無智低級な下層者流等は、彼の所謂文
明國民、殊にその上流都人士や智識階級者のやうに、幾かな腐敗物や不消
化物位で即座に胃腸を傷けらるゝといふやうな憂もない。萬一それに胃さ
るゝやうなことがあつても、たゞ一兩日間絶食休養して居れば自然に治癒
して了ふといふ風に、凡ての病毒に對する抵抗力も強ければ、自治療能力
も旺盛であります。が、唯獨り不幸なのは文明都人士でありまして、彼等
は多年の反自然——逆天體的體裁生活のため有らゆる病魔に對する抵抗力を
失ひ、従つて病毒を驅除すべき自治療能も減退して了ひました。殊に所謂
衛生思想の發達した上流の紳士淑女等では、愁ひ一知半解的な唯物式消極
衛生思想のため四六時中病魔の來襲を顧慮して、風を畏れ雨を怖れ、寒暑
に恐れ食物に怖れ、戦々兢兢寸時も心の安らぐ處がないので、それが爲折

藥物通信手術濫用の弊風と醫術の眞諦

角天から賦與せられた自然療能機を極度に減弱せしめ、輕症の感冒や一胃痛にさへも一々醫藥の力を借らねばならないほど其れほど抗病力が衰へて了つたのでありますから、たゞ之を放任して置いたばかりでは決して病の治るものではありません。

それで、かゝる虚弱者に對しては是非とも肉體的鍛鍊と精神的修養の力を以て、其の衰へた抵抗力を復活せしめ療病能を増進せしむべき必要があるのであります。若し其の自治作用催進に役立つ自然的或は人工的醫藥があれば、適宜に其の力を藉るといふことも亦決して無用の業ではありませぬ。殊に彼のキニーネやサルヴァルサン、チフテリ―血清の如き特效藥を以て一舉病敵の掃滅を企てたり、或は彼の必死の重症たる子宮外妊娠や腸疝症等に開腹手術を施して九死に一生を得せしむるが如きは、實に自然の默示に副うた仁術の名に背かぬ所業でありまして、斯かる病者に日吉凶や方角の良否位で手術を躊躇したり、或は御供水や御呪、御夢想式の民間藥で糊塗彌縫を事とするのは、宛ら漏電の危険を恐れて行燈や蠟燭

の火で暗い人生を送るが如き愚學だと謂はねばなりません。

之を要するに療病の第一義は自然であつて、醫術は第二義以下の末技に過ぎないといふ大則に基づいた「天醫」と人醫との「調和」即ち「自然療能」と「化學的療法」との「調和」が眞の醫術の妙諦でありまして、余の慢性癩に陥つた咽喉や氣管支或は肋膜肺炎等の痼疾が、何等特種の藥品も手術も用ひずして治つたのも、又以上チョイ〜述べました實例のやうに簡單なる此の活動養生の實行と余の施した極めて平凡な療法で、時々堂々たる専門大家の鼻を折るやうな奇效を奏し得ましたのも、畢竟余が此の自然と人爲との調和に多少の注意を拂うた結果に外ならぬのであります……それで苟も醫事―衛生の事に留意するものは、徒らに從來の唯物式療病法や消極的養生法位に満足せず、絶えず此の自然の大則に注目してホルモンや蛋白質化學の研究を進むると同時に、一面精神的未開の原野開拓に従事して科學に立脚したる精神療法や自然療法の改善進歩を謀り、以て「物質療法」と「精神療法」との調和「天醫」と人醫との「調和」を期せねばならぬと思ひます。

藥物通信手術濫用の弊風と醫術の眞諦

所で、精神療法のことには就いては一寸前講で卑見を述べて置きましたが、自然療法といふ語も亦往々彼の所謂精神療法と同様に、極めて非科学的—原始的民間療法師等に濫用せられ、爲に意外の不幸を病者に與ふる虞がありますから、之に就いても聊か卑見を述べて置かねばなりません。

(大正九年十月補遺)

【自然的療法】 元來自然療法と云ふ語は、彼の學理萬能主義の醫學者等が教室で製出した血清やワクチンその他種々の人工的製劑が、實地療病上餘りに無價値で、殊に其の副作用の多いのに失望した臨牀經驗家等が、専らその經驗に立脚して、斯かる學理萬能主義の人爲的製劑以前の自然物、即ち光線や空氣温泉冷水等を應用して治療の效を擧げようとする、云はば藥物療法に對する自然療法といふやうな意味で、多く用ひられて居りました。……それで勢ひ彼のユストのやうに、只管裸體跣足や果食生食を理想とする原始的生活を強請し、極端に醫藥を排斥してたゞ盲目的に什麼病でも日光浴や寒風浴冷水浴或は泥浴等で治さうと企てるやうな非科學的、反人文

的の素人療法にも猶且此の自然療法といふ名が用ひられて居ります。所が、余が茲に自然療法といふのは、そんな極端な原始的療法や排藥物的療法を指すのではなくして、余はモット廣い意味の自然療法を推奨したいのであります。

拙著「自然之藥石」にも略述して置きましたやうに、日光や空氣、水や土その他自然界に自然に生ずる天産物には、彼の化學者がその心血を凝いで學理責めに製出した所謂理想の新藥や滋養物よりも、ヨリ有效な自然の藥石や天與の滋味が多々あるのでありますから、慈ひ學理一點張りの藥物療法や唯物衛生に没頭して、不自然—反自然な安逸徒食式養生々活に苦しむよりは、寧ろ自然の山野に起臥して風雨に浴し寒暑と闘ひつゝ日夕自然に親しむのが、療病保健上適に有利であるに相違ないのであります。所が、前講でも述べましたやうに、已にその療病力も抗病能力も衰弱し切つて了つた病弱なる現代文明都人士から、今俄に一切の藥物を奪つて、直ちに之を山樵や漁耶の生活に移さうとするのは頗る無理な註文で、それ

藥物通信手術濫川の弊風と醫術の眞諦

には是非とも相當の準備と支度とがなければなりません。

抑々疾病とは「病的作業と個體との戦闘なり」とフォン、ライデンも申しました通り——病毒なる身敵と人體細胞軍との戦争でありまして、此の際、觀戰武官たる醫者が、たゞ己の我意を通さんが爲、肆に醫藥や注射手術等を濫用するのは、恰も他國の内政に干渉して侵略主義を取行せんとするやうな非義不仁の行爲であります。併し餘り冷靜な嚴正中立的態度で、たゞ袖手傍觀するのみでも亦決して醫師たるの任務を果す事が出来ません。

蓋し怯懦な雌犬でも若し後方にその飼主が立つて居りますと、可なり大きな他の強犬にも打勝つことのあるやうに、醫師がよく人體細胞軍の作戰計畫即ち自然療能の妙機を呑み込んで、之に適當の聲援を與へますと、恰度先刻述べた眞野氏や本講附録第九例のやうに、随分長期の病戦で疲れ果てたる細胞軍でも、よくその元氣を恢復して再び病敵に膺り、立派に凱歌を奏し得る様なこともあるのでありますから、眞に司命の職を全うせんと

するものは宜しく人體細胞軍に滿腔の同情を寄せ、之に直接間接の勢援を與へねばなりません。而してそれには豫て醫家自身に己が意志を鍛錬し、縦令醫藥の甲斐なき病者に遭遇しても、よく己が誠意の力を以て美事にその病敵を撃退し得らるゝやうに強固の信念を養ひ、以て病者に絶大の希望と満足とを與ふると共に、一方では理化學的藥物や自然の藥石を善用して或は病敵の作業を妨げ、味方の進軍に便し、或は間接に病敵の糧食を斷ち若しくは味方に食糧を送る等、此に天醫と人醫との調和、自然的自療作業と人為的醫術との協力を計るべき必要があるものであります。斯かる自然と人力との調和を圖ることは現代醫學の範圍に於ても決して不可能の業ではありません。

要するに前講でも述べましたやうに、根治藥や手術で病苦の免除されるもの、精神療法や信心で難症者が治るもの、又何等の人力を用ひずして自ら健康の恢復するもの、畢竟疾病の治癒し健康の恢復する其の根本能力なるものは、皆此の自然療能機そのものゝ實に外ならぬのであります。妄

藥物通信手術濫用の弊風と醫術の眞諦

に藥物萬能、手術萬能を過信するのは固より一種の時代の謬見であります。がさりとして只自然物應用のみを唯一の療病保健法だと考へ、極端に醫學を排して文化に遠ざからんとするものも亦自然療能の妙機を解せず、従つて之が善用の途を知らざる時代錯誤の甚だしきもので、爲に卻つて自然の理法に反する事も多々あるべし申す迄もありません。それで假令それが文朋的であらうと原始的であらうと、其の他科學的、心理的、經濟的、哲學的、宗教的、將た社會的のことたるに論なく、苟も吾人に賦與せられた自然療能の妙機を旺盛ならしむるに都合のよいこととてさへあるならば、悉く採つて我が藥籠中に收め、以て之を廣く自他に善用して互の心身健康を増進しようといふ、言はゞ「自然療能機促進法」とも名付くべき廣い意味の「選自然療法」を講ずるのが即ち此の活養法の目的なのでありますから、愈々次講より「抵抗力養成策」として此の選自然療法の細目に移り、具體的にその方法を述べる積であります。此には先づ此の自然療能作用を旺盛ならしむべき心的工夫の一端を述べ以て本講を了る事と致します。

(大正九年十月補遺)

【五】療病能力促進に關する心的工夫

元來お互の體內には、既述の如き立派な療病的妙機が充滿して居るのでありますから、幸に此の妙機が完全に作用しきへしますれば、ヤレオツオーンド、ラチウムだ、ヤレ蛋白だ、脂肪だ、ヨーゲルトだ、それ新藥だの新法だのと、然う大騒をしなくても、又余如きが今更「選自然療法」だの「活動養生法」だのと言ひ雑さなくても、我々人間は自らモット健康でモット長壽を保ち得らるべき筈なのであります。然るに、愁ひ知識の進み物質的生活の向上した所謂文明國民は、その最も誇とする文明的體裁生活の爲、折角自然が吾人に賦與した此の妙機を失ひ、殆ど取返しつかないやうな哀れな状態になりました。そこで、世界の醫學者等はその原因を精査して所謂衛生思想や衛生的施設の普及を奨励したり、其の他百方之が復舊策に其の心血を注ぎましたが、然もその所謂衛生的生活の向上には必ず經濟的生活の向上が先立ちますので、此に經濟生活と衛生生活と道德生活との矛盾が起

療病能力促進に關する心的工夫

り、結局其の經濟的生活の進歩と反比例にお互の心身が惡變退化して行くやうな不幸を免れないこととなつたのでありますから、此の自然療能機の衰退を防止し且之を旺盛ならしむるには、是非とも我々は今少しく自然に則つた遵天然的生活に立歸るべき必要があるのであります。

何故物の文明の進歩や物質生活の向上と逆比例に吾等の自治機能が減退したか、又如何にせば之を恢復し得られるか……といふことに就いての具體的説明は最早時間がありませぬから之を次講に譲りますが、兎に角從來の所謂文明國民といふものは唯物主義の避苦享樂的利己心から彼の生存競争を唯一のモットーとして、たゞ體裁本位の緊張生活ばかりを能事と致しました爲、身にも心にも殆ど寸分の餘裕がなくなつたといふことは今更此に喋々する迄もありませぬ……それで、いかに電話や電信、電車や自動車飛行機など、所謂文明の利器が發明されましたも、それが爲に受くる心の満足よりも、卻つて不平や不満の増す度が甚だしく、何時も不安や恐怖に襲はれづめで、折角天が吾等に興へた夜の安息時間すらも碌々安眠し得

文明の眞目的

ないといふやうな悲惨な結果を齎し、勢ひ心身の調和は破壊せられるやうになつたのであります……御承知の通り

文明の眞目的は、(一)自然の征服と、其の利用 (二)生活状態の進歩 (三)社會組織の整頓 (四)理性及び道德的意識の發達 (五)個人的生活の完成等であつて、殊に最後の二つがその主眼なのであります。が、然も從來餘りに物質文明ばかりが急速度で發達して、肝腎の精神文明が少しも進まなかつた爲、人生に至の要求たる幸福といふものが次第に陰薄くなり、殊に此の自然療能作用の營爲上、最も大切な安心や満足が殆ど得られぬやうになりました……

文明的利器と不幸

例へば汽車や電車といふ所謂文明の利器も、之を皮相に觀れば誠に有難い便利なもので、若し之が昔の日本であれば僅か大阪から東京迄行くのにも水盞まで交して東海道を一个月がかりでトボク歩いて行かねばならぬ、最大急行の早打でさへ十日もかゝつたものが、今では僅々十二時間足らずで寢た間に安々と中央停車場に運ばれます。否、近々飛行機が完備し

療病能力促進に関する心的工夫

忙はしい翌月

ましたなら恐らく半日で往復も出来ようかといふ勢で——たゞ便利といふ
 一點からいへば實に結構此の上もないやうであります。さて、文明人と
 いふものは其の結構な文明的利器を濫用して何事にもたゞ早く——とその
 結果を焦り、只管時間を短縮しようとした餘弊として、その人生が頗る殺
 風景になり、不知不識各自に好んで墓場へ急いで行くやうな憾があります。
 又同じ月を見るにも、昔の人は、「立待ち」の「寝待ち」のと、月の出る迄
 幾晩でも待つて居るといふ暢氣千萬なものであつたやうであります。反
 之現代文明都人士の觀月なるものは實に忙はしいもので、ツイ夕飯過ぎか
 ら觀月電車で就寢時迄に明石や三笠の山の月を見て歸れるといふのは頗る
 便利なやうであつても、怎うかすると鮮詰の電車内で人の頭ばかりを眺め
 て、何時何處に何んな月が出たのかさへも解らないで歸つて了はねばなり
 ませぬ……

目の眩む花見

花を見るのも亦同様で、自動車さへ飛ばせば上野——飛鳥山——荒川——小金
 井と、満都の花が僅か半日で觀られるのは至極結構だが、さて何處の花が

咲いて居たのが散つて居たのかさへも判然せず、たゞ半日を自動車にゆら
 れて、心臓を躍らせ、澤山の金を浪費して、己が心身を疲らせ途上の行人
 を困らせ、結局得る所は殆どゼロであるばかりか、少し當が外れると直に
 「俺が折角月を見ようと窓から首を出したのに雲が邪魔して見えなかつた」
 とか、「漸う——雲が取れたら隣の奴が糞を吹かしたから煙くて見られな
 かつた」とか、或は「乞丐が自動車の進行を妨げたから不愉快で花も何もなく
 なつて了つた」とか、兎角不信心ばかりが涌いて来て、折角便利な文明の
 利器でも卻々莞爾が買へないのが普通であります。是ではメチニコッフ
 が如何に立派な科學的長壽論を唱へて見ても、所詮長壽の得られぬのは當
 然で、メ氏自身ですら猶且豫期の如き長命も出来ずに死んで了はねばなら
 ぬやうな結果になります。

尤も今日のやうに世界的生活難が斯う切迫して來ましては逆も風流や風
 雅位は言つて居られませぬが、然したゞ物質的生活の向上や外面的形式體
 裁の整頓ばかりに醒醒して、役にも立たぬ虚榮壽禮のため掛替のない大切

療病能力促進に關する心的工夫

な生命までも縮めて了はねばならぬといふのは餘りに馬鹿々々しい話で、實際世に此の虚榮體裁ほど自然癡能機を減弱せしむる上に有効な毒はないのであります。

所で我が同胞男女には、不幸にも此の虚名虚飾體裁心が卻々熾烈で、殊に教育が進めば進むほど、形式外面ばかりを尊重して段々その實質を忘れるやうな弊風が殖えて参ります……例へば側に什麼安い甘い飴が山のやうに轉がつて居ても、猶且奇麗に包装したミルクキャラメルかキャンデーでなければ承知しないといふ子供の心理と同様に、一寸した常着用の反物を買ふにも、地質の良否よりも一寸見てくれのよい物ばかりを好み、同じ柄でも三越とか高島屋とかいふレッテルの貼つた物でなければ喜ばない。又書物を見るにも其の内容を讀まずに立派な表装や肩書ばかりを讀み、講演會に行つても肝腎な話の趣旨を聴かずに講師の名ばかりを聞くといふ風に、萬事萬端實よりも華、内容よりも外形、實質よりも體裁を尙ふといふ惡風が日一日と盛になりますから折角の衛生も修養も殆どその效が擧り

去實就華の弊習

ませぬ。

體裁は、勿

勿論諸君には恐らく其處ことは萬々無からうと思ひますが、さて因襲の力といふものは卻々侮り難いもので、實際お互日本人は久しく外尊内卑の事大的惡風に染みましました結果、一廉理解力の發達した方でも怎うかすると獨逸の何々博士とか、英國の何々大學教授の説だとか言へば、假令それが全然間違つた謬見であつても、何だか立派な眞理でやもあるかの如く之を歡迎されますが、若し名も知れない無學な日本人の言つたことだと聞きますと、それに如何ほど多くの眞理が含まれて居ても「何だツマラナイ！其虚名も無い人間位の言つたことが……」と碌々其の眞偽も味はずに、ツイ左の耳から右の耳へ通過さして了ふといふやうな傾向を免れませぬ……別けて目下の者の言を聞くといふことは頗るむづかしいもので、殊に本席には其の學力經驗に於ても、將又社會的地位名望に於ても、自分共より遙に勝つた方が澤山御出席でありますから、ツイさういふ方々には怎うかしますと彰善位の言つたことを聞くのは何だか體裁が悪い、精常院の門を潜る

癡病能力促進に関する心的工夫

のもキマリが悪いなどいふやうな情が起らないとも限りませぬ。實は自分も久しく斯ういふツマラぬ自我感情の爲、折角足許に轉がつて居た幸福を得捨はずに、只管外國人の言つた日本で實行の出来ないことばかりを有難がり、殊に自己の體内に宿れる有難い靈藥妙機を無視して徒らに學理學說や新劑や新法といふ體裁の衣ばかりに憚れ、それがため十五年間もただ病苦と煩悶とに悩まされて居りましたが、幸ひ此の「體裁はず」といふことに氣付いたお蔭で今日の幸福を贏ち得たのでありますから、怎うか諸君も此處に掲げた

自他のため、體裁はらず、眉展し、腹をひろげて、いのもニコくといふ常歌の趣旨に従ひ、そのキマリが悪いとか體裁が悪いなどいふ氣分を一掃して、縱令余の話の方が如何に拙劣であつても、又其の内容が平凡であつても、マア各自の御愛兒に演説の稽古でもさせるといふお積でウント馬鹿になつて、寧ろその平凡さ拙劣さ加減を聞いてやらうといふ「同情」寛大の「はらを擴げて」終局まで余の話を一通り御聞き取りあらん事を

願ひます。實に此の實、展、寛大、即ち「體裁はらず」に「眉を展し」「はらをひろげて」「いのもニコく」で暮すといふことは、自然療能機促進の上に必要な、缺くべからざる最も大切な要件でありまして、世にこれに勝る滋養物も妙藥靈劑もないと信じます。

(大正七年十月九日前期講習第三講筆記)

生命と新陳代謝

生命といふことに就いては、宗教や哲學の方面からは色々その解釋の仕方もあるやうであります。醫學の方面から申せば、實に簡単な新陳代謝といふ一語に歸することが能るのであります。……新陳代謝といふことは新しいものと古いものと入換はるといふ事でありまして、お互が此の世に生存する限りは、假令宗教家が何と云はうが哲學者が恁んな理窟を捏ねようが、兎に角お互の體内で出來た不用の頽廢物たる炭酸瓦斯を絶えず呼出

療病能力促進に關する心的工夫

しては、又體外から新しい空氣を吸入して一呼吸毎に新舊瓦斯の交換をせねばなりません。又日々新しい飲食物を攝取しては古い大小便を排泄せなくては生きて居ることが出来ませぬ……

皮膚組織を見ても、古い上層の細胞は日々垢脂と共に剝がれて行き、それと同時に下層の真皮から刻々新しい細胞が増殖し、斯くて新舊細胞の交換が行はれて居るといふ風に、全身有らゆる組織には絶えず生理學的に化學的に、其の成分の新陳代謝が行はれて居るのが我々の生存機轉であります。そして此の理化學的新陳代謝が完全に行はれて居れば、其處に我々の健康があり、若し此の新陳代謝に多少でも支障が出来れば其處に病弱が起り、全然此の機能が休止せば其處に生命は絶えるのでありますから、此の新陳代謝が即ち生命だといふに何の不可はありませんまい……これは主に肉體生命のことでもあります。

精神的生命も亦同様に此の新陳代謝といふ一語で説明し得らるゝやうであります……お互は日々其の謬つた偏見や囚はれたる僻見等の古い自己を

知識思想の
新陳代謝

感情の新陳代謝

打ち捨て、刻々に新しく正しい知識を攝り入れて行く處に心的生命の擴充もあれば未來もあるのであります。若し年齒も長じ、多少世事の一面が解るやうになりますと、何時しかその思想が凝固して、事の是非善惡に拘らず兎に角新知識を厭うて……「俺の若い時分にはコレ」だつたが、今の若輩等の言ふことには縁なことがない……などと只管己が古い過去の經驗を振り舞はすのみで、全く知識思想の新陳代謝が衰へて了ひます。それで幾々世人にも疎んせられ、己が子孫にまで馬鹿にせられて、未だ肉體的生命の盡きない内から早くも社會的生命を失ひ、それがため肉體的生命までも早く亡ぶるといふやうな結果となるのであります。

そこで、男女老幼貧富健病に論なく常に知識の新陳代謝を旺にして偏見や謬想を掃除するのが人世の必須事だといふことは稍心ある人士の何れも口にせる所でありませぬ。此にそれよりも更に大切なのは感情の新陳代謝でありまして、若し彼の猜疑や嫉妬、不平、怨恨等の不快な古い感情が何時迄も胸裡に蟠つて居りますと、それがため先刻ホルモンの處で述べまし

疾病能力促進に關する心的工夫

たやうにアドレナリンや糖分が絶えず血中に涌いて来て全身の血行が不調になり、食欲の消化吸収も妨げられて安眠も能きず、頭痛や眩暈がして肉體的新陳代謝が衰へ、幾ら滋養物を食べても益々體重が減じて行くといふやうな心身共に不健康な状態に陥ります。それでお互は開かな不快な感情は一刻も早く之を拭ひ去り、而して新しい希望に充ちた快活な感情と旨く新陳代謝をして、假令貧乏でも幾ら他人に悪口を云はれても、そんな事は一切頓著せず、「いつもニコニコ」氣分で暢氣な月日を送るやうな工夫をせねば決して健康長壽は望まれませぬ。

所が所謂文明人の感情生活なるものを見ますと頗る此の目的に反して居りました。怒り皮相な唯物式利己的消極衛生知識や虚禮虚飾本位の權利思想ばかりが發達して肝腎な情操や自治自制心の涵養が足らなかつた結果、謝恩や謝罪には頗る冷淡な癖に不平や不足の料を發見する事には極めて神經過敏で、チヨット他人が腕捲したのを見ても忽ち眉に皺がより、對者の叩頭の仕様が悪くても刺が立ち……乃公が三遍もお辭儀したのに彼奴は一

神經過敏家と有難や

度より頭を下げなかつた。實に怪しからぬ「俺が可寧に手を衝いて挨拶したのに彼は揚げ面で物を言つた。彼に開きな權利はない筈だ……」など、下らぬことにも權利問題を持ち出すといふ風に、實際對者が何の他意もなく全然無意識的に行つた一瑣事にも一々癩癩を立て、然もその不快な感情を三日も四日も、或は二年も三年も大切に胸底深く秘藏して年中眉を寄せづめにして居るやうな人さへあります。

加之、斯ういふ神經過敏家は所謂衛生豫防思想のため隣家で肺病患者が咳嗽をしても胸を痛め、隣室の扉聲にも安眠妨害の小言を並べ、その他煙を見ても、天氣が曇つても、風が吹いても、一々肺が胃されはしまいか………腦に悪くはなからうか………と森羅萬象悉く不安恐怖の材料ばかりに満たされて少しも心の安まる暇がありません。殊に神經衰弱やヒステリー其の他の慢性疾患で、醫者から安静休養を嚴命せられた病人等は實に氣の毒千萬なもので、幾ら養生をしても良くならなため人の面を見る度に己が身の小言ばかりを並べ立てねばならぬやうになつて参ります……尤も誰でも

初めの内は病人の事だからと同情して什麼無理を言はれても程よく聞き流して居りますが、年柄年中小言や不平ばかりを並べられては如何に同情厚き親子兄弟でも遂には堪へ切れなくなつて「何んば病人でも、アー何もせずにはジツトして居つては食も進まず身體も弱るのは當然だ……少しは何なりとも仕たら氣分も紛れて善からうに……」などと、ポツポツ壁訴訟をするやうになります……すると病人の方では「何も自分から好き好んで無精をして居るのではない」「醫者が悪いといふから仕方なしにブラ／＼して居るのだ」「それに側から無情なことをいふから、餘計に氣分も不快になつて病が治らぬやうになるのだ」といつた風に、親子夫婦の間にも互に小言の並べ合ひを始め、一家は不平の共進會場と化し、家族を擧げて半病人半狂者になるやうな例も御々澤山あります。

此の點になりますと、古の所謂有難屋連などの精神生活は如何にも暢びりしたもので「雨が降つても有難う」「頭をはられても有難う」「二階から轉げ落ちても有難う」と、怎んな苦しい厭なことに遭遇しても不平や不満の

情を以て之を迎へず、たゞその感謝すべき方面のみを觀て暢氣に暮して居りました。それで今日の所謂衛生家のやうに分外な避暑避寒にも行かねば滋養物も食へず、たゞ勿體ない一點張り、粗衣粗食粗住に甘んじ、己が本務に勤精しつゝ、それでも立派に健康と幸福とを贏ち得て天壽を完うした男女が御々澤山で、此等有難や連の心境は所詮哲學でも美術でも音楽でも容易に得られないやうであります。

尤も斯かる譚式安分主義の修養ばかりでは、世に進歩もなければ向上もなく、徒らに醉生夢死するのみで人生の意義がありません。如何に此の世が醜惡であつても、飽く迄も現世を肯定して生む力を認め、ヨリ善き、ヨリ美しき、ヨリ強き、ヨリ幸福なる人生を實現せんことは人類必至の要求でありますから、我々は徒らに靈にのみ憧れて妄に現世を呪詛したり、或は實生活を否定するやうな、古い宗教的修養や、或は皮相な無抵抗主義などを謳歌することは能きませぬ。

それで若しも我々人間が不平や反感——反情——猜疑——憤怒等の劣情を燃し

たゞめ對者の健康が破壊され、その壽命を短縮するやうな結果でも生ずるものならば、或は其の惡むべき非道な敵手を斃すために大に憤怒し、猜疑し、怨嗟するものも亦必ずしも無用の業とは云へませぬ……殊に彼のバルチザンや排日鬼などを呪ひ殺すことが能きれば、嘗に我が帝國のためばかりでなく世界人類のため非常に幸福なことだと思ふのであります。が、併し肝腎目ざす當の敵手は一切我には不關心で平氣で居るのに、我計り内所で獨り勝手に憎んだり怨んだり嫉んだりして癩癧を立て、我と我が身に異常のアドレナリンや糖分を血中に漲らせ、自ら好んで己が健康を破却せねばならぬといふのは、怎う考へて見ても餘りに馬鹿々々しい話であります。これでは幾ら滋養物を攝つても郊外生活に没頭しても身體の肥える道理はありませんから、お互は何とかして開んな下らぬ私憤や癩癧、恐怖や嫉妬等の不快な自我感情に左右されないうやう、能ふ限り他人の言行を善意に解し、有らゆる事象を樂觀して精々感謝すべき喜悅すべき材料のみを見出すやうに心掛けたいものだと思ひます。

癩癧の療法

大體癩癧といふものは兎角粗笨な自我感情の強い人ほど立ち易いものでチヨットしても癩癧を立てゝはブツ／＼怒りたがる人に限つて、眞に怒らねばならぬ場合——例へば人道のため國家の爲に公憤を發するとか、或は正當に己が權利を主張すべき場合など——には案外オトナシイものであります。癩癧や不平の起り易いのは畢竟意志薄弱の結果に外ならぬのでありますから、之が根本解決策としては何れ後講「練膽法」の條で大に其の意志を鍛鍊すべき具體的實行法を講ずる筈であります。兎に角人間の感情といふものは頗る微妙なもので、假令意志薄弱な自我感情の強い人であっても、少しの己が主觀の置き處、物のきめやう次第で、當然立つべき癩癧も立たずに済んで了ふ場合が幾らもあるものであります……

例へば自分が叮嚀に辭儀をすれば對者も必ず叮嚀に辭儀を返すべきものゝ當方で三度首を下げれば對者も必ず三度頭を下ぐべき筈だと、きめて置くから若し對者の頭の下げ方が少かつたり辭儀の仕様が粗略であつたやうな際には、怎うも怪しからんといふやうな氣も起るのであります。併し

叩頭の一つや二つ位は施して遣るといふ積で居れば何んでもないところで、
 對者の返禮の良否位を氣にして青筋を立てたり眉を吊り上げる用事はあり
 ませぬ……年賀状や暑中見舞なども亦同様で、眞に對者に敬意を表する考
 なら、答禮など貰はぬ積りで出して置けば假令返禮が来なくても決して病
 瘡は立ちません。若し答禮が来ぬからとて癪に障るやうな體裁的辭令交換
 なら、初から出さずに置けば敢て腹を立てる必要もない譯であります。
 金品の施與などは有福な人でなくては思ふやうにも能き兼ねますが、叩
 頭や賀狀の施與位なら誰でも能きること、然も其の些かな叩頭や施與位
 で、假令對者が返禮しなくても、それがため自分の心持がよく血行が順調
 になつて健康が保全せられるといふ風に、自然が立派に代償して呉れます
 から實に有難いことで、世にこれほど安價な慈善はないやうであります。

(大正九年五月前期講習速記)

病の恩恵

斯う云ふ風に少し心の持方を換へて行きますと、從來思むべき厭ふべき
 こととのみ思惟した人事にも案外の面白味や興味が涌き、又絶對に恐るべ
 き呪ふ可きものとのみ考へられた事象をも、卻つて感謝の念を以て迎へ得
 らるゝやうになつて参ります……例へば普通世人の恐るゝ熱や嘔吐、下痢
 の如きも之がために體力の減殺さるゝと云ふ方面ばかりを見れば、如何に
 も恐るべき思むべき現象たるに相違ありませんが、然も其の同じ熱も、嘔
 吐も下痢も、悉く是れ己が體内の有害物を驅除し健康を恢復せしめんとす
 る一種の療病的現象であつて、必ずしも戦慄すべき現象のみではないので
 あります。

又彼の單純な胃腸病者に來る舌苔の如きも、それがため刺戟性飲食物は
 勿論、熱い物も冷いものも、悉く舌に浸んで咽喉に通らないといふ其の飲
 食困難の方面ばかりを見れば、如何にも厭ふべき呪ふべき病的症候たるに

療病能力促進に關する心的工夫

相違はありませぬが、猶よく自然の眞意を観察して見ますと、之も亦胃腸復舊の一方便であつて、必ずしも吾等が生命を奪ふがための魔の手ではないといふことが明瞭であります……元來暴飲や過食で胃腸の損じた際には、一兩日間寧ろ絶食して静に其の恢復を待つのが最良の策なのであります。根が食食癖の人間は幾ら胃に食物が停滞して居つても「假令一食でも破しては衰弱するであらう」などと勝手な理窟をつけて、ヤレリッパだ肉汁だアイスクリームだのと手をかへ品をかへ、巧に味乳頭を欺いては無理から何かを抛り込まうとする悪習があります……これは丁度道普請の最中に馬の往來で路面を混ぜ返へすやうなものでありまして、それが幸に些細な破損であれば其れでも怎うにか修繕の出来ないこともありませぬが、稍大きな道普請のためには勢ひ往來止の必要もあるやうに、自然が舌に苔を作つて一切飲食物通行止の制札を立てたものだと思へて見ますと、舌のザラ／＼したのも飲食の浸みるのも、寧ろ感謝すべき自然の恩恵であつて、更に怒むべき筋合のものではないといふことになつて参ります。

又彼の代償月経として屢々婦人に来る吐血の如きも、其の意義を知らないお素人方は、如何なる大病の徴候かと吃驚さるゝことも少くありません。が、是は月経不調のために將に來らんとする異常現象を防止すべく、自然が吐血を以てその停滞せる月花の代償をしたのであります……如何なる機轉によつてかゝる巧妙な代償作用が營まれるかといふ道行は判らなくてもこれが病的變狀ではなくして一種の生理的機轉であるといふことは已に臨牀上疑ふ可からざる事實となつて居るのであります。

之を要するにピール氏が「病的現象なるものも亦畢竟たい異常なる條件に基づく一つの生理的現象にして、疾病の症候なるものは唯生理的機能に過ぎず」といつたやうに、眞に疾病治癒の機轉に徹底するならば、世上多くの病者が恐るゝ熱も下痢も嘔吐も、皆これ病毒を驅除し、健康を恢復せしめんとする一種の療病的現象であつて、必ずしも忌むべき現象ではない、否、寧ろ大に感謝せねばならないことも澤山あるのであります。尤も「受人之恩雖深不報、怨則淺亦報之」と洪自誠も申しましたやうに、

療病能力促進に關する心的工夫

兎角怨恨は忘れ難くて恩義の忘れ易いのは古も今も變らぬが人情の通弊でありまして、殊に近時の如く只權利要求思想のみが謳歌されんとするやうな世界では、如何ほど報恩主義や奉仕主義を力説しましても、常に黙々として何物をも請求しない自然の恩恵などに感謝するといふ氣には容易になれませぬ……又自然は我々から感謝されようと怨まれようと一切無頓著でありますから、強ひて感謝などをせなくてもよいやうであります。併し折角自然が我等の病苦芟除のために與へて呉れた靈能を仇敵視して居りますと、如何ほど自然が寛大で更に愛憎の差別をつけないからといつても、其の自然が無私公平であればあるだけ、我々は自然淘汰の制裁を受けねばなりません。即ち病者自身の主観で作つた不平怨恨煩悶等のため自ら好んで己が心身の異状を招き、その自ら招いた異常を憎悪しては更に心身の苦痛を増すといふ風に、たゞ悲觀や苦痛の度が増すのみで、何時まで経つても樂觀や心身の生活が出来ないのであります。

所が、今申しましたやうに世人の戰慄する病症をも一々樂觀して只管自

然の恩恵を感謝し、飽く迄も己が細胞の靈能に信頼して居りますと——
 「恩を返すことを知るものは一層恩を受く」といふ西諺の通り——自ら血行は順調に新陳代謝も活潑になり、食志も振へば安眠も能きて心身爽快を覺えますから、従つて自然療能機も旺盛になる。その結果は「心身の革命」にある眞野氏のやうな奇蹟以上の奇蹟的效驗を得たり、又附録第九例のやうな九死に一生を贏ち得ることもあるのであります。

余も精常自得迄は、何故斯麼虛弱の身に産みつけて呉れたのかと、罪もない両親を咎めたり、或は天を怨んだりして不平ばかりを並べて居りましたが、一度「Nicht Kunst, sondern Natur」(技術にあらすして自然なり)なる語の眞意を解し「Vis medicatrix Naturae」「自然療能」の妙諦を味ふやうになつた御庇で、所謂「四恩」の妙味も解せられ寧ろ不遇と病弱とに責め磨かれた己が身の逆境そのものに感謝し得るやうになりました——實際余が今日の健康と幸福とは悉く自分の病弱と逆境との賚であります。若し余が生來健康で、多少の遺産でも父母から譲られし身であつたならば、余は今猶物質萬能に

療病能力促進に関する心的工夫

囚はれた賣藥本位の開業醫として無意義な旦暮を送つてゐたに相違ありません。之は決して負惜や銜氣で申すのではありません。如何程自惚れて見ましても生來臆病な殊に淺學短才で狷介偏狹な余が、堂々たる天下の諸學者の面前で、斯く忌憚なく卑見を述べ得るやうになれようなどとは、曾て夢想だも及ばぬ所でありましたが、所詮現代の醫藥で救はれない數々の病苦に責め抜かれ、己むを得ず科學萬能—醫學過信の迷夢を醒したお庇で、曾に己が身の健康を恢復し得たばかりか、幸に卑見に耳を傾け次講説く所の『抗病力養成法』や『鍊膽法』の實行に力められし會員諸氏は、皆自分以上の健康と幸福とを贏ち得られました。而して此の生きた事實が最良の雄辯となつて、斯く畏れず臆せず何人の前にも卑見を開陳し得るやうになつたのであります……今や世は依然として物質萬能、博士崇拜熱の旺盛期なるにも拘らず、錚々たる天下の學者、大家諸氏が漸次此の無位無冠無學無力な自分に意見を需められ、或は未見の醫師諸君から其の近親や病者を託さるゝやうな光榮に浴することの能きましたのも、一に自分の病苦と違

境との實に外ならぬのでありますから、余は怎うしても自分の逆境と、病苦とに感謝せずには居られません。

それで諸君の中には或は余以上の病苦や逆境に苦まるゝ方もありませうが、その心身的痛苦が大なれば大なるほど將來贏ち得らるゝ幸福も亦、大きい道理でありますから、怎うか其の苦痛の大小に拘らず兎に角悲觀や煩悶の眉を展して形式體裁の衣を脱ぎすて、寛容寛大のはらをひろげて、吾人の身邊に圍繞せる有らゆる萬象を樂觀されんことを祈ります。

(大正九年五月十二日前期講習第三講速記)

却説、前講述へました「古今東西諸學者の疾病觀と療病觀」に依り、幸に彼の古來民間に流布せられた牽強附會な迷信的療病觀や神祕的療病觀の迷夢を醒し、或は近世流行の唯物的機械本位の病理觀に因はれたる理化學的療法萬能の謬見を脱せられたる諸君は、更に本講説く所の「疾病治療能力の本態」に因り、現代醫界に於て其の最も誇とせる最新の特効薬よりも、猶ヨリ以上の自衛—自治的靈能ある種々様々の靈藥や妙機が、無限に我等の身體内に賦與せられてあるといふことを知り、必ず何等か己が身の力強さを感じ、「生の力」を信じられたことであらうと思ひます。所で、此の自然療能を十分に作用せしむるには如何にすればよいか……？それには或は適當の理化學的醫藥を用ふる必用もありませう。又精神の動搖を防ぐ爲には宗教的修法や、其他種々なる法術の補佐を藉るも敢て不可はないのであります。併し藥物や機械—法術等の他力よりも更に大切なものは病者自身に「如何なる病苦にも決して負けない」「是非とも病毒を征服し必ず健康を恢復せねば措かぬ」といふ勇氣を振作することであり、如何に千軍萬馬を叱

若し病苦や世帯の辛さに其の元氣を落して寧ろ死の安きを願ふとか、或は現世を厭うて來世を希求するとか云ふやうな怯氣がありましたは、折角の自然療能も更にその妙機を發揮せなればかりか、寧ろ生活機轉を制止する方に働くやうになりますから、さうなると神仙の妙薬でも佛陀の法力でも之を奈何ともすることができません。されば、如何に耐へ難き病苦其の他の困厄が身に迫つて居ても、飽く迄もこれを樂觀して自然療能の妙機に信頼し、泰然自若少しも其の心を亂さないやう強固な信念を持つるといふことが、心身健康恢復上最も缺くべからざる要件なのであります。が、さて開んな強固な抗病的信念は怎うしたら獲られませう……？

古武士は「船頭の勇氣は馬上に役立たず」といつて町人の怯懦を嘲りました。成程楫櫓を取つては如何なる怒濤にも屈せぬ老船夫も、砲煙彈雨の中では恐らく物の役に立ちますまい。併し余は現代では之を「戦場の勇氣は病牀に役立たず」と言ひ改むる必要を認むるもので、如何に千軍萬馬を叱

療病能力促進に關する心的工夫

精常活養第三篇講讀所感錄其(一)

果結の其び及針方養主の前以讀繙書本			住所	大正 年 月 日	氏名	職業	年齢	才
上世處	上養修	上生養						

注意(前卷末附記の要旨を御熟讀の上、是非此の所感錄それ／＼の欄内へ然るべく御所感を記入して御送り下さい。

吃した猛將勇卒でも、一度病魔に襲はれた際には案外意氣地のないのが普通であります。況して避苦享樂を中心とした文明的利器のみに信頼し、多年滋養や醫藥ばかりを唯一の力とした彼の安全第一式養生々活に親んだ心身共に虚弱な男女等が、たゞ一時の附け元氣や負惜の瘦我慢位では迎も有る病苦に耐へ得るものではありません。之には是非とも其麼虚弱な所謂文明式男女でも、自らよくその心身的抗病力の増進せられるやうな何か善い方法がなければなりません。

そこで余は次講より、已にその心身的抗病力の減弱せる男女にも、よく其の抵抗力を復活せしめ、且強者は益々其の健康度を増進し得らるゝやうな具體的「抗病力養成策」を述べ、次いで有らゆる病苦を征服し、一切の心苦を退治し得べき「信念獲得策」に歩を進めようと思ひます。

(二の其)録感所讀經講三第篇養活常精

てい 就に 來將に 並 在 現			想 感 の 後 讀 經 書 本			
雜 其 感 他	望 願 の 在 現 己 自 望 希 の 來 將 に 並			上 世 處	上 養 修	上 生 養
	上 世 處	上 神 精	上 體 身			

注意 本誌は嚴に他見を禁じ、假令本人の父子配遇者たりとも斷じて漏らす事なきにより、如何なる秘密事項たりとも、成るべく具體的に漏れなく記載されたい。用字は假名にても文體にても如何様でも差支ありません。

(二の其)録感所讀繙講三第篇養活常精

てい 就に 來將に 並 在 現			想 感 の 後 讀 繙 書 本			
雜 其 感 他	望 願 の 在 現 已 自 望 希 の 來 將 に 並			上 世 處	上 養 修	上 生 養
	上 世 處	上 神 精	上 體 身			

注意

本誌に既に他見を禁じ、假令本人の父子配酒者たりとも斷じて漏らす事なきにより、如何なる秘密事項たりとも、成るべく具體的に漏れなく記載されたい。用字は假名にても文體にても如何様でも差支ありませぬ。

精常院著作部編纂

活修養即活養生治驗實例

精常活養篇附録

〔第八例〕

(精養院病誌第三二九六號)

手術にあらずんば死！と宣言されし

腹膜炎の活養生治験例

大阪市東區〇〇〇〇町

中學四年生

「ま」「い」君

十七歳

養病歴

〔既往症〕 生來胃腸は弱い方で大正八年三月「盲腸炎」を思つたが、其の他には著患なく、同胞六名何れも壯健で、遺傳的疾患は認め得られない。

〔現病症〕 大正八年九月二十一日奈良へ修學旅行を試みた翌日、急に劇烈な腹痛を覺えて下痢を催し三十九度近い熱が出た。早速附近の〇〇軍醫に診て貰つた所が「腹膜炎」の疑があるといふ診断で、色々手當をして居る間に下腹部は次第に膨滿して來て病勢益々險惡になる一方であつた。已むを得ず九月三十日の晩、〇〇赤十字社病院に入院したが翌十月一日内科醫長M博士廻診の際遂に不治の宣告を下され二回迄救急的注射を受けて漸く一時を彌縫した。

手術にあらずんば死！と宣言されし腹膜炎の活養生治験例

愛讀者諸氏に告ぐ

本活養篇は本講を以て其の上巻を完結し、從來世の上下に瀰蔓せし弊事・衛生さては修養・修法等に關する迷信・僻見乃至謬想を根柢より打破し、此に保健養病上最も有力なる自然療能の妙機を讀者に提供した。

中巻 掲ぐる所は専ら抗病力養成策として本院長の講せられたる生活改造の好羅針盤である。即ち其の

第四講には、所謂文明都人士等が目下行き悩みつゝある都市生活と衛生々活との矛盾を解き、病弱者の轉地養生と自宅養生との利害得失を詳論し、職業的衣住と保健的衣住との調和策を提唱し、

第五講第六講には肉食説、菜食説、飽食論、小食論、斷食説等諸種の食養法に對する是非優劣を細論し、富者も貧者も健者も病者も、其の心身健康増進上須臾も缺く可からざる醫學的・經濟的・道德的・趣味的・保健食糧・擇法の原理を説き、殊に慢性胃腸・肺・心臓・腎臓・腦神経病・糖尿病等、諸慢性病者も各本然の要求を満しつゝ、克く健康恢復の幸福を贏

ち得べき食養上の安心策を舉示せんとするのである。又

下巻(第十講以下)には治病能力促進・膽力養成・判斷力増進法として、特に別所院長の創意された鍊磨常息法の要訣を網羅すべき豫定である。鍊磨常息法は實に本活養法の眼目であつて、讀者幸に之を體讀せば管に健腦、強肺・健胃固腸等の美果を收め得るのみならず、更に人事百般に對する實行力と判斷力を増進し得べきは、多數精常會員諸氏の夙に體験せられし所である。

猶下巻には儒夫も忽ち起り得べき備念獲得に關する院長講話の精神をも收載すべき筈で、實に轉禍爲福の寶劍、病苦退治の降魔劍たるを確信するのであるが、併し濫りに兒童に利刃を與ふるは、却つて自らを傷ぶ虞があるから特に下巻に限り之を非賣品となし、上中巻詳讀の上何等かの自覺を得られし人のみに之を頒讀する事とした。故に下巻の閱讀を希望する方は、是非とも再三上中兩巻御心讀の上、その御感想を各卷末添附の所感録に記入し、精常院教養部へ宛て秘送せられたい。

精常院著作部

〔第八例〕

手術にあらずんば死！と宣言されし

腹膜炎の活養生治験例

大阪市東區〇〇〇〇町

中學四年生「ま」「い」君

十七歳

養病歴

生來胃腸は弱い方で大正八年三月「盲腸炎」を患うたが、其の他には苦患なく、同胞六名何れも壯健で、遺傳的疾患は認め得られない。

現病歴 大正八年九月二十一日奈良へ修學旅行を試みた翌日、急に劇烈な腹痛を覺えて下痢を催し三十九度近い熱が出た。早速附近の〇〇軍醫に診て貰つた所が「腹膜炎」の疑があるといふ診斷で、色々手當をして居る間に下腹部は次第に膨滿して來て病勢益々險惡になる一方であつた。已むを得ず九月三十日の晩、〇〇赤十字社病院に入院したが翌十月一日内科醫長M博士廻診の際遂に不治の宣告を下され二回迄救急的注射を受けて漸く一時を彌縫した。

手術にあらずんば死！と宣言されし腹膜炎の活養生治験例

而して其の後十日餘り牛乳は勿論、薬一服も收らず、日夜病苦のため一睡も出来ず、身體は益々衰弱の度を加ふるばかりであつたが、十月十二日頃から稍下熱輕快の兆が見え、お粥も牛乳も收る様になり睡眠も出来だしたから附添の家族や看護婦等も些か愁眉を開き、前途に一縷の光明を認むるやうになつた。

所がM博士は此の模様を見て「此の病人は少し位持ち直しても駄目！……結局手術を受けなければ到底助かる見込はないのだから此の際は非外科の方で手術を受けて見よ、然らば或は萬に一つ命を取り留め得るかも知れぬ」と宣言された。青天に霹靂の如き此の案外なる言葉に患者の驚愕は無論の事、長の年月、己が慈愛の手で育て來つた母親の失望落膽は非常なもので側の見る目も耐へ難い程であつた。

其處で患者の父は、果して手術に耐へ得べきや否やを氣遣ひ、之をM博士に確めたが「其れは保證が出来ぬ」といふ極めて心細い返事であつた……實際斯う衰弱しきつた體では素人考へでも逆も開腹術といふやうな開な大手術に堪へられさうには思はれない……といつて手術をせねば結局死の一途あるのみだと聞いては此の儘でも濟まされず……と理智と愛著との矛盾撞著に一同た々青息吐息をつくばかりで、これといふ決心を定め兼ね、

初診時の現症

とつ追ひつ迷ひ苦しむのみであつた。所が患者の實姉は先年來精常の修法により非常の好果を收め得た経験により、最早此の上は精常院長にお頼り申して適當なる御指圖を受けるより外に道はなからうとの發議で、遂に別所院長の診諭を乞ふこととなつたのは十月八日であつた。

體格中等榮養不良の一男子、皮下脂肪に乏しく筋肉瘦削、皮膚乾燥し顔面蒼白色を呈す。脈搏九十至、軟にして小。心音異常を認めざるも右肺上葉一般に呼吸音粗雜にして呼吸延長す。下腹部膨滿して所々壓痛あり、殊に左盲腸部に硬結部を觸知す。體温三十七度五分。食思稍佳良。便通亦正常。別所院長は以上の所見によりて

主 症 「慢性腹膜炎」

副 症 「盲腸周囲炎」兼「肺炎」加「腎臓」

の診断を下し……さて、現代唯物醫學の範圍にては、勿論此の病氣を根治し得べき薬は絶無で、たゞ「開腹手術により萬一を僥倖するの一途あるのみ」だとは有らゆる専門醫家の一致する所であらうが併し自然科學と精神科學との一致したる修養即養生の常法に従へば、

手術にあらずんば死！と宣言されし腹膜炎の活養生治験例

敢て开んな冒險的手術を試みる必要はない。殊に今此の病人に手術を施せば十中八九迄、生命は覺束ないから断じて手術をする勿！同じ死ぬなら家へ歸つて死ぬ……との宣言を下したので本人は勿論、両親とも初めて安堵の思に蘇り、遂に手術を見合せて十月十三日、僅か二分の薬瓶を携へて歸宅することになった。

【退院後の経過】 を敘するに當り茲に一言附け加へて置かねばならぬ一事がある。それは同家族の人々が豫て洵宮の修行に熱心で、父君は永年其の道の世話方をして居た事であつて、それが炯眼なる我が精常院長によりて巧に善用され、豫想外の好結果を奏する上に少からざる便宜を興へたのである。

即ち院長は其の後二三回往診の都度『自然の恩恵』につきて懇々説示し「病が治つてニコニコになるのは固より其の所であるが、縦令病があつても心に希望と光明とが涌けばニコニコになる」と巧に洵宮の妙趣を捉へて之を自然科學に結び付け、修養即養生の要諦を指示された結果、本人始め家族の人々も大に治病治心上の自覺を喚起されたやうであつた。

其の後病は次第に薄皮を剥ぐ如く一日と輕快に赴き、同月十六日堤示常士の出張した際

退院後

には已に昨日から鍊膽常息を始めて居る……薬は退院後二日分服用したがりて其の後は全然廢藥して居るが然も何等の異状がない、體温も三十六度五分から三十七度五分の間を昇降し、脈搏は六十八至内外で食慾も佳良、昨今では已に病床に飽きて頻りと起きたがり、日當りのよい縁側に出ては盛に日光浴を試みて居るといふ様な好況であつた。

入科後の経過

爾來病症は順調に経過し、嘗ては「手術に非ずんば死」と宣告せられた身が、退院後僅々二十四日目の十一月六日には早くも玉造の實家から電車で精常院の實修道場に通ひ、爾來同君は熱心に活養生即活修養の道程にいそしみ得るやうになつたのである。

同君が最初實修科に來られた際には、流石重い病苦と闘つた疲労困憊の狀が未だ眉宇の間に残つて居たが、然し何處となく希望に輝いた晴々しい眸は自ら君の前途を祝福して居る様に同人の眼に映じて居た。

果せる哉！入科後の成績は從來稀に見る進歩振で、胸部や腹部の所見は如何に疑の耳目を以て綿密に診察して見ても何等の異常を認むる事が出来ない様になり、「何が面白いのか」と聞きたくなる程何時も衷心から愉快さうなニコニコと活氣が溢れて全く別人の感と與ふる様になつて來た。

手術にあらずんば死！と宣言されし腹膜炎の活養生治験例

かくて罹病前には僅か九貫目しかなかつた體重が別表の通り入科後五箇月目には十二貫七百匁に増加し、昨今も不變らずの大元氣で、専心、學の道にいそしんで居るといふことである。

【記者の所感】 自然を緯とし科學を經とし誠を根柢として織りなせる我が精常の威力により、從來難痊不治と宣告せられた不幸の病者や薄倖者が起死回生の悦に浴し得た幾多の實例を見聞し少からず驚異の感を抱いて居た同人は、今又この奇蹟的の實例に遭遇して一入精常に對する憧憬と感謝とを捧げざるを得なくなつて來た。事實は蘇張よりも雄辯である。世の所謂物質萬能一醫藥過信家は此の生きたる事實を如何に見るであらう……抑偶然の事象？將不思議の靈驗？

蓋し我が精常より之を見れば斯かる實例は敢て偶然でもなければ又不思議の現象でもなくたい自然の現象である。心を離れて體なく、體を離れて心なきは火を賭るよりも明かな事實で、物心の調和を企畫してこそ初めて眞の健康を期し得られるのである。然も現代の唯物式醫家は、たい肉體の診療のみに没頭して曾て心を醫すべき工夫を講じない。これでは有らゆる慢性病者に對して何等の權威なきは當然である。

而して若し絶対に醫藥の甲斐なき病者と見れば、たい手術や轉地等で萬一を僥倖するより他に良策なしとするのは、餘りに科學過信に因はれたる現代物質萬能家の通弊であるが、一度物質過信と神靈妄信との迷夢を醒し修養即養生の自覺を得たならば、敍上「ま」「い」君の如き治績の擧る事は何等怪しむに足らない必然的自然の現象であるといふ事を首肯せざるを得ぬであらう。

(大正九年十月 K・I 生記)

【追加】 大正十年二月二日、偶々機會を得て其の後の君が健康状態を精査したるに、依然健康は遞加的に増進し、別表記載の如く僅に一年三箇月間に驚くべし、肺活量に於て一九〇〇立方糎、體重に於て四貫二百匁の増加を見、殊に意志の具體的表現と見做し得べき握力は左右共従前の二倍を示して居る。

この異數なる健康増進の事實を識者は何と睹る？ 青春期に於ける心身發達の特に顯著なるは既に科學上何等怪しむに足らざる事實であるが、君に於ては尋常一般の青年と大に其の趣を異にし僅か一年前迄は殆ど此の世のものとは思はれなかつたのである。然るに今斯かる好成绩を贏ち得て近々高等の學に進まんと日夜勲學に餘念なきは、如何なる専門的學理を以てしても到底理解し得ざる所で、吾人はたい自然の偉力を讚美し得るのみである。

手術にあらずんば死！宣言されし腹膜炎の活養生治験例

以上の事實により吾人は此に精常の客觀的確實性を更に裏書し得たるを欣ぶと共に、幸ある君の前途を祝福せんが爲特に一言を附加したのである。
(大正一〇・二・三・K・I生)

體格検査表

調査年月日	肺活量	體重	胸圍		腹圍		握力
			常時	閉時	常時	閉時	
大正八年十一月六日	一、六〇〇	九、〇〇〇	三三、六	三二、三	三三、〇	三三、〇	二〇、三
大正八年十二月十九日	二、一〇〇	一〇、三三〇	三三、七	三三、一	三三、八	三三、六	二〇、七
大正九年三月七日	二、六〇〇	一一、三五〇	三三、二	三三、六	三三、二	三三、二	二〇、五
大正九年四月九日	三、〇〇〇	一一、七〇〇	三三、三	三三、一	三三、八	三三、四	二〇、一
大正十年二月二十日	三、五〇〇	一三、二〇〇	三三、〇	三二、五	三三、七	三三、〇	二一、八

〔第九例〕

(精常院病録第七八五號)

重症腹膜炎兼肋膜炎及び

肺病患者の奇蹟的活養生治験例

兵庫縣〇〇郡〇〇村

女 〔ウ〕〔ハ〕

二十五歳

養病歴

〔既往症〕 生來著患なく、たゞ大正四年の春、丁度妊娠の半ば頃から左側臥の際、左胸部に痛を感ずる事はあつたが幸に無事一女子を分娩して母子共に健康であつた。

〔現病症〕 然るに翌年五月中旬俄に高熱が出て胃腸の加減が悪くなつたから早速地方の醫士I S氏に治療を受けしに最初は「單純の胃腸病」だといふ診断であつたが、其の後に増し下腹部が腫脹して来て、四回目診察の際には遂に「肋膜炎」兼「慢性腹膜炎」といふ診断を下された。加之田舎では十分の手當もできないから治癒の見込がない。宜しく都會の大

重症腹膜炎兼肋膜炎及び肺病患者の奇蹟的活養生治験例

病院に行き注射療法でも受けて見よと内々夫君に警告されたから、夫君は驚き早速 I S 醫士に紹介状を貰つて遙々「乙」女を〇〇醫科大學病院に伴ひ行き、特に結核研究で名のある N S 博士の診察を乞ふたのは大正五年三月二十三日の事であつたさうな。さて

【NS博士の診察】は「肋膜炎」及び「結核性腹膜炎」兼「兩側肺結核」、豫後も頗る疑はしいといふことであつたが、兎も角も入院して、同博士創意の注射療法を受けることにした。所がそれから日々四十度内外の高熱が出て食志も頗る衰へ下痢は益々劇しく身體は衰弱する一方であつた。

併し受持の A 博士が「これ位の病が治らぬといふ法はない、俺が乾度癒してやる」と元氣よく慰めて呉れるので、病者はたゞそれを力草に辛抱して居つた。然るに或日不圖國許の I S 醫士より夫に宛てた手紙が目になり、何心なく其れを開いて見ると、意外にもその中から A 博士より醫士へ宛てた手紙が現はれ、それに「乙」女の病は到底治愈の見込がないばかりか、最早四五十日間の餘命も覺束ない云々」といふことが明瞭に認められてあつた。

【入道の動機】「乙」女の驚愕失望は云ふ迄もなく、夫も看護婦等も殆ど慰めやうがないので、豫て其の親戚の一青年から是非一度精常診察を乞ひ別所院長の「誘念」を受けよと再三

來院當時の現症

勸められたことを思ひ出し、大學病院の醫員や看護婦等の留めるのを振り切り、以上の訴を以て本院に診察を受けに來たのは大正五年四月八日であつた。

體格榮養共に不良の一女子。筋肉瘦削、皮下脂肪に乏しく、顔貌憔悴、蒼白。呼吸促進、脈搏は微細にして百〇八至を數ふ。心音には變常なきも左胸部は殆ど濁音に掩はれて呼吸音を聴取することが出来ない、右肺上葉にも亦軽度の浸潤がある。腹部はいたく緊張して處々に硬結部と壓痛とがある。體温三十九度五分、體重十貫七百四十匁、極度の疲労衰弱の狀を呈して居つた。猶本人の訴によれば某病院入院以來は毎夜不眠で下痢數行、如何に處方を改めて貰つても歇まなかつたといふことであつた。

【診察及び豫後】以上の所見によれば、NS博士が之に「兩肺結核」「肋膜炎」兼「結核性腹膜炎」の診察を下し絶對不治の宣告を與へられたのは當然であつて、斯かる難病者に對しては如何に精常でも、最早施すべき良策はない筈である。

併し縱令如何なる瀕死の重症者に對しても、嘗て絶望の感を與へず、何等か相當安心の道を與へねば已まない氣性の別所院長は、「乙」女に向ひ、諄々として自然療能の妙機を説き、如何なる大病でも修養次第で、よく之に打克ち得べき所以を説示せられた。

誘念

附添の夫や看護婦等は勿論の事、吾々同人も亦右院長の言は、恐らくたゞ患者に對する當
坐の慰め言辭に過ぎないものだと思つて居たが、

【心機一轉】 然し精神の力といふものは實に恐しいもので、「こ」女は院長の「誘念」にい
たく感動せしものと見え、即坐で病院に歸ることを斷念して其の儘附近の旅館に投宿し、其
の衰弱し切つた病軀を以て熱心に鍊磨の實修を始めた。所が、不思議にも其の夜から熱は三
十八度に下り、旅宿で出す普通の食膳に好く向ひ得るやうになつた。而して

幸ひ其の翌九日から前期「活養講習會」が始つたので、直ちに入會して懸命に毎夜出席聽
講し、晝間には堤示常士やKR青年に代るべく示導を受けて専念活養に力めて居るうち、
見る／＼元氣が恢復して、入會以來熱は一回も八度以上に昂らず、殊に發病以來絶對に固形
物を禁じ流動的滋養食のみを用ひて、有り丈の良薬を服用してみても、怎うしても歇まな
つた下痢が、一服の薬も飲まず日々宿屋の食事を拵りつゝ不思議にもスツカリ歇んで了つた。
されば「こ」女の喜は譬ふるに者なく、日々元氣を恢復して、同月二十八日西區九條第一小
學校で「精常講演會」の催された際にも、「こ」女は石町から遙々九條まで、聽講のため電車
で院長等の跡を追ひ、院長始め同人一統を驚歎せしめた。加之同月末、市岡町で始めて催

入會後の経過

轉歸

されたアト・スミス氏の飛行機曲乗の見物に出掛け、そのまゝ附添も連れずに、築港から
單身乗船して歸國して了つたのである。

兩肺結核兼肋膜炎といふ念入りの大病で、日々四十度内外の高熱に悩まされ、加之七
八日間毎日下痢のし通して極度に衰弱し切つた重症瀕死の難病者が僅々五日間の講習と數
回の鍊磨指導で、斯くも健病其の處を異にしようとは、學理上でも、常識上でも所詮信じ
得られぬ事象であるから、或は彼の燈火の將に滅せんとするに當りて一時光輝を發するが如
く、恐らく一時の糠喜に過ぎないものであらう……？と同人は竊に其の豫後を氣遣う
て居つたが、其の後「こ」女は次第に健康を恢復して日々家事や農事に勵みつゝ寧ろ罹病以前
よりも、ヨリ健康の身と化したといふ實に奇蹟以上の奇蹟じみた喜ばしき風聞が其の後再三
同人の耳に傳はつて來た。

勿論同人は屢々己が耳を疑うたのであるが、爾來同地方より「こ」女の目醒しき治績を見聞
して續々來院する病者があり、それ等の報告が何れも衆口一致して居る所から、同女が歸國
後滿三箇年を経過した大正八年四月本院より直接同女が爾後の健康状態や日々の心身の活
の實況などを問合せて見た。所が同女からの回答を見ると豫て人傳に聞き及びし所よりも其

重症腹膜炎兼肋膜炎及び肺病患者の奇蹟的活養生治験例

の結果は更に良好である。而して「こ」女の手紙には、彼の醫藥萬能の弊に囚はれ滋養療法と安靜休養とを唯一無二の養生法なりと妄信し、何の希望も光明もなき安逸徒食的保守退嬰的養生々活に戦々兢兢の旦暮を重ねつゝある世上多くの病弱なる男女等に對する養生―修養上の好教訓が含まれてあつたから多少の重複をも顧す左に其の全文を掲ぐる事とした。

炒豆に花の歡喜

拜啓 其の後は絶えて久しく御無音に打ち過ぎ候段平に御海容被下度候 時下梅雨の候に候處語先生様には益々御壯健に精常會も愈々御發展遊ばされ候由奉賀候 次に私事お陸にて無事消光致居候間他事ながら御安心下され度候 先般來毎々御芳書に接し候も折悪しく不在中にて御回答延引と相成り相濟み申さず候 此の度とて別に御參考となるべき點は無之候へども唯事實のまゝお記入致し置き候間御覽下され度候 日々多忙なる家事に追はれ朝から晩まで働き詰にて別に修養とて致し申さず、たゞ先生の御教の通り體裁なき家庭にて楽しく働き居り候 別紙の記事は餘り極端の様に相見え候へども、偽りなき事實にて入會の當時目に見えて快くな

りし事を思ひおこせば今更乍ら不思議に感ぜらるゝ位に御座候 精常會を辭し候てより滿三箇年を経いし今に、一服の薬もいはず、終日多忙な極め候ても疲勞を覺え申さず、全く健康に復し候事偏に「精常」の賜にて、平素御無沙汰は致し居り候へども諸先生の御恩は一日も忘れ申さず病氣に困り居る人に逢ふ毎に特常の話を致し居り候。先は御回答旁々此の如くに御座候 何卒御一同様に宜敷御傳言下され度候 かしこ、

大正八年六月十六日

「こ」 「い」 子

堤 先生 御許へ

二 伸

當初〇〇〇〇大學病院にて某博士の診察を受け候處、餘程の重症なりしと見え、入院してもしなくても別に大したる相違はなしとの御言葉にて、實に贈をつぶし候も折角入院の目的にて参りしもの故如何にもして醫藥の力にて癒して頂かねばならぬと存じ入院致し候。然るに注射の爲に熱高く食慾進まず、日一日と衰弱加はり困り居り候處へ親類の人より外科の醫師に頼み呉れ、或日外科醫の診察を受けしに手術をせればならぬ、然し今は衰弱も致し居り熱も高き事故、熱の下りし上、手術する方よからんと言はれて尙一層落膽致し申候 一日に何回となく四五種の薬を服し粒もなき程の粥を頂きて一寸體を動かしてさへ下痢致し衰弱は愈々加はり其上注射の中毒にて關節が痛み手足自由ならず、最早此の上は死すのみと落膽失望の極に達し、自分が死せし後の子供等の事或は家上の事、果ては自分の葬式の事なども胸に浮べて終日泣き暮し居る折柄親類の人の話を聞き精常院の御

炒豆に花の歡喜

尾介に相成候次第に御座候

退院の時主治醫は其の體を動かしてはもう駄目であると言はれしが、無理に出て参り車にて精常院に参り人に助けられて二階へ上りたる程にて候

別所先生の御診察をうけし時、先生より「きつと治る……あなたのお氣の持ちやうにてきつと治る」と言はれし時の嬉しき地獄で佛に逢ひしとやらの言葉も斯かる嬉しきを言ひしならんと思ひ申候。私こそは全く九死に一生を救はれし次第にて此の大恩はいつく迄も忘れ申さず候

尙御申越の寫眞は今手許に御座なく候間其の内に撮影致し御送附致すべく候

【編者所感】

曾て生命人造の可能説さへ許容されんとした日進月歩の醫學も、あはれ結核に對しては未だ一の積極的根治法を發見し得ず、腹膜炎・肋膜炎の如き、たゞ對症療法のみを以て自然的治癒の俾を期し得べき病症すら、然も其の再發防止の爲には、たゞ轉地・滋養・安靜休養以外に何等見るべき積極的妙案なく、醫者も病者もたゞ「困るナ」の嘆聲を發するより他に方途のない現代の治療界に於て、本病者の如き破格の實例を示すは、一般醫家諸賢に對し聊かお氣の毒な様な感もあるが、併し以上の記事には一點の誇張もなければ潤飾

もなく、事實有りの儘なる記載であつて、如何に同人が此の記事を抹殺せんとしても、現在「こ」女が此の世に元氣に快活に幸福の生活を送りつゝある限りは到底此の世界から以上の事實を抹殺する事は能きぬ。

嗚呼！肺結核・肋膜炎・腹膜炎！

此等の諸症は夫れ果して不治の難症か………？

勿論之を現代唯物醫學のみの見地よりいへば、何れも可なり難治の或は不治の疾患であつて、其の一症のみでも確に天下の名醫を惱殺するに足るべき資格があるのであるが、然も斯かる難症を俱發した此の重症者が、僅か一回の診論誘念と一期の講習と數回の鍊膽示導位で譯もなく解決されたのは抑々如何なる理法に由るものであらうか。

蓋し「こ」女の難病治癒は全く活養講習第三講「疾病治癒能力の本態」中に詳論せる「自然療能の妙機」に外ならぬといふことは、此に更めて嘖々する迄もない事であつて、縱令絶對醫藥に見放された難病でも、幸に自然が賦與した治病能力さへ復活せしむれば斯く立派に其の一命を取り留め得るのである。

而して斯かる妙機は何人にも生れ乍ら父祖より賦與せられてあるのであるが、然も多くの所謂文明的男女は、彼の避苦享樂を中心とした安逸美食式反自然の療法を以て御つて此の大切なる自然療能力を滅却し、遂に救ふ可らざる不幸の深淵に陥りつゝあるのである。

「こ」女の如きも亦正に其の一人であつたのであるが、幸に別所院長の活躍により其の能力を復活し、爾來專念自然の靈能に信賴し、精常の教に遵ひ、心身の活動養生の實修に怠らなかつた結果として、遂にかく妙豆に花咲く常春の樂しき世界に甦り得たのである。

未だ醫藥過信の弊を脱せずして已に醫藥に飽き、或は神靈萬能の迷信に陥りつゝ其の靈驗なきに失望し、徒らに悲觀や煩悶を日課として自暴自棄の學に出で、好んで天與の靈能を破却しつゝある人々よ！乞ふ諸君が過去の療病養生々活の結果と、第十一例「ま」「か」氏の治験實談や第八例「ま」「い」氏の奇蹟的治験例とを比較對照して更に活養篇を心讀し、以て活修養即活養生の眞價を翫味せられたい。

(大正九年八月T.S.生記)

大正十年六月廿五日印刷
大正十年六月三十日發行

價金壹圓八拾錢

著作權所有		著者	別所彰善
精常活養篇附		發行者	精常院著作部
		大阪市内區阿波座二番町一番地	
		日本印刷製本株式會社	
		代表者 堀越幸	
發行所	大阪市内區唐物町一丁目七番地		
	精常院		
	電話 船場三六六〇番 振替 大阪一三九〇番		

60
634



終